

アーカムで思いを叫ぶ 者

遠藤

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狂乱の20年代と呼ばれる1920年代アメリカだか光あるところには影有り。ギヤングが暗躍し、人種差別が吹き荒れる。そこに差別撤廃を目指して奮闘する1人の青年がいた。

しかし彼は予期せぬ事で狂気の世界へと関わることになる。

目次

物語は動き出す。

アーカムで思いを叫んだ者	人物紹介	1
青年は先を思いやる		5
青年は思考する		9
青年は思考する	〈解説〉	14
青年は天井を見上げる		18
束の間の芸術鑑賞?		22
太陽と月は恋するののか?		30
図書館へ		34
青年とビヤーカーとカクテル		37
カール・スタンプオードと悩み		

45

夜の王と秘術

友からの手紙

49

波紋

56

番外編 夕泊 蘭子の日常

61

番外編 2 夕泊 蘭子の回想

66

闘いへ

93

生命の熱

100

番外編 3 夕泊 蘭子の回想 2

113

The country rising

sun

物語は動き出す。

アーカムで思いを叫んだ者 人物紹介

主人公

名前：エドガー・ベックマン

職業：人権活動家（副職あり）

年齢：24 / 性別：

男

出身：ノルウェー

髪の色：こげ茶 / 瞳の色：灰色 / 肌の色：白

〈能力値〉

HP15 MP16 SAN85 / 99

STR15 CON16 POW16 DEX14 APP12 SI

Z14 INT16 EDU18 アイディア80 幸運80 知識80

回避28 ダメージボーナス1d4

・技能・

《こぶし》50% 《キック》50% 《マーシャルアーツ》50% 《ショットガ

ン》40% 《拳銃》50%

《応急手当》50% 《精神分析》50%

《図書館》55%

《運転（普通自動車）》

50%

《ナビゲート》16% 《信用》35% 《説得》75% 《母国語（ノルウェー語）》

《外国語（フランス語）》35% 《外国語（英語）》35% 《芸術（演説）》30%

《経理》21%

《心理学》75% 《法律》30% 《歴史》50%

収入7500\$ 貯金10000\$

・最終学歴・ケンフォード大学心理学部卒業（ケンフォード大学はこの小説の世界に存在する架空の都市ケンフォードにある大学です）

・家族構成・

父、母、おじ、兄、姉、エドガー、弟

ちなみに、父と母はM&B社と

いう名の会社の共同経営者であり、おじは下院議員であり、兄は軍士官、姉は小説家、弟はミスカトニック大学修士課程である

・所持品・

エセックス・コーチ、 S & W M10、財布、腕時計、応急キット

・その他・

子供の頃家族と共にアメリカに移住した。現在はアーカムに住んでいる。家系的な

理由と対危険人物、野生動物の為鍛えた為身体能力は高い。また、精神力、知力は元々かなりの高水準にある。

・友人・

カール・スタンフォード

エドガーの高校時代からの友人であり、数少ない親友でもある。また、アイビーリーグを首席で卒業出来るほどの知力と知識を持っている。

そして魔術師でもあり、白銀の叡智団という魔術結社に所属している。

エミリー・ペンドルトン

エドガーが人権活動家として活動し始めた時に出会った。とある小さな新聞社に勤めていてエドガーには取材のためにあいその後エドガーの考えに惹かれ友人となる。エドガーに淡い恋心を抱いている。

ベンジャミン・スミス

エドガーの事をライバル視している青年。容姿「は」エドガーより上。

ヘンリー・アーミテッジ

言わずと知れたミスカトニック大学図書館の館長。もしかしたら神話的時間に遭遇した登場人物の誰かと関わるかもしれない。(主に探索者としての姿勢や魔導書絡みで)

ノイズ

闇に蠢くものに登場したミルゴの協力者。多分やられ役になら

注意

いろいろと書いて見ましたが、僕の文章力的に上の設定を生かせないかもしれないかもしれません。あらかじめご了承ください。では少しお話も、

青年は手紙を受けとった。その手紙には青年を家まで招待したいというものだった。「へえ、僕の話を知りたいっていう人かな、よし、明日行こう。」

青年は手紙に書かれていた、電話番号に電話をかけて明日招待を受ける有無を伝え

た。
そして翌日青年はセイレム行きのバスに乗り込んだ。

青年は先を思いやる

青年はバスの大きな揺れで、目を覚ました。

く

どうやら眠ってしまったようだ気がつくとき、セイレムに着いていた。アーカムからさほど離れていないのだがどうやら疲れがたまっていたらしい、昨日夜更かしたのが原因だろうか？そんな事を考えながらバスを降りると、声を掛けられた。

「ベックマン様お待ちしておりました。私旦那様より貴方を迎えに行くよう仰せつかったウイリアムです。」

そういつて声を掛けてきた壮年の男性は車のドアを開けた。僕はそれに乗り込む。

「しかしウイリアムさんカーター氏はいい車をお持ちなのですね、ロールスロイス40／50hpシルバーゴーストとは。私もいつか高級車が欲しいですね。」

「いえいえこんな物旦那さまがお乗りになる特注車こんな物大した事ありませんよ。なんと言ったら……聞いていますか？」

「聞いていますよ。」

「ならいいんです。まあ……、けどね。」

「何かおつしやいましたか？」

「いえ、なにも」

「……」

（だめだ、この人なにを考えているかまるで分からない。まあそんな大した事じゃないだろうな。）

「そういえばカーター氏はどんなお方なのですか。」

「旦那さまですか、そうですね……」

その後の道中は他愛のない会話が続いた。

「見えました、あれが旦那様の別荘です。」

「あれがそうですか。」

はて、あの館何処かで見ることがあるような……！そういえばセイレム郊外のとある館で行方不明者が出たという話を見たな、ゴシップ誌でだけど。

「ベックマン様到着しましたよ。」

「あ、すいません。」

その後の館のメイドさんに案内されて応接間に通された。

「こちらで少々お待ちください。机の上の飲み物は好きに飲んでいただいて構いません。」

そう言ってメイドさんはでていった。

「しかし用意された酒がウイスキーにウオカにジンにパイチュウで、何で全部蒸留酒なんだよいやがらせかよ。でもせっかくだし飲むか。」

そう言い青年は近くにあつた水で酒を割りのみはじめた。

コンコンとドアがノックされる音がした。そして客人入るぞという声。

「はい大丈夫ですよ。」

そしてドアが開けられこの館の主人が入ってきた。

「君がエドガーか私がウイリアム・エンジエ・スミスだ。」

「エドガー・ベックマンです。本日はわざわざお招きいただき有難うございます。」

「うん、そうかしこまらなくて良い、何しろ私がよんだ？だからなハハハハハ。」

「はあ、」

「ところで君は人々の権利のために日々奮闘しているそうじゃないかいますぐ聞きたいところだがもう夕食の時間だこの話は食堂でしようじゃないか、こつちだ着いてこい。」

そう言われ着いて言った食堂は豪華なシャンデリアがかかかっていて、壁には何かの絵画が描かれていた、カーター氏の話の聞くと有名な絵らしがあいにく絵に疎い僕には誰な絵か分からなかった。

「エドガー君君はどうして女性やアジア系アフリカ系の人のために行動しようと思った

のかい。」

「人として当然の事をしてるだけですよ。まあそれはですね、僕は昔から歴史学が好きで古代ギリシヤやローマに興味を覚えたところから、始まりますね。ギリシヤやローマでは重装歩兵の活躍や……。」

「ほうそういうことか。」

「いえまだ話は途中です。次はイスラム教や仏教、キリスト教などに共通する平等の思想に触れたことです。それに感銘を受けました。」

「ほう……。」

話は続くそして青年は考える

この人何で僕を呼んだんだ？隠しているが会話の端々から差別的思想がもれている。どういう意図があつて僕に有効的に接するんだ、懐柔しようとしている様には思えないが。

「いあー、つい長々と話してしまったな今日はもう遅いとまっていかないかね。」

「え、、、」

青年は思考する

「え、いやごちそうまでしてもらったのに悪いですよ。」

それに下手に泊まると何されると分らないからな。

「いや遠慮しなくても良い。私なりの善意だ。」

（嘘だ、絶対何か隠している何が狙いか分からないこの男の館に泊まるのは危険だしか
し断つて機嫌を損ねたりしたらそれはそれでどうなるか分からん。くそ、どうすれば。）

「エドガー君泊まるのか泊まらないのかどうなんだ　　こたえんか!!」

バンツという音と共にテーブルが叩かれた。

「泊まります泊まります。」

「よろしい、初めからそうすれば良いんだ。」

しまった勢いに負けてつい泊まると言ってしまったどうしたものか困ったな。

青年はメイドに連れられ2階に行く

「ここが貴方の部屋です。旦那座の書齋以外は自由に行つていただいて構いません。部屋にある飲み物もお好きに飲んで下さい。」

そう行つてメイドは去つて行つた。そして残された青年は　　とりあえず飲む事

にした。

「くよくよしても仕方がない飲むか。おっこれはGold nectarじゃないかこれ好きなんだよな世界と一体になる様な感じがして。」

そう言い青年はグラスに口をつけて飲み出さなかった

(いやこれも絶対何かあるだろ多分。ん、何だあれは？オイオイなんだあの名状し難くて冒流的なシミは)

そこにはとても単なるシミとは思えない見るも恐ろしいシミがあった。 現在正

気度85↓85

が青年には特にどうということとはなかった様だ。

しばらくは起きていようと思ういやずつと起きていようそうしないと寝首をかかれるかもしれない。

ゴーンゴーンと時計が12時を伝えた。そして部屋には周りから何かを引つ掻く様な音や大型の生物が動き回る音が聞こえてきたそれも館の中だ。そしてその音は地球上の既知の生物とは何かが根本的に違っていた。そんな異様な空間の中青年は眠っていた。さすがに72時間起き続けるのは無理だったらしい。 だが音は次第に大きくなっている青年が起きるのも時間の問題だろう。

とする大きな音がした、しかし青年はまだ起きないよほど深い眠りについているのだろ

だが、ドアを破ろう

う。そして、ドアが轟音と共に破られた。そしてその破片が青年にあたり目を覚まさせる。HP15↓14

「痛て〜、一体何事だ！」

そして青年の目はそれを捉えた、それは昆虫とも類人猿とも見分けのつかない姿をしていて皮膚はしまりらがなくシワだらけて大きな鉤爪を持ち強い敵意を青年に向けていた。

「何だよあれ。」 正気度85↓85

しかし青年は強い精神力で正気を保つ

「あー、これは戦うしかないか」

そう言い青年は顔を引き締め戦闘態勢をとる。

相手が何かわからない以上ここは相手の出方を伺うべきだな。

そして化け物が最初に動いた、その鉤爪を青年には向かって振り下ろした。しかしそれは素早く反復運動を続けている青年には当たらなかつた。そして青年は反撃に出る。

「おらっー！」

が青年の攻撃も空を切る

「ぶんっ」かぎつめが振り下ろされる。が再び外れる。

「シュツ」

そして青年の強烈なパンチが化け物の腹に打ち込まれ化け物が苦悶の声を上げる。
化け物HP??↓??

怒りに任せて化け物は爪を振るう

「ぐあ」

そしてそれは青年に命中し裂傷を負わせた。

HP 14 ↓ 5

凄まじい痛い

に襲われるが青年は意識を保つそして、

「この野郎ガア。」

雄叫びと共に満身の力を込め蹴りを放つ

ドゴオオツという音と共に化け物の

体に足が叩き込まれる。

化け物HP??↓?? 化け物が悲鳴を上げるそしてメチャクチャに腕を振るう。当

然というべきかそれらの腕は青年とは全く別の方向へむかう。

「ソラア」

だが青年も先ほどのダメージで狙いが定まらない。

ブンツ 化け物の攻撃は再び外れた。

「ドラッ」

その一撃は半ば偶然とも言える完成度を持って打ち出された。それは、化け物の内臓

を叩き潰し骨を折って死に至らしめた。

化け物HP?? ↓ | 6

「はあはあやった。」そう言うとき青年はボタンと床に倒れ意識を失った。

青年は思考する

〈解説〉

・ウイリアムとの会話・

聞き耳に成功

「まあ、あなたが見ることは一生来ないですけどね。」と言う

ことを聞き取れる。

聞き耳に失敗

何も聞き取れない。

心理学に成功した場合ウイリアムが今のはまずかったのかとの思いを隠して平静に努めていることが分かる。

・カーターの別荘・

アイディアに成功

ゴシップ誌でこの館に来た人が行方不明になっていると報

道されていたの思い出す。

アイディアに失敗

大きな別荘だと思う。

・宿泊する部屋・

目星成功

ベットの下のカーペットに僅かに血がついているのがわかる。さら

にベットの裏を見ると血がべったり付いているのが分かる。またこの場合0 / 1 d 2 のSAN値チェック。

目星失敗　　気のせいかと思う。

また家具の裏などを見れば何かの爪痕を発見出来る。

POW×2に成功すれば別荘にこの世ならざるモノがあると感じる。失敗の場合は何も分らない。

・図書室・

本編では行けなかったが、もし行っていた場合図書館ロールをすることが可能で成功した場合空鬼について書かれた本を見つけられる。よんだ場合0/1d3のSAN値チエク。またSAN値が減少した場合その数値だけ空鬼との遭遇時のSAN値チエクが軽減される。　　失敗の場合はグリモワールのソロモンの鍵をみつける。

・遊戯室・

目星に成功すれば一瞬奇妙な生物を見ることが出来る。

〈深夜〉

聞き耳に成功すると部屋のまわりを何か徘徊しているのが分かる。しかし部屋の外を見ても何もいない。

また幸運に成功するとベットの中から前の宿泊者のメモが見つかる。

〈宿泊者のメモ〉

ああ、何故こんなところにとまってしまったんだろう。こんなことになると分かって

いたら無理にでも断つたのに。もう私は長くないだろう。ならせめて次の宿泊者の為と恐怖を紛らわすための手記を残そう。あの怪物はどこにでもあらはれる。その名前は、、（以下判別不能）

・空鬼・ 独立種族

ドアを破つて入つて来たのはストレス発散のため。

〈ステータス〉

STR18 CON17 POW11 DEX12 APP0 SI

Z14 INT8 EDU6 ダメージボーナス1d4

《鉤爪1d8+db》30%

装甲3

空間を自由に移動する神話生物。異界的な匂いがするらしい。 [博物館の恐怖]

ハワード・フリップス・ラブクラフト著より

そして、戦いの後どうなったのか少しだけお話しします

空鬼が撃破後

「やりましたね旦那様」

「ああ、これであの目障りな小僧も死んだな。」

「いや、空鬼は倒されたぞ。」

「何！何だお前どこから入った。」

「それは言う必要はない。何故ならお前らはここで死ぬんだからな。」

そう言う侵入者は背筋の凍るよ様な雰囲気を放っていた。

「ま、まて目的はなんだ金か？」

侵入者が腕をふるった。

そしてその夜館に絶叫が響き渡った。

「そうか……。！おいそれならなんでお前はもう来てるんだよ？」

「俺が探偵をやっているのは知っているな。」

「ああスタンフォード探偵事務所だな。」

「それでなお前が会いにいったカーターとか言う奴はKKKの様な組織の一員だったらしくてな調べてきてくれと依頼を受けて調べていたんだ。そしたらお前が、奴の別荘に入っていくのを見たんだ。それですぐ近くの宿で泊まっている時お前の悲鳴を聞いて館に飛び込んだと言うわけだ。」

「そういえば君は耳がよかったな。」

ちなみにカール・スタンフォードはc o cで言うところの《聞き耳》95%である
「そしたらお前がカーターの奴に切られているd「おい、まあ僕がカーターに切られていただ」と。ああそうだ。」

「そんなはずはない。僕はなんだかよく分からない化け物に襲われて傷を負ったはずだ。」

「化け物？何をいつているんだそんなものいるわけ無いだろ。現に俺はお前が奴に殺されたかけたところを見たんだしな。多分夢でも見たんだろう。」

「でもー！」

「まあとにかく今は休め。あんまり騒ぐときぎずにひびくぞ。」

「それじゃあ俺は仕事があるからもういくぞ。早く怪我を治せよ。」

そういつて青年の親友は病室から出ていった。

「「エドガー大丈夫か！」」

「兄さん！」

「エドガー！無事か！」

「ベックマンさん！」

「母さん、兄さん、フィリップ、エミリー、ベン。」

「お前が刺されて聞いて心臓が止まるかと思つたぞ。なんでもおまえを泊めた奴はかなり危険な奴だつたそうじゃないか。これからは相手のことを事前に調べてからいけよ。」

「ごめん、兄さん心配かけて。」

「私はエドガーが生きていてよかつたよ。もし何かあつたら、うつつう。」

「大丈夫だよ母さん。僕はこの通り無事だから。」

「僕は君は無事だとはじめから思つていたぞ。」

「ありがとう。ベン。」

「ふん、感謝される様なことはない。」

「ベックマンさん無事でよかつた、本当に良かった。」

「ペンドルトンさん心配をかけてすまなかつた。」

「兄さんは色々な人に目をつけられているんだから気をつけてよ。」

「ああ今度からそうするよ。」

その後青年の他の家族たちが見舞にやって来たりした。そして3週間後青年は退院した。

現在HP16

束の間の芸術鑑賞?

青年はエミリー・ペンドルトンとポストン美術館に来ていた。ポストン美術館はアメリカ合衆国有数の美術館でアーカムから車で1時間ほどだ。

「ベックマンさんこっちはです。」

「ああ今いくよ。」

どうやら喜んでくれた様だ。チケットが2枚当たったから誘えたんだが断られなくて良かった。しかしなんでカールの奴はエミリーさんをさそうよういったんだ？
しばらくして

「あれ？なんかあそこ人があまりいませんね。」

「確かにあまり人気のない絵なのかな？」

「まあ、瑠璃の額縁を白く塗りたくってある絵なんて奇抜ですね、、、 z z z」

「ペンドルトンさん！うつつあ・・・」バタン

2人は意識を失った。

「、、、さん、ベックマンさん、ベックマンさん」

名前が呼ばれている、それにどうやら体が揺さぶられている様だ。目を開けるとエミリーさんが僕を起こそうとしていた。

「ペンドルトンさん?、ここは一体?」

そこは一面真っ白くて正方形の部屋で中央に机があり四隅には赤、青、白、黒の木製の鍵のない扉があった。 ベックマン現在正気度 89 エリナ正気度 6

0

2人はこの異常事態を前になんとか平静を保つ。

その後少し落ち着いた2人は部屋を探索する。

机の上には瑠璃色の薔薇とメモがあった。

「おいおい、瑠璃色の薔薇なんてきいたことないぞ。」

「ほんとですね、なんなんでしょうかこれ?」

「それでメモには何が書いてあるんだ? なになに・・・」

・メモの内容・

「私のアトリエへようこそ。その薔薇は貴方の*（掠れていて読めない）、朽ち果てるまですら楽しんで。」さらに裏面を見ると「真実は瑠璃色だけ。」と書かれていた。

「真実は瑠璃色だけ、どういうことだ?」

「どういう事なのか分かりませんがとりあえず 出口を探して見ましょう。」

「そうだね。」

そういつて僕とエミリーさんはまず青い扉に向かった。

その扉には『帰りたいなら瑠璃色を』と書かれたプレートがかけられていた。

そしてその向こうはさつききの部屋と同じ正方形でその部屋は薄暗いオレンジ色の照明に照らされていて真ん中に青い革椅子がありその上には子供がすわっていた。不覚にも僕はその子の可愛らしさに惹きつけられてしまった。

「うわーすごく良くできた人形ですね。」

「え、人形？」

「はいすごく良く出来ているけど人形ですね。」

そうなのかー(棒) は、いかんいかん気を引き締めないと

「？」

「ん?この人形ゼンマイを握っているな。」

「本当ですね。あ、この穴に刺して回すんじゃないですか?」

そう言いエミリーはゼンマイを巻き始める。

「ちよ、いきなりきけんじゃないか。」

「心配しすぎですよ。ベックマンさん。」

そしてゼンマイが巻き終わり、人形がキリリと動き出した。

ベックマン現在正

気度 89 エミリー正気度 60

2人ともなかなかメンタルが強い様である。

そして人形は数度その瑠璃色の目を瞬きさせると2人に向かって丁寧にお辞儀をし「初めまして、お姉ちゃん達が起こしてくれたの？」

と2人に話しかけた。

「まあね、そうだよ。」

「お嬢ちゃん名前はなんていうんだい？」

「名前？そんなよないよ。」

「そう、ところで此処は何処なんだ？」

「お母さんと私の部屋。」

「お母さんが誰なのか教えてくれるかしら。」

「？お母さんはお母さんだよ。」

「僕たちは此処から出たいんだけどどうしたら良いかわかるかな？」

「わからないよ。でも安心して出るのに協力してあげるから。」

「「ありがとう」」

そうして2人と人形は最初の部屋に戻ってきた。

その時赤い扉からカチャリと音がなった。そして人形は薔薇を見つけるなり触ろう

として指を切った。そして青い血が流れた。

「青い、、、血。」

「何いつているんですか。絵の具ですよ。」

「そうなんだ、お嬢ちゃん大丈夫かい?」

「うんこれくらい平気だよ。」

「うんでも絆創膏を貼っておこうね。」

青年はそういつて人形の少女に絆創膏を貼った。

「お兄ちゃんありがとう。」

「どういたしました。」

次に2人は赤い扉の部屋に向かった。その扉には『赤は嘘つき』というプレートがか
けられていた。

「ちよとまつてください中から何か笑い声の様なものか聞こえます。」

「なに!、、、二人とも下がっている。」

そうして、青年は2人を下がらせ、扉を影にしながらくつくりと開け中を覗き込んだ。
中は長い通路になっており、床には赤い絨毯が敷かれていた。壁には照明のほか赤、黒、
白の額縁に入った人物画が等間隔に並んでいた。

「入っても大丈夫そうだ。」

そして2人と人形は部屋に入っていた。そして部屋の奥まで歩いていくと部屋の一番奥に大きな木製の額縁に白い絵画が飾られていた。

「瑠璃色の額縁が一つもありませんね。」

「そうだね。」

その時人物画が2人を見つめあざわらうかのようにクスクスと声を上げた。

ベックマン現在正気度88 エミリー正気度59

「なっあああ。」

「え、えっえっえっ。」

「あら、見ない顔ね、新入りさん。」赤い額縁の女が話しかける。青年は深呼吸をしてから言う。

「いや、違う。僕たちはここから出たいんだ、君たちは何か知っているのか?」

「ああ、それなら瑠璃色の薔薇があったでしょう。あれをすり潰して額縁に塗れば良いのよ!」

赤い額縁の女が言う。

「人形だ!人形を殺せ!そいつの血で額縁を塗るんだ!」

黒い額縁の男が言う。

「確かにどこかになにかがあったような、、、?忘れちゃったなあ。」白い額縁子供が言

う。

「!! 白い部屋に行くぞ。」

「ちよと、ベックマンさん!」

「待つてお兄ちゃん。」

青年は黒い扉に『黒は乱暴』というプレートがかけられているのを思い出した。そして赤い扉の部屋の肖像これから一つの結果を出していた。

そうして2人と人形の少女は白い扉へ向かっていった。その扉には『白は忘れん坊』というプレートがかかっていた。そして扉を開けて入るとそこは白い壁の正方形の部屋で、床は木でできていた。部屋の壁際には小さな本棚があり、床にはいくつものキャンバスが立てられており、ダンボールが積み上げられていた。そして青年はダンボールの中を探す。そして、

「あつた瑠璃色の絵の具だ。」

「ベックマンさんどうしたんですか。」

「詳しい説明はまた後だ。赤い扉の部屋に戻るぞ。」

く赤い扉の部屋く

青年は額縁を瑠璃色に塗ると、真っ白な絵画が波立ち現実世界の情景が映し出された。

「まって、お兄ちゃんお姉ちゃん私をも行く、ほかの子たちと遊んで見たいし、外にも出て見たい。」

「いいの？もうもどれなくなるかもしれないんだよ。」

「いいの、それでも外に出たい。」

「わかったみんな外に出よう。」

「うん！」「はい！」

そして2人と人形いや三人は額縁から外へ出ていった。2人が気づくと絵は無くなっており、人形もいなくなっていた。係員に聞いてもそんな絵はなかったそうだ。

2人は腑に落ちないものを感じながら美術館を後にした。

〃
〃

「という事があったんだか、君はどう思う。」

「いや、そんな話どうって言われてもな。まあお前はそんな事で嘘を言う奴じゃないし。」

「ま普通はそう言うよな。」

そう言い青年はコーヒーを飲みほした。

そしてその目線の先には瑠璃色の目をした少女が同年代の子供達と一緒に楽しそうに遊んでいた。

太陽と月は恋するののか?

青年は目を覚ました。そこは四方を白い壁で囲まれた部屋で部屋の中央にあるソファーにはエミリー・ペンドルトンが鎖で繋がれていた。

「え?、ペルドルトンさん!!」

ベックマン現在正気度97

「!その声はベックマンさん! 助けてください目が見えないんです。」

エミ

リー現在正気度65

エミリーは後ろ手に拘束されており動くのは難しそうだった。

「目が見えない?ここから出れたらすぐ病院に行きましょう。失明したら大変だからね。ちよとまってくれ、ちよと外れるかためしてみる。」

そしてその手錠は力に自信のある青年の力でもどうにもならなそうなものだった。

そして、

「ん、これは月のマーク。すいませんペンドルトンさんこれはちよと外せそうにないです。鍵がないか探して見ます。」

そうして青年は部屋の中を見回す。ソファの前の壁に白い扉があり、ソファの横に低いテーブルが、ソファの傍に背の高いランプがある。また、ソファの背後の壁に柵が

置かれていた。

(まずは机から行くか。机に近づいてみると机の上にはメモがあつた。メモにはええと、なにになに、)と、

・メモ表面・

『彼の目は貴方の目。貴方の目は彼の目』 『時間がきたら、もう帰れない』

・メモ裏面・

『人の出会いは一期一会』

「これじゃよくわからないな。ん、『仲良くすれば助けられる。救うも殺すも貴方次第』これは言葉の通りの意味なのか？」

「うゝベックマンさん。」

「エミリーさん！大丈夫です僕が付いてるから。だか、泣かなくてもいいんですよ。」

そういつて僕は彼女の手を握った。そうこうしているとふとポケットにないか入った感じがした。中を確かめてみると鍵が入っていた。明らかに超常現象だか彼女を心配させるわけにはいかない。僕は努めて明るく声を出す。

「エミリーさん鍵です。鍵が有りました。」

そして彼女の手錠を外す。

「それともう少し待ってください。」

「エドガーさん?」

僕はそういつて柵の中を確認する。上段には刃渡り20センチほどの包丁が入っていた。これを入れたやつ of 思考を考えると背筋が寒くなった。 現在SAN値

97

下の段には目薬とメガネとブルーベリーが入っていた。それをとって彼女のところに戻る。

「エミリーさん今からこの目薬を指すよ。」

「それ大丈夫なんですか?」

「これにはあるべき姿に戻す効果があると書いてあるから、引つ掛けでもない限り大丈夫だと思おうよ。」

我ながらよくこんな事言えたものだどうやら僕も追い詰められているらしい。そして

「治りました!目が見えるようになりました!」

「そうか、よかった。それじゃあさっさとここから出よう。」

そして扉を開けるとすぐに眩く暖かい光に包まれた。ふわりと浮遊感に包まれたと思つた瞬間2人の意識は白く混濁して行つた。

気がつくと僕は自分の部屋にいた。どうやら時間はほとんどたつていないようだ。

そして明日エミリーさんと話そうと思いつながら、安堵感から眠りに落ちていった。

図書館へ

青年はポストン公共図書館にきていた。

ふー、やつぱり図書館は落ち着くな。さてとしばらく中断していた。希少本読書始めるか。

「希少本自体は有るんだが、なかなかこれはという本がないな。」

「お困りのようですね。」

声をかけられて振り返るとそこにはおそらく中東の人間だろう非常に整った容姿をした男性が立っていた。

「こんにちは、私テトラと申します。すみませんが誠に勝手ながら先ほどの話聞かせていただきました。それでしたらいい本が有ります。読んだら誰でも頭から離れなくなるような。」

そういうテトラさんはどうやら職員の方だった。

「本当ですか。是非お願いします。」

そういうとテトラさんは「こちらです。付いてきてください。」といって歩き出した。それにしても誰でも頭から離れなくなる本とは一体？

これは『レメゲドン』かまあ読んでみよう。

「まあ、色々と参考になつたな。これは今書いている小説に活かせそうだ。」

さてとそろそろ他のところに行こうか、

あのあと僕は『80日間世界一周』、『海底二万マイル』を借りることにした。海底二万マイルはボストン公共図書館だけでも6回借りたことがある。さてと今日は帰ろうか。明日は講演会もあるし。その後は副職でやっている外国語教師の仕事もあるし。

そのようなことを考えながら青年はアーカム行きのバスに乗りボストンを後にした。これから神話的出来事に巻き込まれることになるのも知らずに、

青年とビヤーカーとカクテル

青年はアーカムでバスを降り自宅に向かっていた。

「あの、少しよろしいですか？」

振り返るとそこには小柄で可愛らしい顔立ちをした少女が立っていた。

「何でしょうか、お嬢さん。」

少女は少し恥ずかしそうに顔を赤らめて

「あの、Hは好きですか。」

と訪ねてきた。(え、どういう事だ。)

「好きですか？」

「ちよと、」

「好きですか？」

(そう言いながら少女は涙を浮かべていた。これは好きだといったほうがいいのかな。)

「好きだけど。」

そう答えると少女は嬉しそうに

「そうなんですか！」

そういうと少女の姿が突然変わった。それは翼の生えた、カラスでもなく、モグラでもなく、ハゲタカでもなく、腐乱死体でもない、吐き気を催す邪悪な怪物。怪物は嘲笑うように青年に向かって「HはHでもHEL LのHだがなあ!!？」と叫びながら襲いかかってきた。

「!!」

「HはHでもHEL LのHだがなあ!!？」

ベックマン現在正気度97↓96

「また化け物かよ。ああいいよ。やってやるよ。そつちが闘いたってんなら闘ってやるよー!」 「オラア!」

「素晴らしい青年は蹴りを繰り出した。がその攻撃は空を切る。

「チツ。」

「おいおいどこを狙ってやがるんだツ!」

「素晴らしい怪物は爪を振り下ろした。二回繰り出されたそれは一発は青年を捉えきれず空を切ったがもう一発は青年に向かっていった。が、青年は冷静に己の技術を持って受け流された。

「受け流してるんじゃないぞ!」

青年は答えず反撃する。

「ドリャー！」

青年の強烈な蹴りが繰り出される。あえて表すならドコオやメシイというような音と共に怪物の叫びが上がる。

「痛つてえ、やりやがったな。もう許さん！」

怪物HP??↓??

そう言い怪物はふらつきながらも攻撃を繰り出した。が、全て外れた。

「オラア」

青年の蹴りが放たれる。それは怪物の肉を裂き骨を砕き内臓をメチャクチャにした。

「きいやああー!!!あああ、あが、あ」 怪物HP??↓4

怪物は絶命した。その死体しばらくは痙攣していたがやがて動かなくなった。

「勝ったか。はあーこの死体どうしよ。いつそほつとくか。帰ろ。」

誰か周りにいたりしないだろうな？ 前方後方、側面とも人影はないか。音

も特に聞こえないし大丈夫かな。それにしてもあの屋敷に行つてから色々と非日常的な事に巻き込まれるな。何かの呪いか？ 今日はまだ寝よ。ベックマン現在正

気度96↓97

ようやく帰ってきたなさあ、早くベッドに入ろう。

そう思い寝室の扉を開けた時僕は意識を失った。

「いっは、どっだ?」

そこは落ち着いた内装でいくつかのイスとテーブルが置かれており、部屋の中は静かなジャズが流れていた。

「またかよ、何回目だこれで。」 ベックマン現在正気度97↓97

3度目である。青年が困惑していると。ドアの開く音とベルがチリンチリンと可愛らしく鳴り響いた。

「マスターはいるか?酒をたかりに来たぞ!」

店の中に入って来たのは、20代ぐらいの若い人物。雪のように真っ白な長い髪に、銀色の瞳。染み一つ無い陶器のように滑らかな白い肌の、まさに絵にも描けぬ美しさを体現したかのような人であった。COCでいえばAPP21はあるだろう。

「……ん?何だ、マスターはいないのか。と、おやおや、随分珍しい客がいるではないか」

彼女?はそういうとあっけにとられていた僕に話しかけてきた。ちなみに彼女の声はとてもいい感じのハスキーボイスだった。

「あの変なことを書くようなんですけど、ここはどこなんですか?」

「ここは私と同じく魔術師が経営してるバーさ。ここはマスターの腕はピカイチだから

よくここに足蹴に通ってるんだ。ここなら魔術結社にも追われる事も無いし何かやらかした場合でも避難経路として有効活用させて貰ってる。

このバーは、私のような魔術師が来る事もあれば、人ならざる者が来る事もある。まあ、大抵の客は殆どがドリームランドの住人だな。

故にお前のようにただの人間が来れるような場所では無いのだが、極稀に迷い込む奴もいる。

幸い、騒いだり乱闘はこの店ではご法度だから、相手がどんな化け物であれ人間を襲う事は無いから安心しろ。じゃないとマスターの死の鉄拳が飛んでくる。あれは冗談抜きで痛いぞ。」

「そうですか。詳しいご説明ありがとうございます。それでどうしたら帰れるかも教えてもらって良いでしょうか。」

「私の力なら、マスターがいなくともお前を元の世界に帰すのは、針穴に糸を通すぐらい容易い事だが、きつちりお代は頂くぞ」

「お代とはなんでしようか？僕にも払えないものはあります。」

「願いに代償は付き物だ。なあに、これくらいなら大した事じゃないし、すぐに準備できる、マティーニだ。マティーニが飲みたい」

「マティーニですか。それはいいんですが、このバーのものを勝手に使ってしまったも

いいんですか?」

「え?勝手に物を使って良いのかって?私が良いと言うから良いんだ。大丈夫だ、問題ない」

「わかりました。しばらくお待ちください。」

ええと、この本棚に作り方が載っている本があるといいんだが。
あった。

お、

・マティーニ

マティーニとは、カクテルの王様と言われる程、世界中で人気がある飲み物。その理由として、シンプルな材料にシンプルな技法で作られるカクテルのため、一切の誤魔化しは利かず、腕の差で味が変化する。

「どんなものが飲みたいのですか?」

「ジンとベルモット。」

ジンとベルモットか、、、困ったぞどこにあるんだ。

「あのジンとベルモットつてどこにあるかわかりますか?」

「多分地下にあるんじゃないかな?確かキッチンの所に地下の入り口があったはずだ」

「ありがとうございます。」

言われた通りキッチンに入ると奥に地下への戸の付いた階段があった。ちなみに、キッチンはこまめに掃除がしてあるようで新品のようだった。

（地下には沢山の年代物の酒があった。すごいな禁酒法のこの時代、こんなのを酒好きが見たら我慢するのは大変だろうな。）　しばらく探すとジンとベルモットが見つかつた。戻る時冷蔵庫からオリーブを取つていく。

「あのカクテルを作るのに必要な道具はどこにあるんですか？」

「物置部屋じゃないか？カウンターの真後ろにある茶色の扉がそれだ」

「ありがとうございます。」

言われた通り茶色い扉を開けると物置だというものがあるがあまり置かれてなく、ホコリひとつないくらい綺麗だった。ここのマスターはよほど綺麗好きらしい。しばらく部屋を探すとダンボールの中から必要な道具がみつかった。

「それでは素人ながら、マティーニを作らせていただきます。」

僕は本で見たことを思い出しながら、マティーニを作る。そして、

「これは、なかなか素晴らしいな！いやはや大した期待はしていなかったのだが、考えを改めよう。うんうん、実に満足のいく味だ、約束通りお前を元の世界に返してやろう。それと私の舌を満足させてくれた礼だ。お前にこれをやろう」

彼女がそういうと軽い頭痛がして、次第に眩暈ができて気が付いた時にはベットの

上で寝ていた。あれは何だったのだろう。やけに現実感がない、だが、僕には今ないはずの知識がある。あれはやはり現実だったのか？ いやしかし、

おっとこんなことしてる場合じゃないもう朝だ早く準備しないと。

僕は今無事に家にいるんだ今はそれでいいか。

カール・スタンフォードと悩み

最近俺には悩み事がある。それは友人が、友人のエドガーが神話的事象に度々巻き込まれている事だ。

最初話はテレンス・カーターの野郎の別荘の監視に行っていた時の事だ。近くのホテルを借りて奴の別荘を監視しているとあいつが入っていくのが見えた。その時俺はやばいと思った。エドガーの仕事から考えてテレンスの奴はあいつのことを疎ましく思っているはずだ。しかも、テレンスはある情報屋によると空鬼を従属させているとの事だった。

そして案の定エドガーは空鬼に襲われた。その時俺は助けに行くのを躊躇ってしまった。理由は色々あるが一番は自分がこちらの世界の住人であることを知られたくなかったからだ。そうこうしている間にエドガーは空鬼を倒してしまった。その時俺は駆け出した。テレンス・カーターの始末はいくつかの制限が付いているとは言え一応認められていた。そして屋敷に突入した。それからの事は敢えて回想せまい。とにかく俺はエドガーを助け出し病院へ送った。

その後の事情聴取を及び後始末はランコさんがやってくれたらしい。まったくあ

の人には頭が上がらない。

その後の俺は適当にエドガーを誤魔化した。人間心理に鋭い奴のことだ、いくら事実らしい嘘を言っても見抜かれるだらう。だから俺は適当な事を少し言つて声色や表情に氣を使つてすぐに病室をでた。

こんな事しても氣休めにさえならないだろうに何をしているんだろう。

そしてそれはその時で終わらなかつた。今度はペンドルトンと共にアトリエらしき異空間に飛ばされたらしい、ついでに歸つて来た時一緒に異空間で出会つた人形も一緒に来たらしい。俺もそれらしきものを見たから否定できない。それにしてもその事を話している時の態度落ち着きすぎていると思ふ。思つたより凶太いな。しかしペンドルトンも巻き込まれたのか、どうしよ。

その次はペンドルトンと共に謎の部屋へ連れ去られたらしい。話を聞いた時またかよと思つた。

あと2人の仲が進展していた。

そして今度はこの覚醒世界ではない世界にあるバーに迷い込んだらしい。それでその時でエドガーがあつた、ブライスと名のる魔術師によればそこは魔術師が経営しているらしく、そこには人ならざるものもよく来るらしい、主にドリームランドの住人らしいが。それにしてもブライスとは何者だ？話を聞く限り、特に詠唱も準備もなくエド

ガーを元の世界に返したらしいが、俺の知っている限りにそのような魔術はない。

それに話しを聞く限りエドガーの前で神話知識を躊躇無く話したらしいじゃないか。まあエドガーの神話知識が増えてないのが救いか。

「スタンフォード何をしているのですか。」

「ユウドマリさん。もしかしてもう時間ですか?」

「ええ、早く行きますよ大魔導師グランドマスターがお待ちです。」

「あのユウドマリさん今回も運転するんですか?」

「当然です。私の楽しみですから。」

そう言つて彼女はほほえんで見せた、その笑顔について見とれてしまった。

「何しているんですか、早くしてください。」

「はい。」

俺は助手席に乗り込みんだ。そしてランコさんの運転するダイムラータイプ45は動き出した。

「あの、ユウドマリさんブライスっていう白髪の美形の魔術師をっていますか?」

「どこでそれを?」

「友人からです。」

「そうですか、それはまだあなた方が知るべきことではありません。エドガーさんにも

伝えてください。」

「はい。」

やれやれお見通しか。それにしてもあのユウドマリさんがああいうとは、一体ブライ
スとやらは何者なのだ？

カールの疑問を残したまま2人は目的地に向かった。

夜の王と秘術

友からの手紙

（ベックマン家）

「ふう、やっと終わった。長編小説は初めてだけど書くのが大変だったな。」

その時、ドアがコンコンとノックされた。

「どうぞ、あ、姉さん。」　姉さんだった。

「エドガーあなた宛に手紙が届いているわよ。はいこれ、じゃあ確かにわたしたからね。」

そういうと姉さんはさっさと出て行ってしまった。受け取った手紙を見ると、

「イリヤからの手紙か、あいつからもらうのは2回目だな。どんな話だ？」

・イリヤ　ナスターセの手紙・

我が親愛なる友人エドガーへ、私はいま恐ろしい事態に直面している。これからここに書くことは常識ではあり得ないことで、とても信じれる様なものではないだろうがどうか信じて欲しい、この手紙に書くことは私が体験したり、見たり調べたりしたことで全て事実だ。もしかしたら君は私が何かタチの悪い妄想に取り憑かれたのではないか

と思うだろう。私もそう思いたい、だが私が得てしまった証拠物からもうそういう言い訳も通用しそうにない。だから手紙にして君に記そう。

事の始まりは1年前私がケンフオード大学、大学院を卒業し、故郷に帰ってからしばらくしてのことだ。

私の故郷リターデスタットウインドは三方をを山に囲まれたのどかな田舎町なのは君も知っていることだと思ふ。そこで、ある事件が起こったのだ。それはとある男が変死体となって見たかったことに始まる。その男は全身の血が流れて殺されていたのだ、さらに首筋に何かの噛んだ跡の様なものが付いていた、しかも警察の操作にもかかわらず、犯人の証拠は見つかっていない。その時私はまだこんなことになると思つてもいなかった。

おかしくなり始めたのは次だ、また同じ様な死体が見つかったのだ、小さな町で同じ手口の殺人が2回も起こったんだ、住人達は騒然となった吸血鬼の仕業じゃないかってな、もちろん私は吸血鬼なんて信じていなかったから、そんなこと気にも止めなかった。だが、3回目が起こった。そして私は、その時何としても犯人を捕まえて故郷の平和を守らねばという義憤に駆られていた。そして独自に調査を重ねていくうちに3年ほど前に越して来たとある雑貨屋の女店主が怪しいと結論に至った。名前をシルヴィアというらしいが偽名だろう。

そしてこの人物を調査していく過程で恐ろしい事実にとどり着いた、いやたどり着いてしまったというべきだろう。その日私は奇妙な予感がして危険を承知で鉄砲をもつて夜森の中を歩いていった。そうすると森のすぐ近くの家に例の女店主が町の若い男と連れ添って入っていくのを見た。そしてこれは、遠くから窓越しで見ていたのでよく分からないが、連中はことに及ぶと思つて一旦外すべきかとおもつたんだがつぎのしゅんかんそれがの行われた。なんと奴はその若い男に噛み付いたので、彼は何とか振りほどこうとしていたがどうやらすさまじい力で組みつかれている様で、引き剥がせないでいた、そして動かなくなつた。だがもつと恐ろしいのは奴が森の中にいるはずの私の方を見たのだ。わたしはこわくなつての逃げ出した。そしてその日の翌日4人目の犠牲者が見つかった。

だが、問題はそれで終わらなかつた、殺されたもの達の墓があばかれたのだ棺桶はまるで内側から、破つた様に壊されていた。だが私は知っている墓はあばかれているのではない彼らが魔物となつて蘇つたのだ。私は見たのだ、私はその様子を写真に収めることに成功したのだ。

奴は本物の吸血鬼だったのだ。そして私は深追いしすぎた様だ、この手紙が届く頃には私はもうこの世の住人ではないかもしれない。

だが君ならこの問題を解決できるという奇妙な確信があるのだそして、君ならあの

女を探していたと言う奴の不思議な力をものにできるかもしれない。その男が今どこにいるかはもう一枚の手紙に書いてある。巻き込んだことになってすまない。だが君なら絶対にやり遂げられるはずだ、どうか私の故郷を救って欲しい。

イリア ナスターセ

「おいおい、何だよこの手紙この科学の時代に吸血鬼だと。だけど一概に否定も出来ないんだよなあ、今までの事もあるし、それにもし本当にイリヤの奴が言っていることが本当だとしたら放ってはいけないのだが、僕にどうしろと言うんだ大体不思議な力を身につけれるて、魔術か何か？」

とにかくこんな話信じてもらえるのだろうか。エミリーなら、信じてくれるかもしれないが彼女を巻き込むわけにはどうすれば、、

コンコン、再びドアがノックされた。

「入るよ兄さん、、、お客さんが来ているよ。」

「ああ、分かった。」

「こんにちはエドガーさん私はジョン・スミスと申します。本日はお会い頂きありがと

うごきます。」

「エドガー・ベックマンです。スミスさんですねどの様なご用件でしょうか？」

「その話を話すためにも私の借りている家に来て欲しいのです。ごちそうしますよ。」

「その話は貴方の家ではなくてはならない様なはなしなんですか？」

「はいそうです。お願いできますか？お時間は取らせません。」

何だこの感覚はこの男についていけば何か分からないが何か分かる気がする。

「わかりました、今準備します。」

くジョン・スミスの借家く

「それで、スミスさんお話というのは。」

「それはですね、、、、テメエに死んだもらうっていう話だよ!!」

「へ？」

ブイン、ジョンの腕かがすぐ近くを通り過ぎた。

「ち、当たらなかつたのか。」

「スミスさん一体どうしたんですか!!」

「どうしたつてえ、そんなものてめえを殺そうとしているに決まっているだろう。」

ブン、再びジョンの腕が空を切った。

「何故ですか。」

「そんなのあの方にイリヤの愚か者の友人を殺せって言われたからだよ。」

「なにい！、どうやら君には問い詰めなければならぬことがかる様だ。シエアツ！」

ビュン、青年の鋭い蹴りが放たれるが相手を捉えるにはいたらなかつた。

「ひっひーそんな事をしても無駄だテメエは俺に殺されてミンチになるんだよう。」

そう言つて放たれた攻撃は青年を捉えることができなかつた。

ブンツ、メシヤア、青年の反撃がジョンに突き刺さつた。

「痛え、よくもやりやがったなこの野郎!!」 ジョンHP??↓??

ブンツ

「畜生、何で当たらないんだよう！」

「さあ何でだろうな。オラア！」

メシヤア、再び青年の蹴りが命中した。

「ぎいやあー、この野郎この野郎この野郎があ！」

ブン、また外れる

「畜生畜生なんでだよ。」

「シエアツ！」

青年の蹴りはまた命中する。

「ガフツ。」 バタン ジョンHP?? ↓ ↓ 1

「勝ったか。おい起きろ、、、 仕方がない。」

青年はジョンに応急手当を施す。 ジョンHP 1 ↓ ↓ 4

「は、俺は一体。」

「やあ、やつと起きたか。」

「ツ、貴様あ。グツ。」

「さあ、話してもらおうか、君の知っている事を。」

「誰が話すか。」

バキツ、青年のこぶしが叩き込まれる。

「ガハア、誰が話すか。」

バキツ、

「分かった話す話すからもうやめてくれ。」

「わかればいいんだ、僕も本当は暴力は好きじゃないしね。」

そして、彼から聞いたことは僕の運命を変えることになった。

波紋

「それで、君は何者なんなんだ？」

「レスサーヴァンバイア下級吸血鬼だ。」

「下級吸血鬼なんなんだられば？」

青年はジョンから話を聞き以下のことを把握した。

・下級吸血鬼・

STR +3 CON +3 POW -3 INT -3

攻撃を受ける

ごと、または1時間ごとにHPが1回復する。

太陽光の下または、それに類似したものの影響下にある時全ての技能値に-30される。

吸血鬼に血を吸われてエキスを注入された人間になる。

「そうか。」 ベックマン現在正気度99↓97

しかし打ち負か

していた為97↓98

「な、いったんだからもういいだろ。」

「そうだな後は君を吸血鬼にした奴のことを話してもらおうか。」

「だつダメだそれはいえない。」

「ああ？」

「た、頼むもう許してくれこの通り謝「雑貨屋の女店主か。」え？なんでしつているんだ？」

「別にどうでもいいだろ。君からはこれ以上聴けそうにないしもう行くよ。」

しかし、どうしたものか、、、、そういえばミスカトニツク大学図書館にはこの世ならざるものについて書いた書物や本物の魔道書があると聞く。以前ならこんな話なんてとても信じられなかったが、あんな事を経験した後だからな。信じてみる価値はあるかもしれない。

(馬鹿め、背を見せたなそれがお前の死因よ。)

バツ

「喰らえ！」

「なにい！ぐあああ。」

ザシユ

HP 15 ↓ 12

「ヒヤハー馬鹿めこのままテメエを切り刻んでやる。」

「クツ。」

その時2人の間に割り込んで来たものがいた。

「波紋疾走！」

バリバリ

「ぐぎあああ。」

ボシユウー

吸血鬼ジョンは燃えるように溶けて行った。

「なんだあなたは！」

「私はルーカス・マクブレイン。エドガー君盗み見させて貰って悪かったが、先程の闘い感心した。君は確かに恐怖を感じながらもそれに負ける事なく、表に出さずよく闘った。しかし勇気だけでは真の吸血鬼には勝てん。ふんっ。」

ビュオ、ズボオ

ルーカスと名乗った男は指で青年の横隔膜のあたりを突いた。

「ガハア。」

「そうそう肺の空気を1cc残らず吐き出すんだ。しばらく呼吸できないだろうが、問題ない。」

「く、あ、う、なっ何だこの感覚は痛みが消えて行く！いや、回復している！貴方は一体何なんだ、僕に一体何をした。」

HP12↓15

「私は波紋使いをやっている。それとその傷は私がどうかしたのでは無い、君の呼吸が痛みを消し傷を治癒させたのだ。呼吸が起こすエネルギーを見せてあげよう。ついておいで、そしてそれを見て知った時君の運命は変わる。」

「運命が変わる？そんなのとづくに覚悟はできています。」

2人はミスカトニツク川にやって来た。

「私は君の横隔膜を指で突きそして特別な呼吸法にしたのだ。」

「特別な呼吸法？」

ルーカスと名乗る男はミスカトニツク川に入っ*て*いきカエルが乗っている石の前まで来た。

「スーハー、スーハーコオオオ。」

「な、何だあれは！」

青年が驚くのも無理はなかったルーカスと名乗る男から、不自然な形の波紋が生まれたのだ。

「これから見せるのは、君の傷を治した力と同じものだ、ルアアアア！」

ズガンツ、というような音を立てて足が割れた。

「か、カエルは？」

しかし、カエルは何事も無かったかのように泳いで行った。

「カエルは何とも無い。」

「これが仙道だ。波紋エネルギーこそ仙道パワー、私の波紋エネルギーは波紋となったカエルの肉体を伝わり石を砕いたのだ。エドガー君は既にあの吸血鬼ミカーラと闘う運命にある波紋を学ばなければ死ぬ。」

やれやれ僕の日常はどうしとこう何処かへ行ってしまうんだろう。まあ、

「教えてください波紋を。」

「もとより、嫌だと言っても教えるつもりだ。」
友人を助ける為なら喜んで乗り込もう。

番外編 夕泊 蘭子の日常

夕泊 蘭子の自宅

夕泊 蘭子はいつも通りAM5:30に目を覚ます。その後は顔を洗い、朝食を食べ、身繕いをし、化粧をして(正直化粧をしなくても十分すぎるほど通用する美貌を持っているが)家を出る。

そして、車に乗りアークアの自宅からボストンの白銀の叡智団支部へ向かう。ちなみに車種はシボレー シリーズ490だ。

白銀の叡智団ボストン支部

AM7:00ボストン支部へ到着した。

「おはようございます、魔導師。」

「おはようございます、支部長

「おはようヴェイル、トム。」

彼女は白銀の叡智団の魔導師マスタでありこのボストン支部の支部長でもある。

そして、一般団員と共に活動した後、地下の団の幹部たちに用意された個室に入っていく、その部屋の本棚の下の隠し扉からさらに地下へと降りて行った。

「お待ちして降りました、支部長。命令されていた例の魔術師の搜索完了しました。」

「ありがとう、カール。それで奴はどこにいたんですか？」

「それが、つい先日ボストンに越して来たようです。その前はどこにいたか、どのような人物が協力しているかは現時点では判明していません。協力者がいる事は確かなんです。」

「そう、。でも居場所が分かっただけでも良かったと考えるべきですね。居場所が分からないと分かるのは大きな違いですからね。それで奴の住所は判っているんですか？」

「はい、***ー○○×○×です。」

「分かりました。何としてもあの旧支配者の狂信者をなんとかしなくてはね、世界に被害が出る前に。話は変わるけどカール、貴方はエドガー君について行かなくて良かったの？親友なんでしょう？」

「いえ、あいつなら俺がついて行かなくても問題ないと信じていますから。」

「そう、この世界に入ってからそのセリフが言えるのはある意味いいことなんでしょうね。」

「スタンフォード、支部長話を戻しますよ。」

「ええ、ごめんなさいジョゼフ。それでは話を戻しましょう。今後動くかをね。誰か意

見のある人はいる？」

PM3:00 会議が終わり、彼女は支部長室にいた。

「はあ、どうしたものかしらね。このボストンにはあいつ、エドワードだけじゃなくて、銀の黄昏のスタンフォードもいる、全くどうしたものやら。はあ。ため息をつけてた場合じゃないけどね。」

コンコン、とドアがノックされる。

「どうぞ、入っても大丈夫ですよ。」

「失礼します。支部長あの、貴女に個人的な話があるのですがよろしいでしょうか？」

「あらノアどうしたんですか？そんなに改まって。」

「あの、自分ずつと前から、支部長のことが、好きでした。結婚前提で付き合ってもらえないでしょうか。」

「ごめんなさい。それには答えられません。でもノア貴方が私に好意を寄せてくれてるのは嬉しかったわ。ありがとう。」

「ッ、そうですか。では自分はこれにて失礼します。支部長お疲れの出ませんよう。」

「貴方こそ、ノア。」

パターンとドアを閉めてノアは出て行った。

「ユウドマリさんそろそろ例の幽霊屋敷に向かう時間ですよ。」

「ええそうですね。、、カール貴方は恋をしたことがありますか？」

「、突然どうしたんですか。そんな事を聞くななんてユウドマリさんらしくない。」

「ちよと気になる事がありました。」

「あいにく俺はそういつた事は有りません。」

「そうですね。」

そのような会話をしながら2人は車に乗り込む。

「しかしユウドマリさんボストンにコービット屋敷以外に幽霊屋敷があつたんですね。」

「私もつい最近知りました。一体何があるんでしょうね？」

「、、ユウドマリさん。相談があるので、」

「エドガー君のことですね。」

「はい。あの時はああ言いましたがやはり心配です。あいつはあの時から巻き込まれ

ぎている。このままじゃ一体どうなってしまうか心配で。」

「もしエドガー君にもしものことが起きようとしていたらどうしますか？」

「助けます。」

「そうですね。でももしそれが無理そうだったらドアどうしますか？」

「それは、。。。」

「まあ、私も彼のことは気に入ってますからなんとかするとおもいますよ。」
「ありがとうございます。」

2人がそうして話しているうちに車は目的地に近づいていった。

番外編2 夕泊 蘭子の回想

夕泊 蘭子とカール・スタンフォードの2人は幽霊屋敷の中を探索していた。

「さっきのは危なかったですね。危うくナイフが首に刺さりかけましたよ。」

「ええどうやらここは本物みたいですね。それにしてもこうやって幽霊屋敷を探索しているとおの時の事を思い出しますね。」

そういう彼女の顔は少し悲しげだった。

「ユウドマリさん、、もしかしてあの事ですか。」

「そうです。私の事がある程度知っている貴方になら話してもいいかもしれませんね。」

「ユウドマリさん、、その。」

「大丈夫です。それにこの事を知ることが役に立つ日が来るかもしれません。」

「はあ、わかりました。聞かせてもらえますか？」

「そうですね、あれは私が『この世界』に来る前の話でした、、

「蘭子！幽霊屋敷に行かないか？」

「幽霊屋敷？なんでまた。超常の存在になら私達『加護の傭兵団』のメンバーなら結構遭

遇しているじゃありませんか。」

「まあまあ、そう釣れないこと言うなよ。実はそこただの幽霊屋敷じゃないそうだ。」

「どう言うことですか？」

「ああ、なんでもそこ一年に一度妙な噂が出るらしんだ。」

「ふう〜ん、どんな噂なんですか？」

「その建物はa市にあるんだがな、その建物は5年前の殺人事件で廃墟になっているはずなんだが、毎年7月ごろになるとそんな事は無く今も営業してるそうだ。しかも！霊山のふもとにあることから、泊まると幸運が訪れるとも言われていて「座敷わらしに合う」「不思議な力を得ることが出来る。」といったような噂もある。料理も美味しく女将も綺麗だと有名らしい。」

「また随分と突拍子も無い噂ですね。都市伝説とやらじゃ無いんですか？」

「それを確かめるために行くんだよ。旅費は俺が持つからさ、それに伊東や鈴木のも来るみたいだぜ。」

「考えときます。」

「それでいったんですか？」

「まあ、口ではああ言いましたが正直私も好奇心をもっていましたし。」

く a 市く

「なんだ、普通の旅館じゃん。タッチー騙したな。」

「全くだ、付き合つて損した。ん、2人ともどうした？」

「、、、これは幻覚？」

「おい2人とも失望するのはまだ早いぞ、この旅館本当に普通じゃ無い。何か強力な力で偽造してやがる。」

「ランランほんと？」

「っランラン、ええまあ本当です。」

「蘭子もこういつている事だしこれは本物で決定だな。よし早速突撃だ！」

「おい待て橋！」

「それからどうしたんですか？」

「普通にチェクインを済ませましたよ。」

「一見すると普通の旅館だな。従業員が幽霊である事を除いては。」

「お、お前にもそのくらいは分かるんだな。」

「そうね、私達以外のお客さんは気づいてないみたいだし。」

「今の所実害はないみたいですけどこれ明らかに異常ですよ。他の人たちに教えますか？」

「いや、大丈夫だろ悪意とかは特に感じられんし。それより早く部屋に荷物を置きに行こう。305号室と306号室だったな。」

4人はそんな事を話しながら宿泊する部屋に向かつていった。そして、部屋荷物を置いた後、

「よし探索しよう、何かあるかもしれない。」

「まあどこに何があるか、把握するのは大事ですからね。」

「二手に別れないか？俺と橘、夕泊と鈴木にその方が早く済むだろ。橘の話じゃそんな危険はないみたいだしよう。」

「はいはい、私賛成でくす。」

「それでは私達が1階。2人が2階でいいでしょうか。」

「よしそれで行こう。」

「特に問題ないな。」

く2階・橘 伊東グループく

2階は自動販売機や、トイレ、休憩所があり3階と特に違うところはなかった。

「なあ、2階の探索ってどうするんだ？部屋には他の宿泊客が止まっているみたいだよ。」

「俺に聞くなよ。」

「トイレでも覗くか。」

暇を持って余していた。

「2人が体験した事も聞いたんですね。」

「そうですね。そんなかんじです。」

くー階・夕泊 鈴木グループく

「まずはあの本立てから見てみましょうか。」

「いえーい。」

その本立てには新聞紙や古書、雑誌などが置かれていた。

「ん、この新聞紙かなり古いですね。日付は、にじんんでいるか。」

「ほんとだあ、なんでこんな古いの置いてるんだろ。」

「まあ状況が状況ですし、読んでみましょう。」

「そだね。」

それにはこんな事が書いてありました、

「惨劇！○○○（滲んでいて字が読めない）にて殺人事件」

「先日、a市にある○○○にて何者かによつて殺人事件が起こつた。犯人は行方をくらませており、現在捜索中である。殺害の方法は謎に包まれており、犯人がどのようなにして被害者たちを殺害したのかは分かつてはおらず、なにか毒のようなものを使ったのではないかという仮説が立っている。しかし、被害者たちの中にはなにか鋭いもので切りつけられたような跡がある者たちもいるため、現在逃走中の犯人は刃物を持っている可能性があるため、地域の方たちには警察から注意が呼びからている。」

「これって、このことなんじゃ」「ナンダッター！」どうしたんですかそんな大きな声を出した。」

「これ見てよこれ！」

そう言つて鈴木さんが指差した記事にはこのような事が書いてありました。

「捜査は難航。真相は闇の中ー？」 2011 8/10

「○○○で起きた惨殺事件だが、捜査が難航している。何でも、捜査中に警官が行方不明になる、警官が発狂するといったことが起こるといふことらしい。このことから、現在○○○周辺に逃走中の犯人が潜んでいる可能性があるとして、立ち入り禁止区域として調査を進めるといふことである」

「これは、、す、鈴木さんこれを見てください。」

「え、どれどれ。、これはこの記事の続きでおかしくなさそうね。」

「しかもこの内容。」

普通ならその時去るようにするべきでしょうけど、その時の私達は好奇心を抑えられませんでした。

「じゃあ、次はこの古書を読んで見ますね。」

「すいません隣に座ってもよろしいでしょうか？ 美しいお嬢さん方。」

夕泊APP

18 鈴木APP15

そこには平凡な容姿をした中肉中背の男性が立っていた。

「かまいません。」

「では失礼して。ん、ほー、このa市でこのような事件があったのですか。」

「そうみたいなんだよ。」

そんなこんなの後、古書を読んだ後私達は宴会情へ向かいました。

宴会場の前には「現在貸切」という札が立っていた。

「仕方ありませんね。他のところに向かいましょう。」

「そうしよう。」

2人は温泉の前に行ってきました。片方には「改装中」という張り紙が貼ってありもう片

方には女湯と書かれており隣にある掲示板には「交代の時間は19時になっています。詳しくはお近くのスタッフ、または女将へどうぞ」と書かれていた。

「どうします。入りますか？」

「やめとこ。いまだつちかわからないし。また後でいいんじゃない。」

「そうですね。部屋に戻りましょうか。」

「それからは4人とも部屋に戻って夕食まで時間を潰していました。」

「皆さん結構凶太いというかなんとというか。」

「ふふ、まあそうですね。それからはね、」

く橘 伊東グループく

「おい伊東飯食ったし温泉に行くぞ。」

「わかったよ。それにしても温泉に行くのは久しぶりだな。」

く温泉く

「なんとというか普通だな。」

「そうだな。」

「お、その若いお二人さん、ここに2人みたいなのが来るといふことはあの山にでも肝

試しにでもきたのかの?」

「ええ、そんなところですよ。お爺さんは何かご存知なんですか?もし知ってるなら教えていただけますか?」

「よし、じゃあ少しこの昔話をしてあげようか。」

ここの霊山と呼ばれる山の麓には昔、ちいさな村があったんだが、その村は山に住む怪物の驚異に怯え生贄を渡していたそうさ。なんでもちようど今頃かな、夏になると怪物が村に降りてきて村の人間を襲うから、それを阻止するために生贄を渡す代わりに村を襲わないという取引をしてたらしい。まあ一種の儀式のようなものだったんだろなあ。

あ、そうそう、ついでに言うとな、その村はちようどこの旅館が建っている場所にあつたんだ。村自体はもう何十年も昔に無くなつてしまつたよ。過疎というやつだろうなあ。」 そんなことが何十年も続いたらしいが、その儀式に：うくんなんて名前だつたかな。忘れたが、ある一族たちが終止符をうつたらしい。この山にその怪物を封印し、村はもう生贄を渡す必要が無くなつたそうさ。」

「そうなんですか詳しい話をありがとうございます。」

しばらくして、

「ふー、さっぱりしたつー!おい今誰かが見てなかつたか?」

「俺も感じた。何だ？」

く夕泊 鈴木グループく

私達はTVを見ていました。TVについては前に説明しましたから分かりますね。

「ねえランラン面白そうな番組がやってるよ。」

「んく心霊番組ですか。、この廃墟ここにすごく似ているような。」

「そろそろ寝ますか。」

「ふあく、そうしよ。」

それから布団に入って眠ろうとすると、体が痺れて動けなくなつて、目も動かさず呼吸すらままなりませんでした。でもしばらくすると、目は動かせるようになって更になると体も自由に動かせるようになりました。

「今のは金縛りですか。」 夕泊 現在正気度79↓79 (クトウルフ神話による恐

怖への耐性の為)

「初めて、金縛りになった。」 鈴木 現在正気度91↓88

そういう彼女は震えていました。

それから、おそらく幻影が消えたんでしよう、私たちが止まっていた部屋は壁は剥がれ、畳はボロボロ、窓ガラスは割れて散乱していました。

「これは、ずいぶん荒れたものですね。」 夕泊 現在正気度79↓79

「こんな所で過ごしてたのか。」 鈴木 現在正気度88↓87

「とりあえず荷物を持って出ましようか。」

「うん。」

バタン、

私達が出るのはちょうど他の方々と同じ時間でした。

「伊東さん！」

「夕泊、鈴木！」 伊東 現在正気度89↓88

「あれ、俺だけ呼ばれなかった。」 橘 現在正気度80↓79

「一体何が起こったっていうんだ！」 平凡な男性 現在正気度55↓53

「え、え、何がおこったのう?!」 一般女性 現在正気度30↓27

その後私達がお互いに起きたことを話し合っていると、ふと音が聞こえたんです。私達4人はその音を聞いて振り返りました、後のお二人は聞こえてなかったらしく私達が振り返ったのを見てからそちらを向きました。

そこには高校生くらいの少女がいて

「お手伝いします。」

それだけ言ううと彼女は階段の方へ走り去って行ってしまいました。

「追いかけるぞ！」

橘さんの掛け声で私達は走り始めました。それにあの2人も続きました。階段に行くとき先ほどの少女と青年がいました。

「あのくあなた名前は何て言うのく？」

「私は佐倉すみれといいます。こっちの人はタケルくんです。みなさんも気がついたらここにいた人たちですか？」

「まあそんな所です。」

「そんな所よ。」

「私達4人はここの旅館の噂を聞いて肝試しに来たんですが、気がついたらこんな感じに。」

「そうなんですか。私たちも今日お泊まりに来てたんですけど、起きたらこんなことになってたんです。よかつたら一緒に出ませんか？今からタケルくんと玄関まで行くつもりだったのでみなさんも行きましょう？」

「それはいいのですが先ほどの『お手伝いします。』とはなんででしょうか？」

「なんのことですか？」

「いえ忘れてください。」

そのすみれという少女は何か幻のような感じがしていました。

「まあとりあえず皆さん降りましょう。」

く1階く

「あきませんねえ。」

ガチャガチャ

「あの、タケル君で鍵開けが得意でしたよね。お願いできますか？」

「わかった。やってみる。」

それからタケルという青年が鍵開けを試みましたがあきませんでした。そうすると少女が

「玄関の鍵があれば開くかもしれませんよね、探しませんか？」

「そうですねそれがいいでしょう。ん、あれは？」

「懐中電灯だな。せつかくだし持って行こう。二つあるし、他に誰か欲しい人は？」

、、。「では私が持つておきます。」

「ここって絶対あのテレビの廃墟だな。」

「ああ。」

「どうやらそのようですね。」

「本当だあ！」

「そうなんですか、鈴木さん？」

「私も分からないわ。」

「皆さん何か知っているんですか？」

「いえ、この建物が心霊スポットの廃墟に瓜二つだという話ですよ。」

それからみんなで、靴入れの所に行きました。スリッパのままでは歩きにくいですからね。それから、受付に行きました。

「鍵はどこにあるでしょうねえ。ん、これはチエクインリストですか。私達の名前が書いてある所を見るとどうやらここはあのホテルで間違い無いですね……、これは、5年前以降の記録が1年おきになっていますね。」

やれやれ、どうやら噂は本当だったみたいですね。厄介なことです。

「あのお嬢さんどうされました。眉間にシワが寄ってますよ。まあこんな所じゃ無理ないかもしれませんが。」

「蘭子さっきの話。」

「どうやらあなたの聞いた噂は本当だったようです。まあそれは今は置いて鍵を探しましょう。」

「くそつ、ここも鍵がかかってやがる。中からも特に音は聞こえないよ。」

「タッチー、そうカッカしないもしかしたら他のところに鍵があるかもしれないし他のところを探してからまたこよね。」

その次に私達は喫煙所に向かいました。

「う、これは。」 伊東 現在正気度88↓87

「どうした伊東。白骨死体。」 橘 現在正気度79↓78

「ちよと見せて下さい。これは、5年ほど前のものですね。」 夕泊 現在正気度7

9↓79 (恐怖への耐性)

「うわ、うっ。」 鈴木 現在正気度87↓84

「大丈夫ですか鈴木さん。」

そこにあの平凡な男性の声が聞こえて来ました。その人の名前は田中でした。

「あのー何があつたんですか。っこれは。」 田中 現在正気度53↓52

「えちよとなにがあつたの?」

そう言つてあの女性佐藤さんが入つて来ようとしていました。

「ダメだ入つてくるな!」

そこを伊東さんが声を荒らげて阻止しようとしたけど遅かった。

「きや、な、何よこれ。」 佐藤 現在正気度27↓24

「ここにはこれ以上何も無いようですね。」

「そうだ、そういえばここつて本立てがありましたよね。映画か何かのようにそこに隠

されてたりしたりして。」

「そうですね。少し見てみましょうか。」

田中さんのその言葉から私は皆さんに断ってから本立てに向かいました。

「これは？こんな手帳あつたかしら？まあ読んでみましょうか。一浩二。」

ペラペラ、

・一浩二の手帳・

「私がやるべきことは理解している。ここで調査を行っている警官たちにも被害が出ている以上、やはりこの事件の仕業はあの化物の手によるものであることは明白だろう。

ならば、私たち一族の力がならば、私たち一族の力が弱くなってきているとは言えど、あの怪物を封印するのはやはり私たちの宿命なのだろう。

今の当主である私がやるべきだ。子供たちには背負わせるべきではない。」

「これはこれは、一体ここに何がいるんでしょう。」

それから私は皆さんのところに戻って、先ほどの手帳を3人に見せました。

「、これはいるな。」

「問題は何かがあるかだ。」

「困ったわね。」

「あの、3人ともあの手帳を見てから沈んでいるんですが大丈夫ですか？」

「ええ大丈夫ですよ。それよりあの2人は大丈夫でしょうか？先程から元気がないよう

ですけど、まあこんなことに巻き込まれたから仕方ないかもしれませんが。」

「あの2人ならあちらで何か話していますよ。」

「すまん、トイレ行ってくる。」

「橘さん1人で行って大丈夫ですか、途中までついていきましようか。」

「どうしたんだ蘭子急に、もしかして俺にほれたか?」

「それはありません。さつさとすませて下さい。」

「へいへい、」

「トイレ」

「くそっここも壊れて嫌がる。五年でここまでガタがくるものなのか普通。最後の所に入るしかないか。」

「ギイ」

「また骨が落ちてるな、をこれは。」

「橘が目を向けると壁に赤い文字で」

「く気をつける、あいつらはまでは見えない。」

「と書かれていた。」

「目では見えないか。なんかいたような。まああいつらなら何かわかるかもしれないな。」

「へー、タケル君頭いいんだ、すごい。」

「ああ、まあ。」

「そんな気の抜けた返事しない、せつかくかつこいいんだし。」

「おーい用も済ませたしそろそろ行くぞ。」

「分かりました。」

「そうですね早く鍵を見つけないといけませんものね。」

「おい、3人とも来てくれ話したいことがある。」

「[[?]]」

それから橘さんは私たちが来てからトイレの中に書かれていた文字のことを話しました。

「すいませんそれだけじゃなんなのかよく分かりません。」

「俺もだ。」

「私も。」

「そうか。次は温泉だったな。」

「何かあるといいんですがね。」

それから私達は改装中の男湯に入りました。

（男湯）

「ん、なんだこれは。この臭いは、この色はそして改装中の部屋の一斗缶に入っている、。」

「伊東さんどうしましたか？」

「いや、ペンキを見つけて持って行こうと思ってな。」

「持って行って何になるんだよ。」ボソツ

「ちよとタケル君！」

「いや、いいよ気にしなくていい。実はここ俺たち以外にも誰かいるみたいなんだ。俺は耳の良さには自信があるからね。それでももしかしたらその相手はこう行った所にとむろしている不良かもしれない。こんな状況だ、もしかしたら気が立っていて襲いかかってくるかもしれないと考えることもできるだろ。彼らはできている奴もいるが、そうじゃない奴もいるしね。そんなときこれをかけて怯まそうという考えだ。なにぶん気が弱いものだね。理由はわかったかい？」

「まあ。」

「タケル君！」

「いや、いいよ気にしなくていい俺はそんな言葉遣いとか気にしないしね。次行こうじゃないか。」

く女湯く

そこも相変わらずボロボロでした。そして中には女将が立っていました。そして、彼女は私たちに気づいて振り返りました。その顔は青白く、目の前は窪み黒い空洞のようになっていました。あ、ついでに口もそうなっていて、首が180度回転していました。

「あら、お客さんたち、ダメじゃないですか、まだ、男女変更の時間じゃありませんよ」
 そう言った後彼女は倒れこみ、這うようにして私達に這い寄って来ました。

「みなさん、逃げて下さい。ここは私が食い止めます。」 夕泊 現在正気度79↓7

8

「わかった。」 橘 現在正気度78↓77

「夕泊なら問題ないな。」 伊東 現在正気度87↓85

「え、大丈夫なんですか!？」 田中 現在正気度52↓51

「大丈夫だよ。ランランこういうことの専門家だから。」 鈴木 現在正気度84↓

83

「それには賛成だ。先に逃げろと言っているんだ、別に問題ないだろう。」 柴山

現在正気度50↓47

「分かりました、信じます。」 佐倉 現在正気度75↓73

「いわれなくても逃げるわよお。」 佐藤 現在正気度24↓20

「さていきますか。」

その直後女将の亡霊が組み付いてきました。 まあ全く問題なかったんですけどね。

「キイヤアアア！」

女将 POW 10 ↓ 8

「さてそろそろ行きますか。皆さんをあまり待たせるわけにいきませんからね。」

「お待たせしました。」

「あなた、本当に大丈夫だったの？」

「はい、ピンピンしていますよ。」

「ね、だから言ったでしょうこういう事の専門家だつて。」

それから私達は厨房に向かいました。

く 厨房く

「ここにはあるんでしょかねえ。を、これは肉切り包丁ですか。何かの役に立つかもしれませんし。持って行きましようか。」

「あぶないんじゃないですか？」

「大丈夫ですよ。こういった刃物類の扱いには慣れていきますし。」

「このメモは我々の名前が書いてないな。裏は、宴会場、し く 様？ そ
ういえば桶はどこへ行った？」

「タッチーならここに来る途中のロッカーの中から漂って来る悪臭の正体を確かめられて1人で行ったよ。」

↳ロッカー前↳

ガチャ、ロッカーを開けると強烈な悪臭が漂ってきた。そして中には中途半端に白骨化した腐った死体があった。

「うっ、」 橘 現在正気度77↓76

そして、死体の傍らにはメモが落ちていた。

「これは、」

・メモ・

「どうして写ってくれないの、こうしたら見えるって書いてたじゃない。あの向こうにいるのだから、あいつらと同じでしょ？何が違うの、わからない。」

お腹が痛い、なんとか逃げたけれど、ここに隠れるのが精一杯。どうしよう、まだあの笑い声が聞こえるわ」

「だめだ、こんな情報じゃ分からない。一応3人にも聞いて見るか。」

その後私達は橘さんと合流して宴会場の前に来ました。

↳宴会場前↳

「うっ、く。」

「大丈夫ですかタケル君！」

「どうした何があつた。」

「分からない。頭が痛い。そこから先には行けない気がする。」

そういう彼の顔は青白く汗が浮かんでいました。

「いや、どつちにしろ中に入れそうもないぞ。見ろよこの錠前。」

「これは、この鍵も探すしかありませんね。ん、なにか、中からガヤガヤと騒ぐような音が聞こえませんか？」

「確かに。」

「俺もだ。」

「私も。」

「誰か中にいるんでしょうか？」

「みんな、耳がいいんだね。」

結局私達は一度そこを立ち去りました。その後はボイラー室に行きましたが特に何もなく、2階に上がりました。

く2階く

「ここ、電気が通っていたのか。」

「タツチー、ランラン、このメモ見てこれ！」

「どうしました。、、これは。」

「おー。」

・メモ・

「やつと正気に戻ることができた。ここは一体どこだ。私は今まで何をしていたんだ。またこのように記憶が飛ぶ可能性があると考えると、やはりここに漂う霊力のようなものは相当強いと考えて良いだろう。なにせ、今まで幻を見せつづけるようなものだ、どうにかして封印を成功させなくては」

「なるほど。」

「まあ収穫ではあるな。次探しに行こうか。」

その後は2階の部屋を調べて回りました。

く201号室く

その部屋はひどく散乱していました。その中にあったんです、あれが

「おや、これは頼もしくも忌々しい日記帳じゃないですか。ここで起こった事について書いてあればいいのですが。、、、これは。」ギリッ

「おい、蘭子どうした何が書いてあった。」

スッ

「、、、おいおい何考えてんだこいつ。」

そこには此方の世界の用語が多多書き込まれていました。そして、最後の部分には
・日記帳・

「7月〇日（滲んでいて読めない）ついにこの日がやってきた。どれほど長いこと待ったことだろう。やっと自分に秘められた力を使うことができるんだ。ああ、なんて楽しみだろう。時間は、そうだな、夜の22時頃にしようか。どこでやろうか、そうだ、宴会場なんてどうだろう。今のうちに確認を」

「2人とも移動するぞ、置いていかれたいのか？」

「今行きます。それと伊藤さん、、」

「うっ、ぐっ、」

「タケル君！」

「タケルさんどうされたんですか！」

「なんでもない。」

「無理はしないで下さいね。」

彼に対して私はそう言うだけでした。

→202号室←

この部屋では田中さんが5年前とモデルの携帯電話を見つけて、タケル君が「最近のだ」という発言により私達4人はタケル君が亡霊である事を確信しました。田中さんと

佐藤さんも不審がつていました。あ、ちなみに携帯電話はタケル君に渡されました。何故でしょうね？それと、すすり泣くような声が聞こえました。

夕泊 現在正気度78↓78 橘 現在正気度76↓75 伊東

現在正気度85↓84 鈴木 現在正気度83↓83

田中 現在正気度51↓50 佐藤 現在正気度20↓19 柴山 現在

正気度47↓46 佐倉73↓73

（203号室前）

「この部屋には、入らない方がいいと思います。」

「何故ですか？」

「嫌な感じがするんです。まるで袋の入り口のような。」

「まあ蘭子がいうならそうなんだろう。」

「私も信じます。あんなことがあった後ですしね。」

そんなこんなでこの部屋は探索するとしても最後でという事になりました。

「あ、そこ持って下さい。1 2 3で持ち上げますよ。」

「1 2 3」

ガコツ と音がし2人の前に地下への階段が現れた。

「それでどうなったんですか？」

「まあその話は帰ってからにしましょう。」

t o b e c o n t i n u e

闘いへ

あれから僕達は直ぐに出発する事になった。今は船の上だ。家族や知り合いへの説明が大変だったけど兄さんは僕の言った突拍子も無い事を信じてくれたし、協力もしてくれた。少し尋ねてみるとどうやら兄さんもこのような事を体験したことがあるらしい。

「エドガー早速だが修行を始めるぞ。」

おおつと気を引き締めなくては。

「はい、ルーカスさん。」

「まずはこれかな。」

そう言つてルーカスは水の入ったコップを逆さにしてた。

「ま、水が落ちない！」

「やってみろ。」　ブン

「はっはい。」　パシイ

バリバリ

青年は水が流れ落ちないよう波紋を流した。しかし

バシヤア

「おわ、」

「違いを教えよう。さっき私が練った波紋と君の波紋は同じくらい強さだ。しかし、君は波紋を掌から一気に放出しているだから水が爆発したのだ。だが、私は指の先一点からだけ波紋を放出したのだ。一点集中、一点集中でコップの水に波紋の振動膜ができれば強力に固定され落ちない。君のように拡散させてしまつてはエネルギーの無駄なのだ、水鉄砲は穴が小さい方がよく飛ぶということだ。」

「なるほど、今までは手全体から出した方がより短い時間に多くでていいと思つていましたが、そういうものには無いんですね。」

その後は波紋の操作能力を向上させる為の修行が行われ、途中から、

「エドガー今日からは持続力を向上させる為の修業を行つてもらうぞ。」

「具体的にいうと、何をすればいいんですか？」

「波紋で天井にくつついて貰う。私がいいというまでな。だが心配はいらない波紋の影響で飲まず食わずでやっていけるし、トイレに行く必要もない。」

「はい。」

・数日後・

「ふむ、まだ貼り付けているな。この長時間呼吸を乱さないとはやはり君に波紋を教え、て正解だったな。」

「はあ、はあ、ありがとうございます。」

《波紋》 40%↓47%

その後ヨーロッパのある港町に着いた2人はルーカスの手配した車で目的地であるリターデスタットウインドへ向かったそしてその途中でも修業は続いた。

「エドガーよく見ていなさい。私はこの位置からあの岩の上の石にこぶしを放つ。普通に伸ばしただけではこのように届かないが、ズームパンチ！」

グーン、ドカア

「う、腕が伸びた。どうなっているんだ。」

「これがズームパンチだ。関節を外しリーチを伸ばし波紋により関節を外す痛みを抑えた技だ。」

「関節を外すですか。しかしそのような事をすれば関節が外れやすくなってしまいうんじやないですか？」

「その事なら心配はいらん。波紋の影響で全くそんな事ない。さて、早速やってみろ。」
「いきなりですか。まあやれるだけやってみます。 ズームパンチ！」 グー

ン

グキッ

「ギイアアア！」

HP15↓14

「ふむ、失敗だな。もう一度やってみろ。」

「はい。ズームパンチ！」 グーン パリパリ

「痛くない。やったできたぞ成功だ！」

（ふむ、この上達速度やはりこの青年才能がある。この青年ならばあの忌々しい吸血鬼ミカーラを倒せるかもしれん。）

・1週間後・

《波紋》 47%↓49%

「このトンネルをくぐればリターデスタットウインドだ。覚悟はいいな。」

「はいルーカスさん。」

2人は呼吸を整えリターデスタットウインドへ続くトンネルに入って行った。

くトンネル内く

「エドガー感じないか、奴らの呼吸を。」

「え？」 ドン、ドサ、タン

「ヒヤハー人間だ！」 「久しぶりに生き血を吸えるぞ？」 「ち、男か

よ。」

「お出ましの様だな。来るぞ構えろ。」 グッ

「はい。」 グッ

「ヒヤハー八つ裂きにしてやる！」 ブン

吸血鬼の鉤爪がルーカスに迫る。しかし、

「おわ、」

からぶつた上にバランスをくずして転んでしまう。

「、、セントウウエイブキツク 仙道波蹴！」 ブン

ドカア バリバリッ

「グギヤア！うわー、体が溶けてやがる！」 吸血鬼A HP??↓??

「拳から流す最も強い波紋。くらえ山吹色波紋疾走！」 ブンツ

リ バリバ

「ギイアアア！この俺が！溶けルウ。の、さ、」 ボツシユー 吸血鬼A HP??↓

—16

「溶けて、消えた。な、なんنادお前たちは！」

「我々はちよと特別な技術を身につけた人間だよ。」

「ひ、怯むな！さつきから奴らは足でしか使つてねえ、という事は足でしかあの光るの
出せないはず。足が当たらない様にすれば問題なかるうナノダアア！」 ブンツ

「甘い！」

ルーカスは巧みな動きで吸血鬼の鉤爪を受け流した。」

「クッソ！」

「俺を忘れるな！」

ブン

スカッ

「どこを狙っている。次はこちらの番だな。仙道疾走連打！」

ドカア、ドゴオ、メシヤア、バキイ、;

「ぶべら、あば、グギャー！」

吸血鬼C

HP?? ↓ ↓ ↓

「ひ、ヒイイー！」

こんなやつらに構ってられるか。」

ダッ

「逃すなエドガー！」

「分かっています。ズームパンチ！」

グーン

パリパリ

ドガア

「ギイヤアー！溶ける溶けるう。、た、頼む見逃してくれ。もう人を襲ったりしない。心を入れ替えるからお願いだ。」

吸血鬼B

HP?? ↓??

「と、言っていますますが、どうしますか？」

「見逃してやれ。」

「はいわかりました。」

ダッ

「ハアハア、何なんだ連中は？一刻も早くミカーラ様に報告しない「その必要はないよ。」と、へ。み、ミカーラ様！」

「さっきの戦いはみさせてもらったよ。君たちの闘いはとても役に立った、でも敗者は必要ないんだ。」

「それはどういう、意味、で。」 ドサ

「ククク、波紋使いか。文献で読んだことがあるがあれがそうなのか。なるほど厄介だか問題ない。ククク。」

b e c o n t i n u e

t o

生命の熱

「町は普通に見えますね。この中にも奴の眷属にされた人がいるのでしょうか。」

青年は畑仕事をする町人を見て発言する。

「おそらくな。それとエドガー隠しているつもりだろうがバレバレだぞ。」

「バレていましたか。」

「当たり前だ。これでも君よりずっと長く生きているし、君のように焦燥感にかられている奴を何人も見てきた。それとエドガー波紋法の教育者として言うておく、感情に振り回されるな。それは呼吸を乱すことに繋がる、そしてそれは波紋使いには致命的だそれをお忘れるな。」

「わかつています。、、しかしこれからどうします？奴はこの町のどこに潜んでいるかはわからないんでしょう。」

「そうだな。「キヤー!!」だなんだ!？」

「あちらから聞こえました。急ぎましよう!」 ダツ

「ひひひ、旅人さんなかなか可愛い顔してるじゃないか。そしてそそのるその体つき。たっぷりやった後で血を吸って俺の性奴隷にしてやっていいぜ。」

「どうでもいいが口は残しておきよ。」

そこには2人の若者が下卑た笑みを浮かべながら1人の女性に迫って行っていた。

「おい貴様ら何やってている！」

「あ、なんだお前ら？みない顔だな。よそ者かまあ、」

「見られたからには。」

「殺す。」

そして2人は異様なほど尖った犬歯をのぞかせる。

「吸血鬼様の力を思い知レエエ！」　ブンツ

「おやおや、いきなりか。」　ヒヨイ

「ちつ、よけんな！」

「避けるなど言われて避けない奴がいると思うかね？お返しだ拳から流す

サンライトイエローオーバードライブ
山吹色の波紋疾走！」

「ぶべらつ。は、だかそんなパンチじゃ俺は倒せないぞ。おいどこ向いている。無視をするな！」

しかしルーカスは背を向けたままで言い放つ。

「何を言っている？君は既に死んでいる、無視するも何も無い。」

「は？、う、ひやぎよー、ノーン、」ジユワー、ドロドロ

「な、何もんだお前ら！ちっ。」　　バツ

「キヤー！」

残った若者は先ほどの女性を盾にする。そして腕を首に当たる。

「おいあんた自分の腕を見てみる。」

「なに？」

若者が腕を見るといつの間にか糸のようなものが両腕に絡み付いていた。

「波紋！」

青年の声と共に波紋が糸を通して伝わり吸血鬼とかし若者の腕を切断した。

「ギヤー、痛ええ！おでのうでがー！」

そして、女性はその隙をつき逃げ出した。

「行くぞ合わせろエドガー。」

「はいー！」

「山吹色の波紋疾走！」　　ドクシヤア

「k」ボシユアー

若者は一言も言えないまま波紋によって蒸発した。

「これで終わりか。おや先ほどの女性はどこに行つたかな。まああんなことを見せられたんだし無理は、ないか。」ドサツ

「ルーカスさん！つナイフ？」

突然倒れたルーカスの背中には深々とナイフが突き刺さっていた。

「あーあ、仕留められなかったか。ちよとずれちやたかな。」

そしてそのすぐ後ろには先ほどの女性が残念そうな顔をして立っていた。

「お、そんなに睨むなよ青年。私の名前はシルヴィア吸血鬼だよ。まあ偽名だかね。まあ、さつき助けてくれたことは礼を言うよ。彼らは多分最初のやつらが作ったものだろうね。私も顔を変えていたしね、知らなかったんだらうね。まあ、あんな奴ら私一人でもどうとでもなるんだけどね。まあ私としてはあのまま行為に突入するのもまんざらでもないけどね。」「、、どうした。」ん？」

「イリヤをどうしたと聞いているんだ吸血鬼！仙道波蹴！」 ビュン

「おっと危ない。」 ヒョイ

「くそ、もう一発「まあ待てよ。」なんだ。」

「教えてやろうじゃないか、君の友人は死んだよ。最初は従者にしようと思っていたんだけど抵抗してね。私の顔を傷つけたからついでに殺しちゃた。てへ。」

「貴様ー！」 ブン

「レレイの霧の創造。」 モアー

「なんだ！この霧は！」

青年が驚くのも無理はなかった。吸血鬼と青年の間に急に非常に濃い霧が発生したのだ。

「まあまあ慌てるな青年。夜にペネロシー邸に来るといい、ククク。」

そして霧の晴れた時には既に吸血鬼の姿はどこにもなかった。

「くそ、逃げられた。はっルーカスさん！、これは下手に抜くと抜いたら大量出血するぞ、一体どうすればいい。」

「お困りのようですね。」

「!!誰だ。」

そこには一人の壮年の男性が歩いてきていた。

「おっとそんなに警戒しないでください。私はこれをもらって駆けつけたんです。ほら。」

そう言って彼は懐から手紙を取り出した。その手紙にはルーカス・マクブレインの筆跡で協力を求める内容が書かれていた。

「自己紹介がまだだったね。私の名前はヴァレンティーノ、プランク。医者をやっている。彼の事は私がかししよう。」

「だつ大丈夫なんですか？これ太い動脈が切れているかもしれないですよ。もし大量出血したりしたら、「大丈夫だ。私を信じなさい。」はあ。」

「では処置を始めるよ。」

「一応これでいいかな。あとはしばらくすれば起きるはずだよ。」

「はい。あなたの腕は本当だったようですね。しかしこれからどうしましょうか。もう夜ですし、夜はあいつらが有利になりますし、あいつの言う通りの所に行くのも自分から罠にかかりに行くようなものだし。」

「そうだね、もう一人来る予定の人がいるけど遅れるようだし。追っ手も特にないようだしここは引いたほうがいいかな。」

「トンネルが埋まっている。逃しはしてくれないか。」

リターデスタットウインドに繋がるトンネルはすっかり埋まってしまっていて僅かに火薬の匂いがした。

「そうだよ。」

「!!」

「どうしたんの2人とも？鳩が鉄砲食らったみたいな顔してさ。」

「いつの間に。呼吸もまったく感じなかった。」

「呼吸も感じなかった？それは当然だよ『認識をすり替える』を使ったからね。」

「認識をすり替えるだよ？」

「そそ、いわゆる魔術というやつだよ。まあ君達には関係ないかな。しかし私がそう簡単に流すとも思ったのかな？だとしたら愚かとしか言いようがないよ。クク。ところで君達私の下僕になるかはないかい？この体を使っていいこともしてあげるよ。」

「当然お断りだ吸血鬼。私はお前を滅ぼすために来たんだ。それと私には妻がいる。あまり人を見くびるなよ。」

「僕もお断りだ。最初に手を出して来たのはそちらだし、何よりお前はイリヤを。」

プルプル

「ふーん、そうなんだ。なら死んでもらうしかないな。くく『冷たき外套』」

そう吸血鬼が呟くと、燐光に似た光を放つ灰色の火花に囲まれて空中に浮き上がった。動きも素早くなったようだ。

「さらに私の本当の姿を見せようじゃないか。」

その言葉と共に吸血鬼の顔が体に変化し始め、可愛らしいという表現の似合う容貌は妖艶さを持ったものへと変わり体格も大きくなり背中からは翼が生え目は赤く染まった。

「それが君の本当の姿か。」 プランク 現在正気度75↓75（波紋技能による軽減）

「ふうー。」 ベックマン 現在正気度98↓97

「ふふ、あくまでも戦うんだね。まあせいぜい自分の選択ミスを悔いて死んで行くんだね。でも私は優しいからそつちから攻撃して来ていいよ。」

「私に先に行かせてくれエドガー君。それでもルーカスとは修行を共にした友人なんだ。おい吸血鬼お前はこのヴァレンティーンが倒す。」

「待つてください。まだあの奴を覆っているモノの効果が変わらないですよ。」

「フライングオーバードライブ
跳躍波紋疾走！」

ヴァレンティーンはそう叫び飛び上がって上方から攻撃を浴びせかけた。しかしその攻撃は受け流された。そして、

「、つぐおうー。なつなつ腕が凍っている！」 プランク HP13↓10

「そつそれだけじゃない奴は波紋が流れているはずの腕を触ったはずなのになんで平気なんだ!？」

「こつちもちやと冷つと来たね。それはそれとしたそれはね簡単な話波紋は血液になつて流れるエネルギーならば血液が凍れば波紋は流れない。ふふふハハヒッヒッヒッヒ波紋法破れたり!今度はこちらから行かせて貰うよ。フンッ!」 ビュン

吸血鬼が凄まじい勢いでヴァレンティーンに向かってこぶしを振った。がヴァレンティーンはなんとか受け流した。ヴァレンティーン 現在正気度75↓75

「へー、今のを避けるのか。ふーん。」 ジー 「ヴァレンティーン、エドガーを殺せ。」

「はっ。といわけだエドガー死んでくれ。」 ビュン

そう言いヴァレンティノーは青年に向かって鋭い蹴りを放つ。

「ヴァレンティノーさん！」 ス、ブン

青年はその蹴りを受け流し続ける。

「どういうことですか？何故僕に攻撃を。」

「フツフーン、知らないようだから教えてあげよう。吸血鬼は相手を見ることで操ることができるんだ。まあ自己破壊的命令は出せないし、精神力が高い奴は中々かからないけどね。」

「なんだと。」

「さあどうするどうする？仲間を攻撃するか？それとも私を攻撃するか？あそこに横たわっている男をかばいながら逃げるか？まあどれをやっても状況は好転しないけどね
クククヒヒ。」

「くそつ。」

（一体どうすればいいんだ。あいつの言う通りだ。奴に攻撃しようにも波紋を流せないどころか凍らせれてしまう。それにルーカスさんを入質に取られたり、攻撃されたりするだろう。それにヴァレンティノーさんの腕も早くなるとかしなければ。）

「さあ早くと何するか決めておつ「緋色の波紋疾走」グハア。」 ミカーラHP??↓??↓

??

吸血鬼は突然殴られて吹っ飛んだ。

「ちよと間に合わなかつたようですね。」スタツ

そしてそこには長身の東洋系の女性が立っていた。

「貴方は一体?」

「初めましてMr. ベックマン。私は蘭子 夕泊と申します。貴方の話はカールから色々聞いています。では、私はヴァレンティノをどうにかしますのであの吸血鬼をお願いします。、そんな顔しないでください。さつき私がやったようにすれば問題ありません。生命の熱をあゝの吸血鬼にたっぷり味わせて下さい。では。」

(蘭子 夕泊? もしやカールの言っていた人か? それにしてもさつきのは波紋。それに熱を帯びていた。波紋法は生命のエネルギーを特別な呼吸法によつて増幅させる技術として生命のエネルギーは太陽の光同じ!)

「痛つてくなくあよくもやつてくれたなこのど腐れがああ!」ダツ

「いかせるか吸血鬼。」バツ

「喰らえ熱を放つ波紋。緋色の波紋疾走疾走!」

ブン バリバリ

そして緋色の輝きを帯びた青年のこぶしが吸血鬼をとらえた。

「クソガアー、ブベラア。」

ミカーラHP?? ↓?? ↓??

守るためだ！、はっ。俺は何を？」

「正気に戻りましたかヴァレンティノー。ではさ「ギャアアア」終わつたようですね。行きますよヴァレンティノー。」

「あ、はい。」

「おっと、その前に貴女の手を直しませんとね。緋色の波紋。」

「はあ、はあ、終わつたのか？」

「いいえまだです。まだ他にも吸血鬼にされた人間がいるはずです。その者たちもどうにかしなければなりません。」

「ユウドマリさん。」

「心配しないで下さい。あとは私達2人でなんとかします。貴方はルーカスを見てやって下さい。」

・翌朝・

「終わりました。、、この町はもうダメですね。住人のほとんどが身も心も吸血鬼に成り果てていました。」

「そうですか。」

「気を落とすのも無理はありません。それとこれを。」

「これは、イリヤの遺書。」

「帰りましょうエドガー、カールも貴方の帰りを待っていますよ。」

「あの、ユウドマリさん貴女はいつたい。」

「その話は帰りの船でしましょう。 さ帰りますよ。」

こうして悲しみを残しながらも青年の冒険はひとまず幕を閉じた。

番外編3 夕泊 蘭子の回想2

夕泊 蘭子とカール・スタンフォードの2人は幽霊屋敷の探索を終え白銀の叡智団ボ
ストン支部の食堂にやって来た。

「あ、シチューお願いします。」

「私はカレーを。」

「かしこまりました、ユウドマリ導師、スタンフォード術師。」

「ユウドマリさん先ほどの話の続きを。」

「さっきの話の続きをする約束でしたね。」

・ 205号室・

「この部屋は他の部屋と比べて比較的綺麗でした。」

「おや、この荷物は、。この状況に対するヒントでもあれば良いのですが。」ガサゴソ
「あの何かありましたか？」

「ええありました。日記帳ですね。滲んでいて殆ど読めませんが。」

・ 日記帳・

「今日は——の、一生——、気に入ってく——な？お母さん、ちゃんと、隠——くれて——かな。」

サ——イズなんだから、気を——って何回も——つたけれど。

サ——イズなんだから、気を——って何回も——つたけれど。

きつと、——く——のことだから、自分の——忘れちゃってるんだらうな。」

（この手紙はもしかや彼女がいた者なのでは。）

「夕泊どうした？次の部屋に行くぞ。」

「すいません。今行きます。」

・206号室・

その部屋は今までの部屋と同じような状態で中央に黒いキャリーケースがありました。またテーブルの上にはメモとタグの付いていない鍵がありました。

「このメモにはこの状況に対する説明になるものがあればいいんだか。、、」

・メモ・

「たかだか一人で、しかも対して魔力もない魔術師の力だけでここまで強力な空間まで作れるはずもない。それほどまでこの場所にある霊力が強いのだろうか。」

それともまた別の誰かの力が備わっているというのか。私は封印を成功することが

できるのだろうか。」

・メモの裏・

「それにしても、なんだろう、この子から伝わってくる違和感は。信じていいのだろうか。悪い子には見えない。」

しかし謎だ。私がこの旅館に泊まっているという幻を見ていた時、この子達は旅館の中にいたのだろうか。」

(これは、、、)

「伊東どうだ、有用な情報は見つかったか？」

「ああ、いちおうな。」

その後私達はそこに書かれていることを共有しました。

「このキャリーケースの持ち主は一浩二というそうですね。それでこの鍵がどこの鍵かですが、一浩二の車の鍵ではなさそうですしこの館の鍵であればいいんですが。」

「今ここで悩んでいても仕方がない。一階に降りて試してみよう。」

・宴会場前・

宴会場に近づいたとき、、、

「俺はここには入れない。」

そういう彼の様子はとても具合がいいとは言えませんでした。

「タケルくんは私が見てますよ！大丈夫ですよ！私お化け怖くないです、タケルくんのこと守ってあげますね！」

スマレという少女がそういつて彼を隅に座らせて自分は隣に座りました。宴会場は206号室にあった鍵で開きました。

・宴会場・

宴会場は30人程入れる部屋でステージがありました。そして辺りは今まで以上に荒れていて歩くだけでもちと苦勞でした。そして誰もいませんでした。

夕泊 現在正気度78↓78 橘 現在正気度75↓75 伊東 現在正気

度84↓82 田中 現在正気度50↓50

鈴木 現在正気度83↓83

ボタン

「なんだ？扉が勝手に、あれ開かない。」

「閉じ込められたということですか。でも出るため手がかりが落ちているかもしれない。中を探してみましよう。」

（あの扉に書かれていた紋様が原因でしょうか。）

「ん、あのステージにある白骨死体何か握っていますね。」コツコツ

死体に近づくとさらに手紙も落ちていることがわかりました。

・メモ・

「私はここから出ることは叶わないだろう。封印を完全に成功することはできず、ここに閉じ込めることが精一杯だった。自分の力不足だ。せめて、あと一人いれば魔力が足りないといったような失態は起こらなかつただろうに。のうのうと生贄の一人となつてしまった。

せめて、ここにまた迷い込んだ人たちのためにメモを残す。

せめて、ここにまた迷い込んだ人たちのためにメモを残す。

ここに怪物を閉じ込めた、こいつはここから出ることができない。だからひたすら逃げろ、こいつを倒さなくとも、ここから出る手段はきつとある。

こここの扉には内側からは開かないように、魔法陣を外側から彼女に描いてもらった。魔法陣の描き方は教えた。物覚えが早くて助かる。

このようなことを彼女に任せてしまい、本当に申し訳ないと思っている。

この扉は外側なら開く。だれかが外にいるのなら開けてくれるかもしれない。しかし、怪物の力も強く、内側の声は外へ聞こえない。どのような手段を使ってもいい、ここから逃げるんだ。もしかしたら、彼女が扉を開けてくれるかもしれない。

そして彼も、どうかここから救われることを願っている」

「これは、伊東さん鈴木さん橘さんちよと来てこれを見てください。」

「これは、」

「やっぱり。」

「この部屋にいるだと。」

「それと、この手紙ですが一緒にこの鍵が入っていました、スタッフルームのね。で肝心の内容ですが」

・手紙・

「タケルくんへ。20歳のお誕生日おめでとうございます！もうタケルくんとの付き合いもすぐ長くになりますね。あつという間でした。」

タケルくんのことだから、きつと自分の誕生日なんて忘れてるんだろうなと思ってたので、せっかくの20歳ですし盛大にお祝いしようって話になり、うちの家族とタケルくんのおじいちゃんとおばあちゃんタケルくんの誕生日のサプライズという形で、この旅館へ来たんですよ。絶対気がついてなかったでしょう？

楽しんでくれてたらとっても嬉しいです。あとからタケルくんのおじいちゃんとおばあちゃんからプレゼントももらええると思います。

私が選んだんですよ？絶対気に入ってくれると思います。

えへへ…お手紙って何書けばいいのかわからなくなっちゃいますね。

とにかく、これからもたくさんタケルくんにはお世話になると思います！お勉強も教えて欲しいですし、夏休みだし海とかお祭りにも行きたいですよね。

これからも、どうかよろしくお願いします。すみれより」

クスクス、クスクス

「……！……」 バツ

「？」

「佐藤さん避けて！」

「え？」

クスクス

ガシ

ふわゝ

その時佐藤さんが浮き上がりました。いえ捕まえられました。

「いやー！」 バタバタ

佐藤

現在正気度19↓15

「……！……」

夕泊 現在正気度78↓77

橘 現在正気度75↓74

伊東 現在

正気度84↓83

鈴木

現在正気度83↓82

田中 現在正気度50↓47

「これは、星の精。」

「星の精？」

「はい、普段は透明な宇宙の吸血鬼です。早く佐藤さんを助けないと助けないと。橘さ

ん引き剥がすのに協力して下さい。」 バツ

「お、おう。」バツ

「いやー！」 ガシッ、ガシッ

「いつせーの」 ダン

2人は佐藤を星の精から引き離すのに成功した。

「おら、」 ブン

伊東さんが星の精に向かって一斗缶の中身をかけました。

バシヤ

それとともに中のペンキがかかり星の精の姿がある程度明らかになりました。

「これでも喰らえ、化け物！」 ブン、スカッ

鈴木さんが蹴りを放ちましたが外れました。

「クスクス」ブン

「おっと危ない。そして、隙だらけだ神話生物！オラオラオラオラア！」 ビュン、ブ

ンッ

ドゴオ、メキイ

「ギイヤ」 星の精 HP?? ↓??

「なんなんだあれは。」

「ひー。」ガクガク、ブルブル

「さて私も行きますか。ツ」 ブンツ

ドゴオ 星の精 HP?? ↓??

「もういつちよ。フンツ。」 ブンツ

スカッ

「チツ、橘さん！」

「おう！」 ブンツ

スカッ

「、、」

「ブツブツ、」

「おい、伊東の奴。「幽体の剃り刀」 唱え始めたぞ。」

「今度こそ。」 ブンツ

スカッ

「こんな所でいつまでもビビってられるかあ！うおおお！」

ブンツ

ドカ、グキ

「つー、ギャアー。」ゴロゴロ

「あいつは何をやっているんだ。」

「クスクス」ブンツ

ドカッ

「どこを狙っているんですか？今度はこちらから行きますよ！」

ブンッ

「ギャアー。」星の精 HP??↓↓3

ドサッ

「勝ったのか。」

「ええ勝ちました。あ、私は彼女の面倒を見られます。」

佐藤 現在正気度15↓16

「急いで！、え？」

「あ、スミレちゃん扉開けてくれたんだ。早く出るよみんな。」

「さつきはありがとう。スミレちゃん。」

「さつき？！どういうことですか？」

「、、いやなんでもないよ。」

・スタッフルーム・

スタッフルームには二つの白骨化した遺体がありました。その遺体は片方が片方に覆いかぶさるようになっていました。その側にハサミと玄関のタグのついた鍵が落ちていました。

「ああそうだった。」

私たちの背後でタケル君がつぶやきました。タケルの近くにいたすみれが消えて、そこにはタケルだけになる。

遺体を見たタケルは虚ろな目をしたあと、「すみれが死んだんだ」と言うと、その姿が変わる。

女将や子供の幽霊とは違い表情に違いはないが、体が透けはじめる。そしてもつていたツルハシを振り上げると

「今度こそは助けなくちゃいけない。」

といい私たちに襲いかかってきました。

「……！皆さんちよと彼を抑えたおて下さい。」

「分かった。」 ガシッ

「く、はなせ。」

「いや、はなさん。」

「その後どうしたんですか？あ、ビーフステーキお願いします。」

「私もお願いします。ミディアムで。それで、ですね。探索の途中で手に入れたパース
ダイカードをよみあげると……」

「そこにいたんだな。」

そう呟いて光の粒子のようになって消えて行きました。それと、同時に私たちの意識もホワイトアウトしました。その時スミレさんを見た気がしました。

気付いた時には病院でした。どうやら観光中に姿が見えなくなり、立ち入り禁止になっている旅館の近くで倒れているのが見つかったということでした。

それから数日後心霊番組を見たんですがいい加減なものでしたね。

「と、また私の体験談はこんな所です。役に立ちましたか？」

「ええそれはもう。それとユウドマリさん昔の話ありがとうございます。」

「いえいえいいんですよ。」

「支部長貴女にお手紙が。」

「手紙ですか、失礼急用ができました。」

「支部長どちらへ。」

「ちよとルーマニアへ。」

The country rising sun 変化

192X年 X月 X日

〜ベックマン邸〜

「どういうことですか父さん！明日からM&Eに勤めてもらうって。」

「どういうことも何も週末からM&E者に勤めてもらう。」

「困りますよ、私には講演会や勉強会がかなりありますし、執筆活動もあります。それをどうしようというんですか。」

「その話ならば問題ない。M&E社は私の会社の子会社で、我が家が最大株主だ。それにそう言ったことを抜きにしても経営者のヨハンは私に顔が上がらない。講演会の予定があるときは有休をくれるだろう。それに執筆活動の話ならば今書いてる小説などはひと段落ついているだろう。」

「そうですか。しかし何故会社員になれと？」

「社会勉強のためだ。お前は確かにそれなりの名門大学を卒業しているし、かなりの収入が有る。しかし誰かに雇われる仕事言うなら会社員や事務員などといった仕事に就

いたことはない。まあ一言で言えば社会勉強のためだ。」

「いや、まあ確かにそうですが。」

「心配ない最初は新人研修が有る。それにお前の能力なら大抵の仕事はすぐに飲み込めるだろう。これには、そのことに関して事前に知っておくべき事書いてあるから目を通しておけ。ではお休み。」 バタン

そう言うとき青年の父ヴィルヘルムは部屋を出て行った。

（、仕方がない資料生を通しておるか。、ふーん駐車場があるのかこれなら車で通えるな。、、っ！）

「誰だ！」

青年は窓から何者かの視線を感じて振り返ったがそこには誰もいなかった。

「気のせいかな。」

・ 4日後・

「では行つてきます。と言つても今は誰もいないか。」

青年は愛車のエセックススコーチに乗り込み出発した。そして、アーカムを出てポストン近郊にある会社に向かった。

（なんだこの感覚は。誰かに見られている？ いやそれなら尾行されていることになるな。街で何度か曲がったりしているし一箇所観察することはできないはずだしな。それ

にそれらしき車などはないな。」

そのような事を考えながら青年はM&E社に到着した。

「M&E社」

「本日よりM&E社企画部に就任するエドガー・ベックマンです。宜しくお願い致します。」

「とまあ、今日から一緒に働くことになるエドガー君だ。まだ色々知らない事もあるだろうからみんな色々教えてやってくれ。」

・一ヶ月後・

「エドガー君君に頼みたい仕事があるんだがちよと食堂で話さないかね。」

「構いません。」

「M&E社食堂」

「ビーフシチューとコーヒーを頼む。」

「僕はビーフステーキとブドウジュースをお願いします。」

「わかりました。それにしても部長は好きですねビーフシチュー。」

「ハハハ、ここのビーフシチューが美味いからだよ。これは病みつきになるな。」

「ありがとうございます。それでエドガー君は仕事の方はどうだい、何か困ったことはないかい？」

「いえ、仕事仲間の皆さんはとても親切ですし、仕事もあっていたようで結構早く飲み込めていますよ。」

「それは良かったね。優秀な新人が入ってきたと聞いていたけど君のことだったりしてな。ハハ。」

「それで部長話というのは?」

「ああ、そうだったな。まず君は対人関係を良くするが得意だっただろ?」

「ええ、一般的な人に比べれば得意だと思いますがそれがどうかしたんですか?」

「いや、今度アジアの方への旅行計画したいだろ?そのインストラクターになって貰いたいんだ。」

「え?どういうことですか?」

「いや、東洋の方の知識も結構あるそうじゃないか。それにあちらに対する差別感情もないようだし、初めての大きめの仕事にはちょうどいいと思ってるね。」

「しかし僕はあちらの言葉を話せませんよ。他にもっと適任がいるんじゃないですか。」
「それなら心配いらないよ現地に詳しい通訳をつけるからね。それなこれはいろんな社会を知るためでもある。君は確か小説を書いているんだったよな、しかもかなり売れているようだ。なんだったら今後この会社のアジア旅行の為の情報収集ということですね。自由行動も許可しよう。今回の事はその小説を書く上でも役立つと思うんだ。」

「どうだ引き受けてくれないか。もちろんそれなりの報酬も出そう。」

「少し考えさせていただけじゃないでしょうか。」

「まあすぐにどうこうで話じゃないんだ、まあ一週間くらいでの返答を待っているぞ。」

「で、結局どうするのかね？」

「行きます。」

「そうか、そうか。」

「それで、アジアのどこに行くんですか？」

「日本だ。」

i n n u e

t o b e c o n t

Go to Zipangu first

・192X年 X月 Y日 出発まで30日・

↳スタンフォード探偵事務所↳

ジリリリン♪ ガチャ

「はい、スタンフォード探偵事務所です。どのような用件でしょうか?、んエドガーかどうしたんだ?」

「実はついこの間旅行会社に就職したと言っただろう。それで会社が企画した旅行にインストラクターとしてついて行くことになったんだ。」

「それで何故それを俺に電話したんだ?」

「その事なんだがその旅行の行き先は日本なんだ。で確かユウドマリさんて日本人だったよな?できれば日本のことを教えて欲しいんだ。」

「それで、ユウドマリさんと仲の良い俺に頼んだわけか。」

「ああ、そうだ頼めるか?」

「今ちようど事務所のソファで寝ているよ。ちよと待つてろ、ユウドマリさん起きてください。」

「ん、ん々なんですかカール？」

「ユウドマリさんエドガーから電話です。」

「エドガーから？、はいはいユウドマリです。」

「ユウドマリさんいきなりで悪いんですが相談があるんです。実は、、

青年事情を説明中々

「そういう話ですか。そうですね他でもないエドガー君の頼みですし、協力しましょう。さらにその旅行私も参加するつもりですしね。」

「本当ですか？助かります。なんとお礼を言つて良いのやら。」

「良いんですよ。私は今ポストンで暮らしているんですが来れそうですか？」

「ええ、大丈夫です。住所をお聞きしても？」

「私の住所は々々です。なんなら私がいけないときにでも入れるよう合鍵を渡して起きましょう。」

「え、そんなまだそんなにお互いの事も知らないんですよ良いんですか？」

「私は貴方なら問題ないと信用しています。それな事に及んだら相応の対処をさせていただきます。まあ貴方相手にそんな心配する必要は無いと思えますけどね。」

「そうですね。詳しいお話がしたいので今からそちらに伺います。」　　プツ

それから青年は時間があるときはユウドマリ邸に通うようになった。そんなある日青年が図書館で読書をしていると

「エドガーさん最近美人さんの家に入り浸っているそうじゃないですか。」　　ズイツ
 そう言い身を乗り出して話しかけてきたのはあの一件以来関係がだんだん進展してきたエミリー・ペンドルトンだ。

「いや、まあそういうことになるか。」

「へ〜認めるんですね。それでどこまで進展したんですか？」

「なんか、勘違いしてるらしいけど僕とユウドマリさんはそんな関係じゃないよ。」

「ふーんじゃあどんな関係だというのですか？」

「教師と教え子かな。色々と日本文化についてや日本語について教えてもらっているんだ。」

「どうだか。そんなこと言つてそのユウドマリさんに会いたいから日本語とかを習つてるんじゃないですか？」

「そんなことはないよ。それにあの人は他に好きな人がいると思うよ。」

「そうですね。まあ良いです、そのユウドマリさんに直接確認します。」

そういういながらエミリー・ペンドルトンは去つて行つた。

「はあ、これはユウドマリさんに疑いを解いてもらうしかないか。」
ダダダツ 「ん？」

「ハアハア、すいませんエドガーさん信じてあげられなくて。」

「え、急にどうした。」

「はい、さつきそのユウドマリさんに会ったんです。」

「え、なんで分かったの？」

「容姿とかは分かかってましたからそれで話を聞いたらエドガーさんは海外旅行のインストラクターの為に勉強してるって、それに自分には他に好意を寄せてる人がいるって。」

「そうか、分かってくれてよかったよ。それと、旅行から帰ってきたら話があるけどいいかな？」

「もちろん。また明日会いましょうエドガーさん。」

「ああまた明日。」

・ 192X年 Y月 X日 出発当日・

「それで入ってきます。なにぶん遠いので帰って来るまで時間がかかると思いますが必ず帰ってきます。」

「氣つけてエドガー。」

「帰つて来るのを待つているよ兄さん。」

その後青年は集合場所に向かい。そこで挨拶などを済ませ、そこから旅行客とともに列車に乗り西海岸を目指した。

↳ 西海岸のとある港↳

「では皆様 p m 6 : 0 0 の就航 1 時間前まで待ちの方も自由に行動していただいて構いません。」

「ふう、やっと一息つけるな。一足先に乗っておくか、確かチケットなどこの部屋か書いて会つたよな、2—321号室。二等船室か、まあ一等船室はさすがにインストラクターにはないか。船名は『S p e r a』ラテン語で希望か。」

「エドガーさんちよといいですか。」

そう言つて 1 人の若い女性が話しかけてきた。青年の同僚だ。

「アレックスさん何かありましたか。」

「特に何かあつたとかはないですけどエドガーさんと話したいなあとおもひまして。一緒にソフトドリンクでも飲みながら話してもしませんか?」

「いいですけど、アレックスさんは係じやないんですか?」

「違いますよ。私が連絡要員なのは向こうについてからです。それじゃあ早速行きま

しよう。」

（S p e r a 船内レストラン）

「え〜！エドガーさんケンフォード大学で何ですか！あそこって確か結構な名門校だったじゃないですか。凄いですよ〜！」

「いや、弟の方がすごいよ。なんとってあのミスカトニツクの大学院にいるからね。」

「えー！！ミスカトニツクってあのミスカトニツクですか！」

「アレックスさん声が大きいよ、周りに見られてるよ。」

「あ、これは失礼しました。それで何学部だったんですか？」

「心理学部だよ。本当は天文学部にも興味はあったんだけどね。」

「そう言った後で青年は注文していたブドウジュースに口をつけた。」

「そういうえばエドガーさんってよくブドウジュース飲んでるみたいですけど好きなんですか？後いつの間にか口調が変わっていますね。」

「ああ、ごめん。ダメだったかな。」

「そんなことないです。」

「そうか、それで僕がブドウジュースが好きかだったね。結論から言わせてもらおうと大好きだ。あの芳醇な香りがたまらない、そして絶妙な甘みと酸味のバランス実に素晴

らしい！それに、前フランスに行った時に飲んだワインが思い出される、
そんなこんながあつて、特に問題もなく出航の時間へ、

ボー—ーオ

という汽笛とともに客船 *Spera* は出航して行つた。

その夜、青年は

「ん、ううん、あう。。。、

夢の中で青年は深い海にいた。そして最初の方こそ水圧と息苦しさを感じていたが
1分もすると不自然なほどそれが和らいだ。辺りを見回すと目の前に異常な角度を持
つ海底神殿が存在した。青年は不思議とそこに行かねばと思ひ神殿へと向かつて行つ
た。入り口まで来ると光が当たらなくて暗い神殿内からゴボゴボというと耳に残る音
が聞こえてきた。青年が音の正体が何かと身を乗り出したその時

「はっ—」 バツ

青年は飛び起きた。

(なんだつたんださっきの夢は。あの最後に見えたものは一体。) ハアハア

「おい大丈夫か新人？うなされていと思つたら級に飛び起きて、悪魔でも見たのか
？」

「ウオードさん。大丈夫です、きつと久しぶりの船旅で緊張していたのでしよう。
ちよと変な夢を見ただけです。」

「そうか、ならいいが。明日に響かないようにしろ、船の上でも仕事はあるんだ。」

「はい。分かっています。」

素晴らしい青年は再び眠りについた。

Go to Zipangu second

♪Spera ラウンジ♪

「今日はゆつくりできそうだ。」

「本当ですねエドガーさん。これでチケットが船内サービス利用し放題だったらいいですけどね。会社が出す限られた資金を使うか自費でなんとかしなければいけませんからね。」

「それを言ったらきりがいいよ。僕は会社が二等船室のチケットとそれなりの費用を出したりと、かなり太っ腹だと思うよ。なんせこの船は世界有数の豪華客船だしね。」

青年が同僚と話をしていると

「ちよといいか？」

「はいなんでしよう。」

青年が振り向くとそこには金髪で整った顔立ちをした長身の女性が立っていた。

「初めましてMr. エドガー。私はマリサ・ミズル、君の話は蘭子から話は聞いていますよ。それで、一つお願いなんですがこれから行くカジノで同伴してほしいんだけど頼めるかな？」

(「ミイルズ^霧」)

「それは何故か教えて頂いてもよろしいでしょうか？理由によつては同伴しかねますが。」

「変な人に寄りつかれないようにボディーガードとして居てもらいたいんだ。それにこれはあくまで個人的な依頼だし断つたもらつても一向に構わないよ。」

「ちよとそんなボディーガードをしろだなんて聞けませんよ。」

「、、まあそれなら行つてもいいでしょう。」

「エドガーさん！」

その答えを聞いてマリサはニコリと笑みを浮かべた。

「いいんだよ。僕は彼女の個人的な依頼を了承したただだよ。それでは行きましようかM.S. ミイルズ。」

く船内通路く

「そういえばさつきはOKしましたけど、この客船のカジノなら問題がある人物ならすぐにつまみだされるんじゃないですか？」

「まあ、いいじゃない。それに、蘭子と合流するつもりだからね、あいつはアジア系でしょ私もハーフだし。この今の世界の状況を見ればわかるね？」

「まあこんな世界ですからね。まあそう言う連中は僕が可能な限りなんとかします

よ。」

「ありがとう。」

(その後カジノでユウドマリさんと合流してミイルズさんはカジノで楽しんでいた。特に問題もなかった。)

「そんな事があつたのか。それにしても今まではなしをきいていると新人君はつくづく美人に縁があるんだな。素直に羨ましいと思うよ。」

「そうですか、ウオードさんの奥様やご友人にも容姿の整つた方がいたと思いますが？」

「いや、私が言っているのは若いまだ二十代前半の美人のことだよ。」

「そんな事言つていいんですか？奥様に悪いんじゃないですか？」

「心配ないよ。妻はこの程度のことは気にしないたちだからな。それよりも君はいいのか好き人に勘違いされるかもしれないぞ。」

「ははは、肝に命じておきます。あ、オレンジジュースウオードさんも如何ですか？」

「ただだこう。 うん、たまにはコーヒー以外を飲むのもいいな。」

「そろそろ寝ましようか。明日に響きますし。」

「まあそうだな、せつかくAファイブカードが揃つていたんだがな。」

「え!？」

「それはそれとして、おやすみベックマン。」

「おやすみなさいウオードさん。」

「おーい、起きてくれエドガー君。おーい。」
ユサユサ

「ん、んあ、どちら様ですか？」

目を覚ますと青年の前には初老の男性が立っていた。

「儂か？まあ、前にあったときは君はまだ幼かったし儂もかなり変わったからの。」

そう言つて男性は男性は自身の腹を叩きながら頭を撫でた。そして、彼は薄い青の入院着の様な服を着てスリッパを履いていた。

青年が辺りを見回すと自分も同じ様な薄い青の入院着の様な服を着てスリッパを履いているのに気がついた。

そして、同じ格好をした2人の女性にも、

「ユウドマリさんにミイズルさん？一体ここは？」

「あ、起きたか。」

「ようやく起きましたか。ここがどこなのかという質問は残念ながらお答えにできません。私達も起きたらここにいましたから。まあ似た様な事なら私達は経験がありま

すが、貴方もありますよね」

「っ!!」

「なんじや最近の若いもんはこんな奇妙な体験するものなのか?」

「ここから出るには『お客様』とやらにコーヒーを出さなければいけないらしい。」

そう言つてミイズルは一枚の紙切れを青年と男性に見せた。

・紙切れ・

「1時間以内にお客様へコーヒーを出しておいてね。確かお客様は砂糖とミルクの入つたコーヒーを好んでいた気がするから、ちゃんとお客様の好みに合わせたコーヒーを作るように」

「あとこつちの紙切れも見といてくれ。」

そのの紙切れにはこの場所の地図と思わしきものが描かれていた。『調理室』を基本に西の部屋は『書物庫』東の部屋は『食糧庫』南の部屋は『奴隷の部屋』そしてさらにその南が『応接室』が描かれていた。

「どうやら私達は1時間以内に砂糖&ミルク入りのコーヒーを作つて応接室にいると思われる『お客様』とやらに出さないといけないらしい。」

「インスタントコーヒーとミルクとお湯の入つたポッドを見つけましたよ。」

「なんじゃこのコーヒーカビだらけじゃないか。」

「ええ、『お客様』呼ばれる相手に出すわけにはいきませぬ。ですから他にもコーヒーがないか探そうと思つています。そういうわけですから皆さんで食料庫に行こうと思ひます。1人でいると何があるかわかりませぬしね。」

その後反対意見も特になく一行は食糧庫へ向かつた。

「しつ、何か聞こえませんか？」

「確かに聞こえますね。」

「何かの咀嚼音みたいだの。」

「中に何かがあるつてことか。」

「僕が入りますから皆さんは扉の陰でいつでも閉めれる様に準備しておいてください。」

その言葉には多少の反論があつたものの結局青年が突入することになった。

「では行きます。」 バツ

青年が扉を開けるとそこには薄い青の入院着を身にまとつた10歳くらいの黒髪の少女が居た。

彼女は『Cube^角 sugar^{砂糖}』と書かれた袋を抱えて居て、袋から角砂糖を取り出しては食べていた。そして、すでに仲間のほとんどなさそうな袋から角砂糖を1つ取り

出し、

「食べちゃダメだ！」

その声を聞いた少女は直前で角砂糖を口に入れるのをやめた。

「君名前はなんていうの？」

「、、」フルフル

「もしかして喋れないのか？」

「、、」コクコク

「ユウドマリさんちよと来ていただけますか？」

「どうしたんですか？」

「この部屋にいた少女を見ておいてください。お願いします。」

「分かりました。」

「さてコーヒーはどこに、あ、これは」

青年がとつきに口を押さえて後ずさってしまったのも無理はなかった何故なら部屋に吊るされていた『肉』は手や足、胴体といったパーツごとに分割された『人肉』だったのだ。

ベックマン 現在正気度98↓97

そして吊るされた人肉のうちの一つの手に髪が握られていた。

「これは、」

・ 自体に握られたメモ・

「それは甘いものが好きな女の子

命じられたことに、絶対に従うのがその子の役目

とてもとても、可哀そうな女の子」

(このメモはあの少女のことを指しているのか?)

「ユウドマリさんこの部屋にはその砂糖の袋以外にめぼしいものもありません。でましよう。」

「ええそうですね。『書物庫』見ておきたいですしね。」

「それで、その子がいたのか。で、話せないと?単に英語がわからないじゃなくて?」

「どうやら本当に話せない様です。よく診ていないので詳しいことはわかりませんが。」

「お二方早く来てください。」

4人は『書物庫』の扉の前に立った。書物庫の扉はなんの変哲も無いなんの部屋かを表すプレートがたっただけのなんの変哲も無いものだった。

「さつきと同じ様に行こうと思いますが皆さんはよろしいでしょうか?」

「異論はありません。」

「私も異論はありませんわ。」

「儂も無いよ。」

「では。」バツ

青年が扉を開けた。

・書物庫・

その部屋は中央に3本脚の丸机があり、その上にあるキャンドル皿に寄せられた蠟燭が部屋をうつすらと照らしていた。また壁には本がぎつしりと詰まった本棚があった。

「皆さん大丈夫そうです。それと見てもらいたいものがあるので来てください。」

「これは凄いですね。いろいろな言語の様々なジャンルの本がありますよ。」

「私は4カ国語を話せるし読み書きもできるんだけど読めないものの方が多いわね。」

「お嬢ちゃんも4カ国語を話せるのか、儂は9カ国語を理解できるぞい。まあ、それでも読めないものが多いが。」

「ん、この本は、」

青年は本棚を見ている中で2冊の本が目につき取り出した。

「どうしたんだエドガー君？何かあったのか？」

「この状況のヒントになりそうな本を見つけまして。ちよと見ていただけませんか？」

その2冊のタイトルはそれぞれ『お客様対応マニユアル』、『動物図鑑』とあった。

男性は『お客様対応マニユアル』を手にとった。

「なんじゃこれ白紙じゃ、なにい！文字が浮かび上がって来ただと！」 男性 現

在正気度60↓59

「あ、浮かび上がったってどういう事ですか？」

「いやなんでもないわい。見間違えじゃろう。」

・お客様対応マニユアルの前身・

「1. お客様がこられた時には、まずは帽子や傘など身の回りのものを預かり、お客様の用のスリッパを履いていただきますよう。」

2. お客様には必ずコーヒーを飲んでから帰っていただきます。お客様が『これなら飲んででも良い』と思ってももらえるように、ちゃんとお客様の好みに合わせたコーヒーをお出ししましょう

3. ただし、お客様とは言え無礼な振る舞いをされるなら、容赦はしません。調理室の引き出しにあるナイフでメッタ刺しにしてしまっても構いません」

一方青年は、可愛らしいファンシーな表紙の本を開こうとしていた。しかしあるページ以外は糊付けされた様に開かなかつた。

「仕方がない。このページを見るか。」

青年がページを開くと最初に目の無いヒキガエルの様な異形が目に入った。そして、その解説が載っていた

・動物図鑑の前身・

「彼らは巨大なヒキガエルのような姿をし、灰色がかった白色の大きな脂っぽい体をしている。また鼻づらの先にはピンク色の短い震える触手が生えている。そしてドリームランドの月の上でニヤルラトホテプに仕える彼らは、異種族を捕えて拷問にかけるところを何より好む。拷問にかけている間は、それを邪魔されな限り、他のことが何も目に入らない程だ」

その見開きにはフアンシーな表紙と打って変わって、ムーンビーストの拷問の様子が鮮明かつ詳細に記されていた。

それを見た瞬間青年は吐き気を催したくなる様な不快感と生理的嫌悪感を感じた。

ベックマン 現在正気度97↓96 ムーンビーストについて詳しく知った

為 クトウルフ神話0↓2

「おえっ」ガタ

「どうしましたか?、その本を見せてください。」バツ

本の内容に動揺していた青年は簡単に本を取り上げられてしまった。

「これはムーンビーストの解説ですか。」 夕泊 現在正気度 恐怖への慣れにより

減少なし　　クトゥルフ神話　すでに知っている情報のため上昇なし。

「ムーンビーストだと！見せてくれ。」ズイ　　ミイズル　　現在正気度94↓93

クトゥルフ神話夕泊と同一の理由しない。

「あの2人とも大丈夫なんですか、そのかなりひどい内容ですが。」

「私は大丈夫です。慣れていきますからね。それよりマリサは大丈夫ですか？」

「まあ、これぐらいなら。」

「おい3人とも、大事な話があるから来てくれ。」

「この本にこの様なことが書いてあるのだが『お客様』とはもしかしたら儂らのことじゃ無いのかの?」

「確かにその可能性はありますね。それなら、そこにあるスリッパを彼女にはかせた方がいいんじゃないですか。」

「そうですね。えつと君スリッパを履いてもらえるかな?」

「、、」コクコク

少女は青年の言葉に頷いてスリッパを履いた。

「あれミイルズさんはどちらに行かれたんですか?」

「マリサなら扉にあった小窓から奴隷の部屋を確認するみたいですよ。」

・南の扉前・

(なんだこの唸り声は、獣の様でそれより遙かに不快な呼吸音は、神話生物か、しかもムーンビーストの可能性がたかそうだ。)

スツ

ミイズルは小窓から中の様子を伺った。

「!!」

そこには真つ白で明るい部屋が存在しており。奥には一つの扉とその前に槍を持ったカエル様な姿をした異形。ムーンビーストが陣取っていた。

ミイズル 現在正気度93↓89 (恐怖への慣れ)

「はあはあ、いつ見ても嫌になる奴らだ、このことを報告しないと。」

そー、

ガシツ

「!!」ばっ

ミイズルが肩を掴まれて振り返るとそこには友人の夕泊 蘭子が立っていた。

「大丈夫ですかマリサ? 何かいたんですか?」

「ムーンビーストがいた。4匹。」プルプル

「ありがとうございますマリサ。それととりあえず深呼吸しましょうか。」

4人は南の扉の前に集まっていた。

「あの本の異形がいるというんですか?」

「あの異形とは先ほど本に描かれていたと君たちが言っていたもののことか?」

「お二人の質問に答えると答えはYESです。さらに奥の扉の前に陣取っていたということは多分扉を守っていたんでしょうね。」

「あの強行突破とか無理なんですか？」

「あのムーンビーストの身体つきを見る限り難しいと思う。それにそれを試みた場合戦闘になるだろうし。」

「まあ、方法はありますけどね。」

「どんな方法じゃ？」

「皆さんは魔術を信じますか？」

く 奴隷の部屋く

バンっ

「「「うー」」」

「くくナークllタイトの障壁の創造。」

ぶうん、バシユ

夕泊 現在正気度69↓65

ミイズル 現在正気度

89↓83

ムーンビーストの周りに魔術的な障壁が構成された。

「ggfpxjxUuxfg・, 3gifefdt (ドリームランド語)」

「h x s h g z g k i (4) (i g k x e e v (同上))」

「さ、行きますよ。」

「わかりました。」

「これが魔術というやつか初めて見たよ。」

「ちよと待つて鯨が空を飛んでいるんだけど。」

「はい?」

「なんじゃと。」

「気にしないでください。魔術の副作用です。」

↳ 応接間↳

そこは殺風景な部屋だった。部屋の中央に机と椅子が1つづつあり、机の上には紙切れがあった。

「この紙切れはなんじやろうな、

・ 応接間のメモ・

「ようこそおいでくださいました。』 『さん。突然のことで驚きでしょうが、コーヒーを一杯召し上がっていただけはお帰りいただけますので、今しばらくお待ちください。心配なく。そのコーヒーは下僕の少女がお持ちしますので、今しばらくお待ちください。」

P.S. もし待ちきれない場合には、御自分で調理室に足を運び、足元収納庫にあるインスタントコーヒーをお使いください。隣の私の奴隷についてはご安心を。この部屋から出る者には絶対に手を出さないようにしつけてありますので」

「これは、なんだ？文字が浮かび上がってくる、これは儂の名前じゃと!!」

男性が手メモを持つと男性の名前であるジエイムズ・スミスが空白の部分に浮かび上がった。

「そのメモは、あそこ床下収納があつたんだな。ちよと取ってくる。」

「マリサ、途中で空飛ぶ鯨を追いかけて行ったらダメですよ。」

その言葉にミイズルは顔を赤くして、「そんなことするか。」と言つて部屋を出て行った。

「あのさっきのセリフどういう意味だったんですかユウドマリさん?」

「彼女は普段隠していますけど乙女な部分もありますからね、ちよとからかつて見たんです。」

その後無事5人分のコーヒーが入れられ彼らはそれを飲み干した。すると、視界が白くなり意識も薄れて行き誰かが話しかける声が聞こえてきた。

「コーヒーはお楽しみいただけましたか? またの御来訪、お待ちしております。」

その少女はお客様ではなかったのだけど、まあ今回だけは良しとしようかな」

青年が目覚めるとそこは昨夜眠っていた。また不思議なことにあの妙な部屋での疲労感は一切消えていて、まるで夢の出来事の様にも感じられた。ふと、そんなことを思っていると青年は自分が何か握っているのに気がついた、それはカードの様なものだった。最初に見た面は真っ黒に塗りつぶされていたが裏には何かかかっていた。そこにあつたのは10個の空欄とその1つに真っ赤なスタンプが押されていた。

そして右下に「またのご来訪をお待ちしております。」という文字が記されていた。青年にはそのカードの意味するところを知る術はなかった。

t o b e c o n t i n u e

番外編　マリサ・ミイルズと神話の片鱗　　b e g i

n n i n g

これはマリサ・ミイルズが夕泊　蘭子と共に本編のアメリカに飛ばされる前のお話し。

201X年　　W月　　Y日

その日の夜一人の女性が上機嫌に鼻歌を歌いながら夜道を歩いていた。彼女の名は〔マリサ・ミイルズ〕。

準キャリア（この世界の公的組織は我々の世界のものとは多少異なる部分がある。）警察に採用された女性警官だ。ちなみに日本人と英国人のハーフである。

彼女が何故上機嫌かというと、

「ふーん、ふーん、ふふ〜ん♪明後日はーレイムと憲晴が〜来るよ〜♪　ふふ、光輝に知らせないとね。」

という事らしい。

そんな時、　ピリリリッと電話が鳴った。

ピッ「はい、ミイルズです。」

「もしもし、マリサ。突然ごめんなさい。相談したいことがあるのだけれど明日会えないかしら?」

「お、桜か。どうしたんだ相談したい事って?」

「私がおばあちゃんのと菓子屋を手伝っているのは知っているわね。その「つばき菓子舗」って言うんだけど最近めっきり客が来なくなつたの。味は前と変わらないしついでこの前まで繁盛していたんだけど。それでねおばあちゃん最近元気が無くて元気づけるためにお店を繁盛させて元気づけたいんだけど、ひとまず客観的な意見が必要だと思うの。それで強力して欲しいんだけどいいかしら?」

「そんなことか、友達の話だし協力するぜ。」

「(そういえばマリサの男っぽいくて、たまにお嬢様言葉が混ざる口調あのシューティングゲームのキャラから来てるのかな?確かに似ているけど。)」

「後ろの方声に出していたぞ桜。私の口調の話だな。まあ、影響は受けているぞ。」

「ごめん、声に出していた?」

「別に謝らなくてもいいぞ、気にしてないからな。ソロで桜は私にどうして欲しいんだ?」

「うん、明日の10時に【つばき菓子舗】にきてもらえるかしら?」

「そう言うことでしたら構いませんわ。」

「じゃあまた明日マリサ。」

「ええまた明日桜。」 ピッ

ブーン

「メールだ、へーこの地図じゃここの近くじゃないか。光輝を誘うか。、」プルルル、プルルル

「はい、こちら聖川探偵事務所です。」

「光輝、私だけど。」

「マリサか、どうしたんだ？お前からかけて来るとは珍しい。」

「まあ、私は何か用があるときはなるべく直接会うようにしているからな。それで要件なんだがお前が一時期行為を寄せていた桜ちゃんが、、、（先ほどの桜との会話の内容。）と言うことで困っているらしいんだ。そのことな明日午前10時に「つばき菓子舗」に来て欲しいって話だけど一緒に来るか？」

「明日か、最近は特に仕事もないしな、よし行くか！」

「そう来なくちゃな。じゃ地図を送りますわね。また明日会いましょう光輝。」

「ところでマリサその口調h（公私の区別はつけてるわ。）さいですか。またなマリサ」
ピッ

・翌日・

マリサはニユースを聞きながら朝食を食べていた。

「ん〜日本で生活できてよかった。私は和食派ですからね。」

その姿はとても幸せそうであった。

一方光輝こと聖川光輝は、

「ふん、ふん、ふん、」ブンツ、ブンツ、ブンツ

ニユースをつけながら杖で素振りをしていた。そして悲劇は起こった。

ズキイ「イツテ、」スポッ

筋肉痛による痛みで杖を離してしまった。そうなるも当然

ガツシャーン

「あ、花瓶が、今月で2度目だよこれ。」

疲れなどがたまっているようだ。

【つばき菓子舗】がある商店街は比較的どの店にも客が入っており、賑わっていた。その商店街の中に【つばき菓子舗】と書かれた看板のある店があった。こぢんまりとして店で、建ってからそれなりの年数が経過しているようだ。しかし、手入れが行き届いているのか清潔感があり、どこか懐かしさを感じさせるような落ち着いた店だ。そうであるのに、他の店と比べて客がおらず、全くと言っていいほど誰かが入って行く気配はな

い。

2人はそこに約束の五分前には到着した。そして、桜が2人を出迎えた。

「聖川君も来たんだ。よかったこれから迎えに行こうと思つてたのよ。さっ入つて入つて。」

店内に入ると、ショーケースがあり、中には和菓子が並んでいる。練り切りや羊羹、大福やどら焼き、それぞれの数は多くないものの種類は豊富だ。

また、ショーケースの向うに作業場らしき場所がガラス越しに見える。そこで数人が何かの作業をしており、作つているところが見えるつくりらしい。

そして、店内の奥まったところに喫茶スペースがあつた。

どうやら、時代劇などの茶屋を模しているようだ。

「桜、あのレジ近くの神棚なんか置いてあつたらしいけど何が置いてあつたんだ？」

「聖川君は探偵だつたね、やつぱりそう言うことが気になるんだ。あそこにはねおばあちゃんが若い頃おじいちゃんからもらつた人形があつたの。で、おばあちゃんはその人形はこの店の守り神だと言つていたんだけど最近空き巣に盗まれちゃたの。それでその盗み方が奇妙で他のものの手をつけず人形だけとつて行つたのよ。人形だけだから警察も真剣になつてくれないのよ。あの人形おじいちゃんから初めてもらつた贈り物みたいでそれでおばあちゃん元気をなくしちゃつて、、、あ、ごめんマリサは警官だつ

たのよね「気にしなくていい。ただ真面目な奴はほんのちよとした事にも真っ直ぐに取り組むし、重大犯罪の方が優先されることを覚えておいてくれ。それと謝る相手が違うぞ。」ごめん。」

「それで、その人形とやらはどんなものなんだ？」

「それは、..、

「なるほど、赤い着物を着たおかつぱ頭の女の子の人形。大きさは20cmほど。

・かわいらしい、ぬいぐるみの人形。こんなところか。」

その後桜は2人を喫茶スペースに案内すると、お茶とおはぎを持って来た。

「うちで一番人気の商品……だったの。でも、味は変わっていないし、おばあちゃんの作るあんこは絶品なのよ」

「それじゃありがたいがたくいただくぜ。いただきます。」パク

「いただきます。」パク

2人がおはぎを口に入れると、優しい甘みが口の中に広がる。しかし甘いだけではなく、ほんの少しだけ塩味が感じられる。その塩味が絶妙にあんこの甘さを引き立て、くどさなど全く感じさせない。おばあちゃんの味、どこか懐かしさを感じる。それはまさに絶品。そう言い表すほかなかった。

「ね？身内のひいき目なしにしても美味しいでしょう？」

「こんな美味しいおはぎなかなかありませんわ。」

「俺が今まで食べた中で一番だな。」

それを聞いた桜は呟く、

「確かに洋菓子だつて美味しいと思うし好きだけれど、おばあちゃんの和菓子は、あんなお店とは比べものにならないくらい美味しいのに」

「どう言うことなのかな？」

「実は、最近商店街の端に洋菓子店ができてね、ナリカネて言うなのだけど、そこで来た当初は全く人気がなかったの。私も実際食べてみたんだけどあんまり美味しい商品はなかったわね。でも最近は行列ができるほどの人気店になってこの店の常連さんもある。その店に通い詰めるようになったのよ。それでこの前その店主にあつた話を聞いてみたら、本当かどうかわからないけど以前と何も変えてないって言われたのよ。それで、どうやったかわからないけどあの店がうちに何かやったんじゃないかってね。」

そのとき作業場から1人の老女が現れた。

「桜や、人様のことを悪く言つてはいけないよ。それは自分に返つてくるのだからね」

「あの貴女は？」　聖川がたずねる。

「私はその桜の祖母の小林つばきだよ。おいしいと言つてくれてありがとう。最近めつきりお客様がいらっしゃらなくてね。やっぱり笑顔で美味しいと言つてもらえる

ことが一番嬉しいよ。」

そう言つて2人に笑いかける顔はどこか元気が無かつた。

その後ミイルズと聖川の2人はいくらか話をした後店を出た。

店を出ると桜が見送りに来た。

「おいしいつていつてもらえて良かった。今日はありがとう。おばあちゃんも少し元気が出たみたい。誠実な商売をしていたらきつとお客さんも戻つてきてくれるわよね。でも……ううん、なんでもないの。」

「桜。さつきから何隠しているようだけどよかつたら、親友の私を信じて話してくれないかな。私も光輝も言いふらしたりなんかしないかさ、それに話すと楽になるよ。」ニコ

「うんえつとね、人形が盗まれた日と洋菓子店が人気になった日が重なつてるのよ。だからナリカネが怪しいと思うのよ。それと、これは本当に関係がない話かもしれないけど、噂で後店の常連になった人が行方不明になっているの。全員がそうつていうわけではないけどうちの常連さんもいたから心配なのよ。」

「そう、話してくれてありがとう桜。」

「俺からも礼を言わせてもらおうよ。ありがとう桜。」

「まずは聞き込みから行くか。」

「そうだな。」

2人は桜が帰った後その人気の洋菓子店について聞き込みをする事にした。その結果、

・今や洋菓子店は大人気

・並ばないと入れない。

・繁盛しているのに、なぜか店主が一人で切り盛りしている。

・中にはおいしくないという人もいるようだが、少数派。

・美形な常連客がいたが、最近見ない。と言う答えが返って来た。

「じゃあそろそろ行くか。話によると1時間は待たないといけならしいな。」

「そうだな、考え過ぎだろうけどもしかしたら何か裏があるかもしれないしな。」

洋菓子店には行列ができていて、2人は1時間かけて洋菓子店に入った。

洋菓子店の店内に入ると比較的新しい内装で、甘いおいが漂っていた。ショーケースには色とりどりのケーキが並べられており、その向こうは作業場のようだが店内からは見ることができないくらいだ。店内は他にも、焼き菓子が並べられていたり、広めのカフェスペースがあった。

またカフェスペースには本棚が設置されている。

そして、店内では1人の男性が忙しそうに働いていた。店が小さいためか他に店員はいないようだ。

「わ、あれはドールハウスでしょうか。」

「本当だ。かなり大きいな。」

2人の見つけたドールハウスはインテリアのようで、ドールハウスの外に美しい人形もお茶会をしているように何体か飾られている。また、ドールハウスは開閉できるタイプにもかわらず閉じられている。

「ねえ、ミキ知ってる真夜中にこの店が開いてるのを見た人がいるんだって。」

「あ、それ私も知ってるなんかさ、常連客相手にお茶会のサービスしてるらしいよ。」

（深夜のお茶会。何かにありますわね。）

「？、ずいぶん精巧にできている人形だな。！（あの人形の髪と日本物じゃないか！まさかこの人形は、）」
 聖川 現在正気度65↓64

（行方不明になった常連客じゃ。）
 聖川 現在正気度64↓63

「どうかしたのか光輝？顔が青いぞ大丈夫か？」

「なんでもない。気にしないでくれ。それより何か注文しよう。」

「助けてよう……つばきちゃんのおうちに返してう……」

「（今の声ドールハウスから聞こえてきたい、る。）

マイルズ 現在正気度90↓89

その後2人は、マイルズはチーズケーキと紅茶、聖川はショートケーキとコーヒーを注文してカフェスペースに来た。

「いただきます。」「、、、

「これあまり美味しくないなそこまで美味しくないな。」

「確かに行列ができるほどじゃないな。そういえばあそこ本棚があつたよな、何か面白い本はないかな。」

「じゃあ私も観てみようか。」

そこが特に何事もなく店を出て帰宅した。しかしその夜、

「マリサこんな夜遅くに電話してごめん。実は今日ナリカネの店主から深夜のお茶会に誘われたの。何かわかるかもしれないから行ってくるわ。」

「おい、それはどう言う」「ぶつ、ツ、ツ、」くそ、

ブルルル、ブルルル、ブルルル

「誰だこんな時間に。」ガチャ

「はい聖川探偵事務所ですが、「光輝大変だ！桜がナリカネの店主に深夜のお茶会にさ

そわれていくらしい。何か、嫌な予感がする一緒に来てくれ。」分かった。」

2人が洋菓子店の前に着くと深夜にもかかわらず明かりがついていた。中に入ると机に突っ伏した桜と店主の男がいた。

「おや、お客様は正規のお客様ではございませんね。」シユ

そう言うと、店主の男はナイフだからかかって来た。

「うわ、あぶな。」

「いきなりナイフで切りつけてくるなんてお前常識ないのか？それと、今のは殺人未遂だ。逮捕させてもらうぞ。」

「はあ、なにを行ってるんですか逮捕とか警官ですか？大体このナイフが見えないんですか。」

「心配するな、その彼女は警官だし、現行犯の場合は一般人でも逮捕することができんだ。さらにその程度の武装どうって事ない。ハアツ」そう言い終えると聖川は持っていた杖を店主の男に振った。

ビュン、ドゴオ

「ゲハアツ。」ドサ

聖川の強烈な一撃が店主の男をとらえた。その一撃は一撃で男を気絶させた。

「ヒュー、棒術に関しては一人前だなお前。」

「まあ、鍛えているからな。それと、あの時は喋る決心がつかなかったが今ようやくついた。」

「なんの話だ？」

「この人形の目と髪なんだが、どうやら本物の人間の部位を使っているようだ。」

「どれどれ、これは本当のようだな。」 ミイルズ 現在正気度89↓88

「私も黙っていたことを話すよ。実はドールハウスの中から、「つばきちちゃんの家に帰して」と言う内容が聞こえて来た。」

「開けて観て大丈夫か？」

「私が言い訳を考えといてやる、だから一緒に開けるぞ。」

「せーの。」 バキッ

2人は力を合わせてドールハウスをこじ開けた。

ドールハウスの中からは「赤い着物を着た20cmくらいの人形」が出てきた。

「もしかして、桜が言っていた人形ってのはこれなんじゃ？」

「多分そうだね。ん、どうした。」

「証拠になるかもしれないから一時的に警察で保管するとか言わないのか？」

「そんな無粋なこと言わないぞ？ それと証拠なら隠しカメラとボイスレコーダーとついているから大丈夫だ。さてと、こいつを縛って人形をつばきさんに見せようか。それと桜も起こさないとな。まあ、今日は遅いから人形を見せるのは明日にしよう。警察に連絡もしないといけないからな。」

「その場合事情聴取を受けないといけないのか？」

「あ、今日は一旦帰ろう。それで、明日人形をおばあさんに見せよう。店主の方はそこからへんで寝かせてればなんとかなるよ。うんきつと。」

「……、まあ帰ろう。それと、明日あの2人が来るんだったな？」

「そんなこんながあり翌日2人は人形を持って【つばき菓子舗】に来ていた。昨日と違って少しは客がいるようだ。」

そして、こんな会話が聞こえて来た。

「やっぱりここの味が一番でねえ」

「どうして、あんなに通ったのかしら」

「つばきさん、空き巣をしたことを悔いてる人にあつたのですが、あなたの人形とはもしかして、これじゃないですか？」

それを聞いた彼女は涙を流しながら人形を受け取り

「ああ、おかえり、おかえり。ありがとう、本当にありがとうねえ」

「いえ、人として当然のことをしたまでです。今日は人と会う約束があるのでそろそろ失礼します。」

「あ、羊羹買います。」

その後【つばき菓子舗】は徐々に人気を取り戻していくことだろう。

そして、後日とあるニュースが流れた。ナリカネの店主が逮捕された。有名洋菓子店の闇、常連客を誘拐、殺害。違法薬物の製造の疑い。と行った内容出会った。

2人の最初の小さな冒険は幕を閉じた。

マリサ・ミルズと神話の片鱗～再会 reunion
& professor, old story

～商店街～

前回和菓子店に人形を届けてから10分後

「久しぶりだな2人に会うのは。」

「そうだな、大学を卒業してから会ってないもんな。それとマリサもつとおめかししなくてよかったのか? レイムちゃんが来るんだろう?」

「お前まだ言ってるのか。私とレイムはそんなじゃない。それにそれを言うならお前と光輝との仲も相当噂されていたぞ。」

「ナニイ! ちよ、それはどう言うk 「そんなことよりもうすぐ待ち合わせの時間だ、早く行くぞ。」 そんなことじゃないだろ! あっ待ってくれ!」

～豊田駅前～

豊田駅前のバス停横のベンチ、そこで2人の若い男女が待ち人を待っていた。

「遅いわね～。一体何してるのよあの2人は、場所を指定しといて。こういうのは指

定していた方が早く来るのが常識じゃない。ね光輝さん。」

「まあ確かにそうだね。しかしあの2人が遅れるなんて珍しい何かあったのか。」

彼らの名前は男性の方が緋野村 憲晴、女性の方がレイム・アバーライン。彼らは学生時代の友人に会いにこの豊田市に来ていた。

「しかし、この街に来るのも久しぶりだな。あの教授は元気になっているかな。」

「そうね、私は今ロンドンに住んでるからそうそう来れないのよね。でも光輝さんは意外と近くに住んでいるんじゃないか？」

「ああ、済まない言っただけじゃなかったよ。だが大学を卒業してから引越したんだよ。四国の方にね、だからそうそう気軽には来れなくてね。「おーい。」話ようやく来たか。」

「済まん遅くなった。」

「本当よレディーを待たせるなんて何考えているの?」

「まあ、まあ光輝も反省してるようだしいいじゃないか。」

「貴方もよ、マリサ!」

「私もかよ!」

「それよりどうしたんだ、2人が遅れるなんて珍しいじゃないか?」

「いや実はね、、」

「そんなことがあったんだ。ただそれって警察に報告すべきことでしょ！」

「いや、まあその、」

「まあ咎められた時はその時だな。それじゃあそろそろ行くか。」

「行くってどこに行くんだ緋野村？」

「お前の事務所に決まっているだろ。」

↳ 聖川探偵事務所前↳

聖川の探偵事務所前には一人の男が立っていた。

「ん、あの人は、徐手教授ではありませんか。」

「お、君は聖川君か。久しぶりだな。」

「お久しぶりです。ところでなぜ教授はこのようなところに？」

「なに、マリサ君から電話をもらってね、緋野村君とアバーライン君がここに来ると聞いていてね、会いに来たというわけだよ。」

「お久しぶりです徐手教授。」

「ああ久しぶりだね、緋野村君アバーライン君。また君達に会えて嬉しいよ。マリサ君は2日ぶりだね。」

「そうですね。私は教授にちよくちよく会いに行っていますからね。それで教授、明

野君も来てるんですか？」

「彼は今道路の向こう側のコンビニにいるよ。みんなも揃ったようだし彼を呼び戻さないかね。」

(いまマリサつて人によつて話し方がずいぶん変わるわね)

↳ 聖川探偵事務所

「お久しぶりですレイムさん相変わらずお美しくて何よりです。あ、他の皆さんも久しぶりです。」

「おい、明野俺たちはオマケかなんかか？」

「いえ聖川さん、滅相もございません。」

「それで何で良夫もいるのよ。」

「まあまあレイム君そう邪険しない。彼は私がマリサ君に誘われたとき一緒にいたから来ることになったんだよ。」

「そうなんですよ。レイムさんが来ると聞けばこの僕は火の中水の中どこにでも行きますよ。」

「あつそ、それでマリサこれからどうするつもりなのよ。」

「そうだな、まずは久しぶりに教授の不思議体験を聞こうか。お願いできますか教授

？」

「おいマリサそんなこと聞くのか？」

「不思議なことは実在するんだぜ。」

「そうだね、じゃあとある植物園に行った時の話をしようか、あれはもう10年以上前のことだ、、、

ジリリリン、ジリリリン、ガチャ

「はい徐手です。」

「あ、正義君。僕だよ僕。」

「僕の知り合いに僕なんて名前の方はいませんが。」

「んもう、意地悪しないでよ。正義君の友達の浅野ユキよ。」

「ああ浅野ちゃんか。分かってたよ。それで今日はどうしたの？」

「えつとね僕が園芸とかの研究をしているのは知っているよね。そのことでノーデンス植物園というところにお世話になっているんだけどその管理人と仲が良くてね無料のチケットをもらったんだ。それでこのチケット併設されているカフェの割引券も兼ねているんだって。」

「ふーん、ノーデンスねえ。その植物園の持ち主はケルト神話に興味でもあるのかな

「？」

「ううん、有名な植物学者の名前だよ。それでどうするの？」

その問いに浅野に好意を寄せていた僕は行くと答えた。

浅野と一緒にパンフレットをもらい植物園に入る時彼女は「この植物園の管理人は自分が学生のときから慕っている先生、小島カオルである。今日はいるはずだから珍しい植物の解説なんかもしてくれるのではないか。」ということを話してくれた。

植物園の中は何やら甘い匂いが漂っていた。

「おかしいな何時もはこんな臭いなんてしないはずだけだな。」

「そうなんだ。う、なんだ急に、眠く、ドサッ

なぜだかはその時は分からなかったが僕は急に意識が遠くなって倒れてしまった。

目を覚ますと先程までと同じ場所に倒れていた。それと同時に違和感を感じた、視界が狭いのだ

「ん、なんだ、うわー!!」

徐手 現在正気度75↓74

その原因を確かめるため片目を触ろうとした時気付いてしまった。片目からなんと植物の蔓のようなものが生えていたのだ。

「きゃああー!!」 浅野 現在正気度45↓43

悲鳴を聞いて振り向くと浅野の右足にも蔓が生えていた。

「大丈夫かユキ!？」

「だ、大丈夫だよ。今までこんなことなかったのに。小島先生や他のお客さんはどうなったんだろ。ねえ、正義一緒に探してくれない。」

「分かった。確かに他の人がどうなったか心配だしな。」

それに受付は蔓に塞がれていて出れそうになかった。その植物は私たちの体から生えているものと同じ種類のもののようなだった。それと、手元のパンフレットには今までのもとは違う地図が書かれていた。

「その地図は大体こんな感じだったよ。」

そう言って徐手は持っていたメモ帳に簡易な地図を書いた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

○ **2** **3** **4** ○

○ **1** 空 **5** ○

○ → 空 **6** ○

○ 受ーカ ○

受：受付

カ：カフェテリア

ー：蔓の壁

「まあ取り敢えずはこんなところか。それでは話に戻ろう。」

① 招待状の部屋

部屋の真ん中に机があり、洒落た封筒が置いてあった。部屋の壁沿いには植木鉢に植えられた花が咲いていた。

封筒の中身を確認すると《出口でお茶会はいかが？赤いお茶を用意して、みんなで青い花でも眺めよう》と書かれた招待状とチケットが入っていた。それと部屋の中は青い花だけがなくなっていた。

「これは一体どういうことなんだ、まるで何者かの手によつて引き起こされたみたいじゃないか。なっ！」

私が少しチケットを手にとっていると招待状に書かれた文字が消えたのだ。

「何かのトリックか？」 徐手 現在正気度74 ↓ 73

「どうしたの何かあったの？」

「いやなんでもない。」

「ん、なんだろこれ、徐手ちよとききてよ。」

私が彼女のそばに行くと彼女は何かのメモを見せてきた。

・メモ・

《それは君の才能だ。君でさえも芽を摘むことはできない。栄養があればもつと大きく強く育つ》

「これは、この蔓のことを言っているのか？」

この後はこの部屋で喋るようなこともなかったので話を進めさせてもらおう。

②資料の部屋

その部屋は本棚と薬品棚、群生する植物で構成されていた。僕はその本棚がなぜかとても気になったんだ。その中で2冊の本と論文がが特に僕の目を引いた。

「この本は

《ハーブと生活の歴史》

医薬品が充実していなかった時代、ハーブは治療や健康に欠かせないものだった。

抗生物質が発明されていない時、殺菌作用のあるハーブは大切な薬草だった。これらは現代においても、十分使えるものがある。

例えば、ハーブに含まれているタンニンは、傷口のタンパク質と結合して止血する作用、火傷の患部のただれを防ぐ作用もある。

切り傷に役立つハーブは、ヒソツプやローズマリーなど。葉を煮出した浸出液でガー

ゼを湿らせ、患部に当てて止血する。

《ハーブティーの効能》

ラベンダーは鮮やかな紫の水色をしたハーブティーで、鎮静効果があり、イライラや不安感、不眠症に有効だ。

マロウブルーはせきや気管支炎などの呼吸器に効果的で、花で淹れたハーブティーはレモンなどに反応して赤く変色する。

ハイビスカスのハーブティーは美しい赤の水色をしており、ビタミンCやクエン酸が豊富で美容や疲労の回復に効果がある。

「なるほどこれはいいことを知った。さてと論文の方は、「まっつて、これは僕が読むよ。」あ、ああ分かったよ。」

「こ、これは、」プルプル　浅野　現在正気度43↓39

「だ、大丈夫か? 「大丈夫。」そうか。それでどんな内容だった?」

「人間の血で植物を育てることはできないっていう内容だったよ。」

「そうか。ありがとう。」(ならこれはなんなんだ?)

薬品棚

この場所のことは省こう。結果を言えば除草剤6本と液体肥料3本が見つかったんだ。その時はこれがのちに役立つことになるとはその時はまだ知る由もなかったが何

故か持つていけないといけない気がしたんだ。

「そんなもの持つてどうしたの？」

「これを持つていると何故だか落ち着くんだ。それと、あそこの花とか美味しそうだな。」

「え？」

「嫌なんでもないよ。次の部屋に行こうか。」

③ 階調の部屋

左右に草丈が腰くらいまでの花が咲いている部屋。計画的に植えられているのか、手前が白、奥の部屋へ向けて黄色、橙、赤、紫とグラデーションになっていた。

そして、この部屋に入った時

「ひっ、さっ成長している。」 浅野 現在正気度39↓39

浅野の足に生えていた蔓が成長して蕾ができていた。

(なんなんだこの植物は成長速度が異常だ。)

徐手 現在正気度73↓72

「この部屋には何も無いようだしこの植物も気になる、早く次の部屋に向かおうと思う方がいいかな？」

「うん。」

④ 疑念の部屋

藤棚のようなものがあり、天井一面に紫や白、赤の花が咲いていた。花卉がひらひらと散っていて、床も同じような色に染まっていて、誰かが通った跡はなかった。

「ん、これは、手帳？」

僕は花びらに埋もれていた日記と手帳が見つかった。

《小島の日記》

《2／2

仕事かひと段落しそうだ。今年も1年経つのは早かったな。春先に咲く植物の健康診断をしておきたい。それからついでに今年も風景画を描こう。今から描けば花が咲く頃にちょうど花卉を描けるだろうか。これだから油絵は楽しい。

2／17

浅野君の研究が順調であると聞いた。在学中から面倒を見ていた愛弟子が喜んでいる姿を見るとこちらも幸せな気持ちになる。

そういうえば最近、珍しい植物をもらった。多肉植物のようだが類を見ない植物だ。これについての研究もしてみたい。観察日記はつけておこう。

2／25

研究が上手くないかない。体調が悪い。なぜかすぐ植物が枯れる。しばらく休みをとつていかなかったせいだろうか。気持ちが悪入る。

3 / 2

多肉植物について調べていたら浅野の名前を発見した。どうやら順調らしい。しばらくぶりに会ったが自分の研究が上手くないことばかり話してしまいそうになつて嫌になる。浅野は励ましてくれるがそれを素直に受け止める余裕がない。申し訳なくて、悲しい。

3 / 16

どうして浅野ユキの研究ばかりが評価されているんだ。私の研究は、本当のことを書いているのに、信じてもらえないのに、どうして。あの植物は本当にもう腰丈ほどまで成長したんだ。スケッチがダメなら写真を見てくれ。スケッチがいけないのか。信じてくれ。もう描かないから、信じて。

3 / 24

どうして私の研究は受け入れてもらえないんだ！どうして、どうして、どうしてどうして。本当に背丈を越えたんだ！これは！どうして！！浅野がいけないのか。なぜ！わからない！あさこの研究よりも私のほうが大発見だ！なぜわかってもらえない！浅野さえあさこのさえないなければよかったのに。あさのなんていなければ、あいつが論文なん

て書かなければ、成長がはやいのはほんとう、嘘なんてついてないんだ。あさの、しんじて。

3 / 30

あさのをみかけた。あさのだった。あさのが成長する。せをこえた。おおきい。あさの。天井。にくい。そだってよかった。》

(怖ええー。何なんだよこの日記は。一体手帳の方には何が書かれているんだ?)

徐手 現在正気度72↓70

《成長記録》

《 2 / 19

何日か前にもらった謎の植物について観察しようと思う。触った感覚では柔らかく、多肉植物を思わせる。あまり水をやりすぎではいけないと思うが、日光にはどれくらい当てるべきだろうか。

2 / 24

土が合っていたのかすすく育っている。葉の日焼けが心配だったが、窓際で育てても問題なさそうだ。じきに株分けできそうだが、ここまで成長が早いとは。環境以外にこの植物の特徴なのだろうか。

3 / 13

腰よりも大きくなったので株分けをしてみた。上手く根付くといいのだが。

3 / 20

株分けしたもののほとんどが枯れてしまった。成長するにはいい環境なのかもしれないが。発芽する環境は違うのだろうか。

3 / 26

これくらいおおきい。葉が多い。幹はたにく。なにに分るいされるんだろう。やわらかい。》

その手帳にはスケッチも描かれていたそれを見た時僕は全身に鳥肌が立ったよ。

徐手 現在正気度70↓69

「きやー！」

「え、グハア」 バシッ

その時彼女の体から生えていた蔓がうねって僕は打ち付けられた。

徐手HP13↓11 浅野HP14↓13

「大丈夫正義!？」

「ああ、何とかな。何で急に蔓が動き出したんだ？」

「わからないけど、勝手に動いたよ。」

「おっと、そうだハイビスカス積んで行こう。」

「?」

⑤ 樹木の部屋

この部屋に入った時ついに僕に生えていた蔓も成長した。

徐手 現在正気度69↓69

この部屋は樹木が生い茂っていた。今までの部屋よりも湿度があるようで空気が湿っていた。部屋の隅には机があり、1人の男性が椅子に座って植物を眺めながら呆然としていた。

「あのー、そこの方ちよつとよろしいでしょうか?」

声をかけて見たがその男性は虚ろな目をして殆ど反応がなかったが浅野を見た途端笑い出して、何か呪文のようなものを唱えた。すると近くの蔓が僕達を弾き飛ばしたんだ。

「ぐつ何だ一体!?!」

「小島先生!?!」

「アハハハハ、ヒヒヒヒフヒヤヒヤヒヤ。」

「ぐあ!」 バシッ 徐手 HP11↓9

「きやつ」 バシッ 浅野 HP13↓9

「ぐっ」 徐手 HP9↓5

「ぎゃあ」 浅野 HP9↓8

その頃の私は荒事に慣れていなくて避けようとするだけで精一杯だった。

「フヒヤヒヤヒヤ、あ、」 ドサツ

しばらくすると小島が倒れたんだ。それと同時に蔓も攻撃をやめたんだ。僕が小島に近寄ってみると彼は気絶していた。僕はまず自分たちの応急手当てをすることにした。ちやうど背負っていたリユックサツクに必要なものは入っていたからね。

「これで良いかな？ どうか痛みむところはあるかな？」

「うん、でもかなり良くなったよ。」 浅野 HP8↓10

「それは良かったさて僕の方もやらないとな。」

正直この時の痛みは気をぬくとうすぐまっってしまう程のもだった。

徐手 HP5↓11

その時の処置は非常にうまくいった。心理的作用によるものもあるかもしれないが痛みをかなり減らすことに成功したよ。それでも痛くてかなわなかったがね。

その後小島の様子を見て見たけどどうやら体調不良によるものらしかった。ただこのまま寝ておいてもらうわけにはいかないから、あの手この手を駆使して起きてもらったよ。起きてからも混乱しているようではなかなかまともに会話できなかつたけどね。

「はっ、私は何を、」

「ようやく正氣に戻られましたか。これでようやく質問ができますね。ここは一体何処ですか？」

「私にもわからない。いつも通りここに来たのに、気づいたら景色がいつもと変わっていて、目の前に化け物がいて」

「何処で目覚めましたか？」

「奥の部屋で目覚めたが、大きな化け物がいて襲われたからこの部屋に逃げてきた」
「大きな化け物とは？」

「わからない……」

「どうやって蔓を操っていたんですか？」

「そのバーで習ったような……」

「誰に習ったんですか？」

「お酒を呑んでいたし覚えていない。モデルみたいでかつこいい感じのする人だったと思うが……」

「そうですかありますがとうございます。ところで貴方は片方だけ手袋をしているようですが、」

それを聞くと彼は手袋を取った。そこには蔓が生えていた。しかし彼のそれは萎び

て細く乾燥していた。

「君たちのは元気があるようだが自分の蔓はもう枯れている。見たこともない植物だ。」

「あの液体肥料を持っているんですが。」

「ふむ、来ないような植物なら液体肥料がかかると何か変化があるかもしれないな。」

「あのそれで貴方の手の萎びたやつにかけたら元気になるんじゃないですか?」

「そうだな、液体肥料を貸してくれ。」

そういう風のやり取りの後彼の手の植物に液体肥料がかけられた。すると、枯れかけた蔓とは別に彼の左目の付近から蔓が現れてあつという間に成長し、顔の左半分を覆う。丁度目だったあたりには青い大輪の花を咲かせた。

徐手 現在正気度 69 ↓ 69

浅野 現在正気度 39 ↓ 38

「青い花だ。あの、」

僕は今までの話をしてその花摘み取ってもらった。それから机の上にあつた2Lペットボトルや電気ケトル、水を使って途中で採取したハイビスカスで赤いお茶を作ったんだ。それからそれを水筒に入れてティーカップ対処に持っていくことにしたんだ。

そして次の部屋に行こうとした時

小島がその先の部屋で襲われたのは自分の育てていた植物が更に成長した姿ではな

いか、育ての親の自分がいれば襲われないかもしれないという提案をして来たんだ。確かに論理に矛盾する部分はあったけど特に断る理由もなかったしその提案に僕は了承したんだ。

そして、次の部屋に奴はいた。

⑥ 枯葉の部屋

花壇や元々木があったと思われるところには大量の萎びた茎や朽ちた幹、枝などが散乱していた。そして、部屋の中央に植物の怪物が鎮座していた。この怪物の描写は遠慮させてもらうよ。

「なんだよあれ。」 徐手 現在正気度69↓65

「あ、ああ」 浅野 現在正気度38↓28

「花を、花を小島先生に捧げないと、」

(いかん、恐ろしさのあまり正常な思考ができなくなったのか、確かに人よりかなり図太い僕だって足が方々震えて今にも漏らしてしまいそうなんだ、だけどあの怪物がいた攻撃してくるかわからないここは。)

「うおおー!」 ガシッ

「え?、きや。」 バタバタ

僕は彼女を担いで出口に向かうことにした。

部屋の奥には今までよりも重苦しい扉があり、扉には柵のようなものが設置されていた。柵の上にはケーキスタンドとソーサー、ナイフが置かれていた。

僕は青い花をケーキスタンドに乗せてソーサーにティーカップを乗せてハイビスカスのお茶を入れてから扉を開いた。

奥の部屋への重い扉を開けると、覚えのある匂いがしていることに気づいた。それは気を失った時に嗅いだものと同じ、頭が痛くなるような甘い匂いであることはすぐにわかった。それに気づくとまた臉が重くなるのを感じた。なんとか部屋の中に入れば、本来カフエテリアがあつた場所には一人の人影が見えた。

「君たちはすごいね、とても面白かったよ。ご褒美にその花を持ち帰るといい」

その影はそう言うと、空気に溶けるようにして消えてしまった。そして、僕も意識を失ってしまった。

後日僕と浅野は再びあの植物園を訪れていた。あの日の話をしたいと言ったところ、浅野があの日に行けなかったカフエテリアで話そうと持ちかけてきたからだ。あの不思議な体験をした日、誰かが救急車を呼んだらしく気づけば病院に搬送されていたのだが、医者曰く寝不足か何かでしようということだった。

あの懐かしいような忌まわしい植物園の話がひと段落してから、浅野は笑顔と泣き顔のあいだのような顔をして、小島が自殺したことを教えてくれた。植物学の界限では、あの人は若い頃は冴えていたんだけどなあなんていう話が囁かれていることも悔しそうに教えてくれる。しかし生前小島が描いていたいくつもの絵にとんでもない価値がついたらしく、その名は違う界限でも有名になりつつあるらしい。

「先生、1つは枯れてたけれど、2つめの花を咲かせてたよね。先生はきつと、とんでもない天才だったんだよ。僕も、花が咲くように、頑張らないと」

彼女は顔を歪ませながら、決心するように呟いた。

「浅野実は他にも話があるんだ。」

「話って?」

「こういう話はこういう時にするべきじゃないだろうし、君に不快感を与えるかもしれない。だけど今までずっと言えなかったんだ、だからいわせてくれ。」

浅野、いやユキさん学生の時からずっと好きでした。僕と結婚してください。」

「とまあ、こんな感じかな。」

「最後のいりましたか?」

「興味深い、実に興味深いですよ教授。僕もその場に居合わせてみたかったというくらい興味深いです。」

「オカルトマニアが盛り上がっているわね。それでマリサこの後はどうするの?」「もちろん決まってるんだぜ、この後は博物館に行こうと思う。」

t o b e c o n t i n u e

Japan travel (1)

192X年 Y月 O日

「えー皆さんこちらが日本の神社です。あの門の様なものは鳥居といい俗世と神がかわす神域とを区画するものであり神域への入り口を示すものであるとされています。また道の真ん中は神の通る道とされています。」

「ほーそうなんじゃな。儂は東洋のことに疎いからの今回の旅行で色々なことがしれそうじゃ。」

「ふん、こんなものどどこがいいんだ。」

「そこのお客様、その様なことを言われては困ります。」

「チツ」

「(チツつて舌打ちしたよこの人)では鳥居をくぐって神社に行きましょう。」

ちなみにこの神社の手水舎は社殿脇にあった。そして一行が鳥居を潜り観光を終えて出ようとした時

《ふむ、汝(なんじ)らにしよう》

と不思議な声が頭に響いた。途端に目が眩むほどの白い光があたりを包み、途端に彼

ら（彼女ら）の意識は遠のいて行く。ふと彼ら（彼女ら）が目を覚ますと見知らぬ部屋にいた。

く畳張りの部屋く

その部屋には質素な扉と立派な装飾された扉があり、真ん中に机があり、机の上には本と紙があつた。

「な、何なんだ一体？」 ベックマン 現在正気度97↓97

「また呼ばれたんでしようか？」 夕泊 現在正気度69↓69

「またかの。」 スミス 現在正気度67↓67

「なんか最近よく奇妙なことに巻き込まれている気がする」 ミイルズ 現在正気

度91↓91

「何なんだよ一体どういうことだよ。」

旅行者（男性） 現在正気度30↓29

「一体どういうことなのよこれは!?!安心安全の旅行じゃなかったの!?!」 旅行者（女

性） 現在正気度60↓60

「落ち着いてくださいお客様。落ち着いて。」

その声に彼ら彼女らが振り向くと一人の少女がいた。

「あのー貴方達も気付いたらここにいたんですか？」

「えっと、あの、僕たち日本語がわからないのですが。」

「心配ありません私が意思疎通役になりますから。　　こんにちは貴方も気づいたら

ここにいたんですね？」

「はい、不思議な声が聞こえていたと思つたらこの部屋にいて。」

「何か分かることはありますか？」

「この地域には昔から神隠しの伝説があつて、十数年に一人行方不明者がでると伝えられます。」

「ありがとうございます。皆さん少しわかつたことがあります。」

「なるほど行方不明者か。なんか聞いたことがある様な話だな。」

「冗談じゃないぞ、何で私がそんな間に合わないといけないんだ！」

「そうよ、だいたいこんなところに来させるからいけないのよ！」

「お、落ち着いてください。怒鳴つても現状は変わりません。」

「痛、目にゴミが入つた。」

「何やつてるんですかマリサ。」

「何じゃこの紙は？誰かこの紙に書かれた文字を読めるものはおらんか？」

「見せてください。」

・紙・

にえをささぎよ さすればかえさん

「贄を捧げよ さすれば帰さん。だそうです。」

くすくす、「きた、きた」

「だ、だれよ！」

「どうされたんですか？」

「聞こえないの子供の様な笑い声がしたじゃない。」

「申し訳ありません。僕には聞こえませんでした。」

「私もです。」

「私もだ。」

「儂はもちよと聞こえなかつたよ。」

「びびらせるなよ。」

「本当に聞こえたのよ。」

「わかりました。信じますよ。もしかしたら僕たち以外に誰かいるかもしれないし他の部屋にも行ってみましょう。」

「待ってくれ、本とか身について確認させてくれ。この場所についての事が書いてあるかもしれない。」

「そんなことしたって何になると言うんだ！」

「ここは明らかに普通じゃない。もしかしたらここから出るヒントが書いてあるかもしれない。」

・紙・

紙に書かれた文字は幼く、平仮名で書かれている。

「かみさまは　ひとつめをこのむ

かみさまは　おさげがすき

かみさまは　きたないものはきらい　」

・本・

「生け贄は片目を潰した動物を供えた。昔は人間だった」

「これは気に留めておいた方が良さそうだな。」

「それでどつちの扉から行きますか？」

「質素な扉から聞きましょう。小説なのでは不用意に見栄えが良さそうな方に進むと
 だいたいひどい間に合いますからね。質素な扉から行きましょう。」

・台所・

食材を切るための台、食器を置く木製の棚、竈がある。　また様には楽しんである大き

な箱がある。また野菜、米などの食材が置かれていて、部屋の中にある大きな生簀には大きな魚が1匹入っていた。

「台所の様ですね。」

「あ、また紙か。」

・紙切れ・

「かみさまはおさげがだいすきだから、よういができてからおつぎしないと。のまれてはいけないから」

「神様はお酒が大好きだから、用意ができたからう注ぎしないと。飲まれてはいけないから、いや吞まれてはいけないからか？」

「さっきの紙と一緒に考えると片目の生贄を捧げた後酒を注げということかの。」

「あ、未開封のお酒がありましたよ。」

「紙に書かれていることからするとこの魚の片目を潰して生贄に捧げればいいのでしょうか。」

「多分そうでしょうね。早く準備してしましましょう。それと、あなた眼帯を外した方がいいと思いますよ。」

「え、何ですか?」

「神様は片目が好きと書かれましたからね連れて行かれたりするかもしれません

よ。」

「分かりました。」

「では、行きましようか。」

その後一行は片目を潰した魚を持ち立派な扉の先の部屋に向かった。

↳ 祭壇の部屋↳

入って正面に祭壇があり、その前の台には何も入っていない大きな杯があり、その横には一人人が座れそうなスペースがあった。祭壇の奥は扉があるが、注連縄のようなものがしてあった。

「しめた、出口だ！」ダッ

「いつまでもこんな所に居られるもんですか。」ダッ

「まで不用意に動くんじゃない。」

マイルズの忠告を聞かずにここから出ようとする旅行者は扉に向かって行った、しかし

バチイ！

「グアッ！」 旅行者(男性) HP 13 ↓ 10

「キヤー！」 旅行者(女性) HP 12 ↓ 11

何かによって弾かれてしまった。

「あーあだから行つたのにな。小説とかじゃ不用意に行動する奴から死んでいくだろ、少しは考えろよ。」

「なんだと、貴様あ。」ブンツ

マイルズのその言葉に激昂した観光客は殴りかかった。

「おつと危ない。」スルツ

しかしその一撃はたやすく受け流された。そして、

「これ以上暴れられると困るからな。」ガシツ

組みつかれて押さえ込まれてしまった。

「く、離せ！」

「血を流させるわけにはいかないからな。蘭子今の内に済ませてしまつてくれ。」

「分かりました。」

夕泊はそう答えると台に片目を潰した魚を置き酒を注いだ。

御神酒を注ぎ終えた瞬間。リン…と涼やかな音が響き、部屋全体が清らかな空気に包まれる。祭壇の奥にある扉からは、ずるり、ずるり、と何かを引きずるような音が聞こえ、まもなくそれは姿を現した。細長い身体にびっしりと純白の鱗、透き通る紅玉の瞳をもつ大蛇である。

大蛇は供えられた魚を丸飲みし、御神酒を煽った後、満足げに瞳を細めたように見えた。

瞬間、眩い光が彼ら（彼女ら）を包み込む。思わず閉じた目を開けるとちようど鳥居をくぐった場所だった。

時計を見るとお参りを終えて数分ほどしか経ってない。

「何ださっきのは夢だったのか？」

「いや、夢ではない様じゃよ。」

彼らの手の中には先ほどの出来事が夢ではないと言う様に純白の蛇の刺繍が美しいお守りが握られていた。

続く

Japan travel~2
Omission's
time train

青年たちは神社の一件を終えてから宿泊先のホテルに向かう列車に分乗して乗っていた。他には数人の客しかいなく、閑散した山の中を走っていた。

「おい、次郎おかしくねえか？」

「確かにおかしいな客が少なすぎるし、第一どこを走っているんだ？」

「あの、すいません。さっきのお話の件でちよとよろしいですか。」

「何だ、外人さん日本語話せるのか。」

「私は混血（ハーフ）ですからね。それでおかしいとは具体的にどう言うことですか？」

「その事なんだかな、普通この時間帯この列車は仕事帰りの給料取り達で満員とはいかないがそこそこいっぱいになるんだが今は俺たちとあんたらしかいない。それにこの路線の列車はこんなところ通るはずがないんだ。」

「じゃあ乗り間違えたと言う事でしょうか？」

「いや、それもなし。俺はこのあたりの地理や路線に詳しいがこんなところ知らない」

い。」

「じゃあこの列車は本来存在しない所を走っていると云うんですか?」

「そうだ。」

「取り乱すんじゃないぞ姉ちゃん。こう言う場所では正気を保てなかつた奴から死んでいく。」

「分かっています。私も経験したことがありますから。」

「何だ姉ちゃんも経験者か。それで後ろの連中に報告しなくていいのか?」

「いえ、もう蘭子が報告してますよ。ね、」

「ええ、一応伝え終わりました。それにしても丁寧口調のマリサなんて久しぶりですね。」

「おい、結構騒いでいる奴がいるが大丈夫か?」

「多分大丈夫でしょう。」

「ふざけるな、またわけのわからんことに巻き込まれただと貴様ら何か仕組んでいるんじゃないだろうな!」

「その様なことは一切ございません!どうか落ち着いてください。」

「もう嫌やー、うあー!」

「落ち着くんじやお嬢さん落ち着いくんじや、儂らついとるから。」

「あまり大丈夫じゃなさそうに見えるが？」

「そう言われてみればそうですね。」

「俺が運転席を見てくる。」

「気をつけろよ榊原。」

「わかつている。」

「ドアの前」

「おい運転手、行つ達どこに向かつているんだ！」 ドンドン

榊原が大声をあげながらドアを立てるが反応はなかった。

「機関士でもいい反応しろ。。。くそつどうなっているんだ気づいたら車掌もいないし。仕方ないこじ開けるか。ふ、ふーん」 ギリギリ

榊原は渾身の力を込めて扉を開けようとするが扉は思ったより頑丈な様で開かなかつた。

そんなこんなをしているうちに列車は駅に停車した。

「このまま電車に乗っているとどこに連れていかれるかわかりません。私としては全員降りるべきだと思うのですか皆さんはどうですか？」

「僕反対です。外に何かあるかわからなですし。」

「私はよくわからないな、そもそもこの問いに対する正解なんてない、なんて事もあるかもしれないしな。」

「僕はこの状況をどうにかするためにも一旦降りてみるべきだと思うよ。」

「それで、お二人はどうしますか？」

「俺たちは一旦降りてみようと思う。」

「おい、お前！」

「はい。何でしょうか？」

「まさか、客である俺たちを放っておくかじゃないだろうな。」

「そんな事はいたしません。」

ドンッ

突然の大きな音に全員が振り向くと運転席の扉が開いていた。そして、そこにそれはいたこの世ならざる醜悪な姿を生命を刈り取るための大きな鉤爪を持った存在。その姿を見た瞬間全員に寒気が走った。

ベックマン 現在正気度 97 ↓ 97 夕泊 現在正気度 69 ↓ 68

ミイブル 現在正気度 94 ↓ 94 ジェームズ 現在正気度 72 ↓ 72

榊原 現在正気度 75 ↓ 75 次郎 現在正気度 60 ↓ 60

旅行客（男性） 37↓32 旅行客（女性） 66↓66

「何だこいつは！」

「またでましたか。」

「みんな何してるんだ一旦逃げるぞ！」

ミイブルのその言葉とともに7人は走り出した。しかし、

「あ、ああ、もう終わりだ。」

1人恐怖によつてその場に釘付けになつた者が居た。

「はつ、皆さんは僕が彼をおぶつて行きます。先に言つといてください。」

青年はそう言うのと動かなくなつた旅行客をおぶつて移動しようとしたが動きが鈍くなつたしまつた。

「仕方がない、外人さんを手伝うぞ。」 ダツ

その時榊原が戻つてきて青年と一緒に動けなくなつた男性旅行客を持ち上げて列車から脱出した。

そして、そのまま8人は不気味な駅を駆け抜けていくとそこは森の中だった。

「あつちじや、道があつた。」

ジエームズのその声を聞いた一行はその道がある方にかけて行つた。道を進んでいくと四つ辻にたどり着いた。

四つ辻の他の道は以下の様だった。

左の道は山の中腹に明かりの1つ灯る山への道、真ん中の道はポツポツと多くの明かりが灯った場所へ続く道、右の道は暗い山へと続く道。

「どの道に進みます?」

「何行つてるのよあんたあかりの多い道に進むに決まってるんじゃないの。」 ダツ
そう言つて旅行者の女性は真ん中の道を走り出した。

「おい、あの姉ちゃん追わなくていいのか?」

「いいわけありません。みんな追いますよ。」

「わかりました。」 「わかっとするわい。」 「了解だぜ。」

「俺たちはどうする、追うか?」

「追おう、分かれての行動は危険だ。」

真ん中の道を一団が進んでいくと、そこにはこんな山には似つかわしくない近代的な住宅地にたどり着いた。家にはどこにも明かりがついているが外には人1人いない。

「レジーナさんどこですか?返事をしてください。」

「あそこじゃー!」

青年がジェームズに指さされた方を見ると旅行者の女性、レジーナが一軒の家に入ろうとしていた。

ガチャ「もう、一体何なのよもう。あいつらがあの列車に載せるからいけないのよ。訴えや、る。」

彼女が家の中を見ると、床や壁、天井など至る所にびっしりと巨大な蛆達が張り付き蠢いている。

「キィヤアー!!」 レジーナ 現在正気度66↓65

バツ、ダダダツ 彼女は家を飛び出した。

「まで、エドガー囲まれている!」

「え、っ!!」

青年がミイルズの叫びにより周囲を確認すると、いつの間にかパジャマを着た無表情な人々に囲まれていた。

(ん、この人たち本当に人間ですか? 生命の察知を使って見ますか。) 夕泊

現在正気度69↓68

「はっ!! この人たちは人間じゃありません微細な魔力によつて擬態した蛆のコロニーです。」

その言葉は幻影を見せられていた他の者が幻影を見破るきっかけになった。それはあの2人も同じだった。「と言うのも2人とも片言なら英語で日常会話できるくらい

のコロニーに向かって拳を放った。

ドグシャ

蛆のコロニーはその一撃により砕け散った。ついでに蛆も飛び散って、ミイルズの拳にも付着した。

(二つ)

「すまねえ姉ちゃん助かった。」

「そんなことより、にげること集中して！」

バツ スカッ

「どこ狙っているんだ？」

一体のコロニーがミイルズに組みつこうとしたがそのフラフラとした足取りではミイルズに組みつくことは出来なかった。

ブンツ スカッ
ブンツ スカッ

さらに2体のコロニーが鉤爪を振るったがその攻撃はミイルズの動きを捉えることは出来なかった。

「そらよつと」ガシッ

ミイルズは躊躇することなく蛆のコロニーをつかんで投げ飛ばした。

ドンツ、グシャ

そのコロニーは群体として動くための部分にダメージを負ったのかそれとも元々そんな力はないのか立ち上がることはなかった。

「二つ。さあさあ、そんなもんか？化け物ども。」

（まだだあの足手まといを担いだ2人があれから逃げ切るにはもう少し稼がないと。）

（次郎 side）

「チエア」ブンツ

次郎の鋭い蹴りが蛆のコロニーを捉えた。

ドグシャ ビチャビチャ

味のコロニーはその一撃に耐えれずバラバラに飛び散る。

「は、は、何をしている早く逃げろ！」

次郎は身振りも加えてレジーナに逃げる様促す。がしかしレジーナはそこから動くうとしなかった。

ブンツ、ブンツ、ブンツ、ブンツ、ブンツ、ブンツ、ブンツ

（2発は当たるんだか、）

グキツ （しまった、捻った。） ザクツ、ザクツ

「ぐっ。」 次郎 HP 14 ↓ 13

(ん、こいつらの一撃見かけほど力がないぞ。)

「お返しだ！」シユ

次郎はそう叫び先ほど自分を攻撃してきたコロニーに拳を放った。

グシャ、ビチャビチャ

「まだまだあ！」ビユン

次郎はそう叫びもう片方のコロニーに先ほどの攻撃の勢いを利用してこぶしをはなつた。

メキヤア

ブシヤ

「何としている早くしろ！」

「あ、あ、あ、」(チツ早く逃げろよ。動かない方が危険なんだぞ。)

ぶんつ、ブンツ、ブンツ、ブンツ、ブンツ

5体のコロニーがはなつた攻撃はそのうちの一つが次郎を捉えた。次郎はその攻撃をうけ流そうとして逆により深く受けてしまった。

「グアツ！（しまった。）」次郎 HP13↓11

(そういえばあの姉ちゃん達は上手く逃げさせたかな。おっと確認している余裕なんてないな。)

く逃走組く

「はっはっはっクソツ追って来やがる。」

「あれどうなっているんだ歩いてる様にゆっくりなのにもまるで走っている様な移動速度だ。」

「ふひはふあへ、ふ、」 モゴモゴ へあまりに煩かったので猿轡をされた。>

「どつちに逃げる。」

「そうですね、一つ明かりがあつた方に逃げましょう。」

「分かった。目印はこの赤いインクでいいか。」 バシヤ

榊原はポツンと灯りが一つある道に赤いインクを撒いた。

く左の道く

タツタツタツタツ

2人は足手まといになっている旅行者を担ぎながら走っていた。その時、

「オーイ、オーイ、」

そう言いながら懐中電灯を持って近づいて来る人形があつた。だが2人は止まろうとしなかつた何故ならその正体に気づいているからだ。

「くそ、いつまで追いかけてくるんだ。」

「やっぱり僕が戦つた方がいんじゃないですか?」

「そうだな、いつまでも逃げ続けるわけにはいかないからな、よろしく頼む。だが問題

があつたらすぐに戻つてこい。」

「はい！」 バツ

青年はそう答えると追いかけて来た人形に向かつて行つた。

「ドラア！」 青年は人形いや、蛆のコロニーに蹴りを放つた。

バキヤ ドンツ

その攻撃は蛆のコロニーを吹っ飛ばし胴体を分断した。もちろん蛆が飛び散つたが。

「さあ、行きましょう。」

くミイルズsideく

「さつさと終わらせるか。せーのつと」 ガシツ ブンツ

ドグシヤア ミイルズのソルトが決まつた。

「3つ。(早く蛆を落として風呂に入りたい。)」

ブンツ スカッ

「今度はこつちの番だ。」 スカッ

「あ、ミスつた。」

ブンツ スカッ

「そおれつと。」 ガシツ ブンツ

メキヤア ブシヤア

マリサ・マイルズによって投げられた蛆のコロニーは地面に叩きつけられバラバラになった。

(ひとまずこつちの方に来た奴は倒したか。アチつのほうの応援に向かうか。)

↳次郎 side s

「シュ」ビュン

バキッ グシヤア

ビュン

ドゴオ グチャア

「はあ、はあ、倒しても倒してもキリがない。」

「ヒイイー!!」

「なんだ?」

次郎が悲鳴を聞いてそちらの方に視線を向けるとレジーナが蛆のコロニーに組みか
れていた。

「助けてー!!話してー!これからは真面目に生きますから。」

バキッ

「え、何、?」

「大丈夫か?お嬢ちゃん。」

「ようやくこっちの方が片付きましたし加勢しますよ。フッ」 ブンツ

バキツ

グチャア

ドゴオ

ブシヤア

夕泊のラツシユによつて瞬間に2つのコロニーが行動不能になった。

「今のうちに急いであの3人を追いかけましょう。マリサ行きますよ。（この状況を打破する方法が書かれていると思われる本も見つかりましたし。）」

↳ 逃走組 side ↵

3人が山を登つていくと、明かりの灯つた灯籠が幾つも置かれた神社に出た。

本殿の扉は開かれており、そこに御神体（白い岩）が見える。

「神社か。ここに身を潜めさせてもらおう。」

榊原はそう言つた後、賽銭を入れ御神体に向かつて手を合わせた。

（参拝に来たわけではないがこれで良かったのか？ん、？）

観音開きになっている白い扉から胴回りが丸太ほどもある白い大蛇が現れた。

「白い蛇だと、」

「どうした？」

「いやなんでもない。」

その時2人の背後から風が吹いた。その風は2人にとって記憶に新しいあの蛆のコ

ロニーの腐肉の臭いを孕んでいた。

参道の方から2匹のクマが現れた。灯笼に照らされたその体はグズグズに腐り骨が露出しそしてあちらこちらから蛆が顔を出していた。

「なっ!!」 ベックマン 現在正気度96↓95

榊原 現在正気度74↓71

「ごうしましよ、勝機はあるでしょうか?」

「あの蛆の कोरोニーはたいして力もなく脆いんだろ?ならいくらクマだろうと勝機はあるさ。」

「では、いきます。」 ブンツ スカツ

相手がクマの死体を用いていたのもあるのか青年の及び腰の蹴りは蛆の कोरोニーにはあたらなかった。だが榊原の投げか決まった。

ブシヤア

「さすがに1発じゃ倒せないか。」

蛆の कोरोニーの腕が榊原に振るわれる。

ブンツ、ブンツ

ス

カツ、スカツ

ブンツ 青年の蹴りが投げ飛ばされた方の कोरोニーに放たれる。

ぐしやあ、ビチャビチャ

その蹴りに耐えきれず蛆のコロニーは崩れ落ちた。

「後一体。」 ガシツ ブンツ

蛆のコロニーを投げる。

ドサツ、 ビチャビチャ

腐肉が崩れ落ち蛆とともに飛び散る。

「やったか。」

「いやまだです動いている!」

蛆のコロニーの鉤爪が榊原に向かう。しかし、

ガキンツ

その攻撃は白い大蛇に阻まれた。

白い大蛇 HP14↓14

「この大蛇は一体?」

白い大蛇は蛆のコロニーに噛みつきその強靱な咬合力で蛆のコロニーの体を抉り取り活動を停止させた。

「味方なのか?」

(この場合礼を言うべきだな。)「助けて頂いてありがとうございます、ん。」

「オーイ、榊原!」

その時残りの5人が神社に到着した。

「ひつ、白い蛇。」

「安心してください。昼にあつた蛇じゃありませんよ。ところでここに腐つて蛆が湧いたクマの死体があるのですが何があつたんですか？」

「なるほどそんなことが。私からも報告すべき事があります。」

そう言つて夕泊は一冊の本を取り出してさつき場所で見つけた事そして、その内容を話した。

「そんなんですか。」

「はい、それで私はあの右の道の先にあるんじゃないかと思ひます。感でしかありませんがね。」

「まあ、他に手はありませんし、行くしか無いと思ひます。」

「私も賛成だ。」

「儂もじゃよこのまま何もしないと云うわけにはいかないからな。」

「私も、賛成よ。」

その時白い大蛇は一行をじつと見つめていた。夕泊は手振りについてくるかと問いた。白い大蛇は肯定するように頷いた。

「後は、あのさつきから笑い続けている人を落ち着かせますか。」

く右の道く

「まだついて来てますね、あの白い蛇。」

「話を聞くに味方ようだし問題ないじゃろ。」

「おい、ちっこいやつが大量にいるぞ。」

気がつくくと一行の周りには大量の蛆が湧いた腐ったネズミがいた。

「100はいるようですね。」

その時白い大蛇が鎌首をもたげ、喉から空気の漏れるような音を響かせると、周囲の空気が波打った。

白い大蛇 MP25↓18

おぞましい蛆たちは一瞬動きを止めた直後まるで蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ出した。

「すごい。」

「あ、ありがとう。」

白い大蛇は少しの間そちらの方に振り向くと山道を登って行った。

く山頂く

そこには淡く輝く魔法陣があった。

「ここで呪文を唱えればいいんですが誰が唱えますか？」

「俺が唱える、今日1日かっこの悪いところばかり見せていたからな。ちよとはカッコつけさせてくれ。」

夕泊の問いに答えたのはあの旅行者の正気度の低い男性だった。

「いえ、多分この呪文はあなたの精神を更に削りますよ。」

「構わない。」

その目には絶対に譲らないと言う覚悟が現れていた。

「分かりました、お願いします。私たちは周りを警戒しておきましょう。」

そして、呪文が唱え始められたその時、

突如赤黒い光が大蛇を包んだ、白い大蛇は真っ赤に熱せられ、熱戦は周囲に熱を撒き散らす。

白い大蛇 HP14↓5

肉が焦げる匂いが立ち込めた、白い大蛇は最初苦しうにのたうつがじきに動かなくなつた。

「誰だ、どこにいる！」

マリサ・ミイルズのその声に答えるように草木の陰から「それ」はゆっくり現れた。

「それ」が現れた瞬間異様なプレッシャーが辺りに満ち邪悪な匂いが立ち込めた。「それ」は長く鋭い暴力的な鉤爪を持ち身体中にある緑色の光を放つ毒々しい口が閉じたり開いたりしていた。そして、爛々と光る金色の目で一行を見ていた。そして全員にそれは見覚えがあったそれは列車の中にいた怪物だった。

6 「列車の中の怪物、おいかけてきたのか!」ガクガク
榎原現在正気度71↓6

「いえ、恐らく待ち伏せしていたんでしよう。」夕泊 現在正気度69↓69

「こいつ、知性があるのか?」ベックマン 現在正気度96↓96

「なんか何処かで見えた事があるような。」ミイルズ 現在正気度93↓93

「あ、ああ、」ジェームズ 現在正気度71↓66

「j g a h s g d h c h z n c n r i z j n f g j s i a j n d u r u x b」レ

ジーナ 現在正気度64↓59

「くそ、くるなら来い」次郎 現在正気度59↓59

「おれはもうひかん!」観光客 現在正気度23↓23

「おい、あいつは私達がなんとかするからお前は呪文を詠唱している!」

「わかった。まだ芽吹いていない、」

「では私が先陣を切らせていただきます。」だつ、ブンツ

ドゴオ 怪物HP??↓??

夕泊はけりで怪物に一撃を与えたがそれに留まらず、ラツシユを浴びせようとする。

ドゴオ 怪物HP??↓??

夕泊の強烈な蹴りが再び決まった。 だが、

「！！！！」

攻撃を受けた怪物が透明になっていったのだ。

「させるか！」

マリサ・ミイルズはそれに反応して、すかさずソルトをかける。

スルツ 「くそつ。」 だがその攻撃は外れてしまった。

「落ち着いてください、マリサ。完全に不可視になったわけではありません。」

「そうだぜ姉ちゃん落ち着いて見れば、こんな風に、」 スカツ

「何やっているんだ全く。シユ」 ブンツ 榊原が蹴りを放った。

ドカツ

(なんで丈夫な皮膚?なんだこれは大して効いてないな。)

ブンツ ブンツ 怪物は自分に1番ダメージを与えた夕泊に向かって

鉤爪を振るった。

スルツ ザクツ 夕泊は1発は受け流すことに成

功したかももう一発を深く受けてしまった。

「っー。」 夕泊HP16↓10

「ユウドマリさん！」

「私は大丈夫です。それより早くあの怪物を。」

「分かりました。セイツ」 青年は再び蹴りを放つ

バギイ

青年の蹴りが命中し、怪物はよろめく

ブンツ マリサ・マイルズの拳が振るわれる

メキイ

ドサツ

その攻撃により怪物は倒れた。

「はあ、はあ、やったのか？」

その直後正気度の低い男性の詠唱が完了し魔法陣が薄れていったそれとともに怪物の姿も薄れて消えていった。

気がつくくと彼等は駅のベンチで眠っていた。時刻を確認すると逢魔時を少し過ぎたくらいだった。しかし正気度の低い男性に握られたから本が本当の事だと物語っていた。不思議な事に肉体の傷や疲労は消えていた。

向かった。一行はあのできごとのことをこころにのこしながらも列車に乗り込み目的地

番外編マリサ・ミイズルと神話の片鱗～The most famous detective's call

（聖川探偵事務所）

「は？博物館？一体どこの博物館よ。」

「名護戸市の名護博物館だぜ。」

「ああ、名護博物館か。確か三日間の間地底遺跡から発掘された異物が展示されているんだっただけ。」

「そうそう、それに実はこの前の福引で名護博物館のチケットを10枚当たったからみんなで行こうと、ん？どうした光輝？」

「いや、昔の中世的な口調の魔理沙が懐かしな、たんとなく思ったただけだ。」

「そうか。それでみんなどうする行くか？」

「僕は行こうと思う。最近研究室にこもりきりだったからね。」

「マリサも当然行くだろ、なら俺は行くよ。」

「そうだなせつかくこつちの方に来たんだから博物館くらい行ってもいいだろう。」

「僕は教授の行くところならどこへでも。」

「そうですね、みんなが行くと言うのなら私も行こうかしら。」

そして、くく

く名護博物館く

「さすがニユースで騒がれているだけあつて賑わつていますね。僕もオカルト作家としての情熱が騒ぎまくりですし、て、待つてくくださいよー。」

明野は興奮の友人達と離れている事に気づかなかつた。その時、

ドンツ

コツ、カラカラ

「あ、すいません。あ、あの落としましたよ。あ、」

明野は自分とぶつかった人に謝罪して、物を落とした事を伝えようとしたが、その時にはその人物はすでに何処かに行つていた。

「いちやたか、ん？これは何かの機会かな？かなり精巧な作りだな。つてこうしちやいられない、おーい皆んなー待つてくれー。」

「あ、ようやく来たか明野。」

「酷いですよー置いて行くなんて。」

「ごめん明野君ちよと悪ふざけが過ぎたよ。それより、君はあの発掘品の笛を見てどう思う？」

「そうですね、いかにもオカルトに出て来そうな笛ですね、教授はどう思ったんですか

？」

「何か、以外のモンスターを操れそんな笛だなと感じたよ、なぜだかはわからんがね。」
「あのレイムさん達は？」

「先に行つたけど。」

「そうですか。」

そんなこんながあり探偵事務所に戻つて来た一行。

「そうだ、皆んな今日は久しぶりに止まっていかないか？もちろん教授も。」

「いきなりだけど私はOKだぜ。もともと泊めてもらうつもりだったしな。」

「俺もホテル代が浮くなら何よりだ。」

「な、なら私も泊まろうかしら。」

「僕はなら僕も止まります。」

「私も今は一人暮らしだから大丈夫だが、本当にいいのか聖川君？」

「ええ、構いませんよ。それより学生時代に戻つたみたいで楽しみですよ。」

pm 11:58

「2のファイブカード。また私の勝ちだな。」

「教授本当にイカサマしてないんですか？作家からロイヤルストレートフラッシュだ
フォーカードや出していますけど。」

「何を行っているのかな？単なる運だよ。」

「まあまあ、光輝そんなこと言ったら私はAのファイブカードを出したことがあるぜ。」

「……」

「緋野村しゃん、いえ先生僕に剣術を教えてくりやさい。」

「いきなり何言っているんだ。剣術はそう気安く教えるものではないし、そもそも前権に興味なかっただろ。それと俺は酔っ払いに付き合う気は無いんだ。」

「ムニヤムニヤ、ケンセイ、好きー。」

pm12:00

その時突然眩しい光が発生した。それによって眠っていたアバーラインは目を覚ました。全員が元をたどってみると明野の半開きのカバンからだった。光は眩しさを増していき目が眩む程になった。

しばらくすると、眩しさがおさまりそこには1人の怪我をした男性が倒れていた。彼の服は現代にしては時代遅れな強いて言うなら探偵のような感じだった。

「え、誰？どういうこと？」

「あの光が関係しているのか？」

「そうかもしれないね。ドアや窓が開いた様子はなかったしね。」

「こんな事があるなんて。」

「おい、明野お前何を持って来た。」 グイ

そう言つて緋野村は明野の襟首を掴んで持ち上げた。

「ひつ、そ、それよりあの人どうにかしなくていいんですか？怪我してるみたいですし。」

《う、うーんここは？》

その問いには誰も返答しなかった、いやできなかつた。

《私の名はシャーロック・ホームズだ。ここはどこだ？》

ミイズル 現在正気度97↓97 聖川 現在正気度70↓69

アバーライン 現在正気度70↓70 緋野村 現在正気度70↓70 徐

手 現在正気度75↓75 明野 現在正気度55↓55

《ここは日本で彼の聖川君の探偵事務所です。ホームズさん。された私の名前はジョシュ マサヨシ、ジョシュがファミリーネームです。》

《情報ありがとう、Mrジョシュ。それより先程からあの作家の青年がかなり興奮しているようだが、どうやら貴方には他にも読み取った事があるようだ。それよりホームズさ

《作家？ああ、確かに彼は指にペンだこができていて、あまり動いてるような体型じゃ無いが、どうやら貴方には他にも読み取った事があるようだ。それよりホームズさ

んはどうしてこちらへ?》

その問いに対するホームズズの答えはこうだった。

スイスのライヘンバツハで稀代の犯罪者であるモリアーティとの戦いで滝に落ち、気づいたらここにいたと言う。

ちなみにこの時徐手がホームズズに他の全員の紹介をした。そんな時

ドサツ

《ホームズさん!》

《ちよつ、しつかりしてください。》

「落ち着くん、真斗君、レイム君。気を失つただけだよ。相当疲労が溜まっていた様だしね。しばらく休ませてあげよう、話ならまた後で聞けばいいんだから。」

「しかし、シャーロック・ホームズですか。俺は英語が話せないので教授達の会話はあまりわかりませんでした。気がつくか気になる単語がありましたね。」

「まあ、今日はホームズズさんをベッドに移動させて、もう寝ましょう、なんだかどつと疲れたわ。」

「お前は何もしてなかっただろうがレイム。」

その後彼らはホームズズに手当を施し、ベッドに運んでからそれぞれ寝袋やソファアールで眠った。

・翌朝・

マリサは何かの物音で目を覚ました。音のする方へ行つてみるとホームズがすでに起きて何かしている様だった。

《あの、ホームズさん何をしていらしてゐるんです?》

《この世界について調べてみたんだよ。全く奇怪な出来事に巻き込まれなものだ。》

といつてゐるホームズの側には事件の資料や雑誌、新聞などが乱雑になっていた。

(あれ、資料の中に日本語のものもあるけど読めたのかな?)

《あ、ホームズさん起きていらしたんですね。調子はどうですか?》

《おかげさまでこの通り良好だよ。君は応急手当てが得意らしいね。》

《ありがとう。ところでホームズさん昨日は貴方が途中で倒れてしまつて話が聞けませんでした。が今なら大丈夫ですか? 僕は貴方の様な観察力がないので貴方から色々聞く必要があるのです。》

《なるほど、ありがとうございました。実に興味深い話をありがとうホームズさん。ところでホームズさん聡明な貴方ならその資料の中からお知りになつてゐると思ひますがTVをご覧になりますか?》

《介入はできないにしても僕の興味を引く時間があるかもしれないという事だね。》

《ええ、そうです。近頃は平凡な事件しか放送していませんがそう行ったものこそ奇妙な場合場合がありますからね。》

《君は僕と大体同じ意見を持つている様だね。確かに一見奇妙な事件や大きな事件は動機がはつきりしていたりして単純になりがちだからね。》

(しかしホームズか。確かに実在説は聞いたことはあるがまさかな。)

《あのホームズさん付かぬ事をお聞きしますが貴方はベイカー街221Bに住んでゐるんでしたか?》

《その通りだよ、お嬢さん。そういえばまだ一人だけ眠っているここの主人も探偵だそうだね。》

《はい、でも彼の仕事は大体浮気調査や猫探しとかですけど。それとホームズさん貴方は恋愛感情を下らないと考えているという話は本当ですか。私は恋愛感情は生物として必要なものだと思うのですが。》

《その話は僕の伝記作家の作品を見たのかな。まあ確かにそう考えているよ。ああ、ジョシユさんTVをつけてもらえるかな?》

ピッ

徐手がテレビ

をつける

「はい、先ほども入りましたがニュースをを伝えします。昨夜名護博物館に何者かが

侵入し、地底遺跡から出土した笛が盗まれたとのこと。この笛は学術的価値が非常に高いと考えられており、……

そのアナウンサーの説明とともに映し出される現場となった博物館には赤いペンキで『Holmes! Look for me!』と記されていた。さらにその下には『End point of wisdom』と記されていた。

《モリアーティか。》

《何故そう思うのですか?》

ブブブブ

《なに、僕はあの装置が光ったと思ったたら現れていたんだろう。》 そう行つて

ホームズは机の上にあった明野が持ち帰った装置を指差した。

ブブブブ

《あの装置が時間を移動するものだとしたらモリアーティの奇妙な言動の説明がつくからね。ところでこの羽音はなんだろうね。》

バリント

その時窓を割つて一匹の生物が現れた。それはミルゴと呼ばれる神話生物だった。ただその姿は通常のものよりさらに醜悪で冒瀆的だった。

《なんと奇妙な生物だ。最もこんなに奇怪なもの標本にもできそうにないね。》 ホー

ムズ 現在正気度80↓79

《蟹でしようか?》 徐手 現在正気度75↓72

徐手はそう行つて眉を細めた。

「なんなんだあの生物は!」 緋野村 現在正気度70↓69

「ちよとさつきから煩いわ、よ。」 アバーライン 現在正気度70↓65

ボタンツとアバーラインは倒れた。

「レイム!」

ブンツ

シュ

ミ||ゴがハサミをふるつた。

《どうやら彼?は有効的じゃないらしいね。こちらからも反撃させてもらおうとしよ

う。》 ブンツ

ドゴオ

ミ||ゴ HP??↓??

《私も加勢します。》ブンツ

スカッ

徐手の蹴りが放たれた。 が外れた。

「くそ、早く取り出さないと。」 ガサゴソ

《ホームズさん今の時代は女性でも積極的に働いたり、戦つたりするんですよ、こんな

風にね!》 ガシツ

ブンツ

そう言つてミィズルはミィゴにソルトをかけた。

その攻撃はミィゴの意識を刈り取つた。と、そこへ聖川が現れた。

「おい、お前ら朝つばらからなにしているんだ、よ。」 聖川 現在正気度69↓68

「おいおい、一体なにがあつたんだ。」

「それは僕から説明するよ。」

聖川の疑問に徐手が答えた。

「そんな事があつたんですか。それにしてもこれ保険下りるのかな。あ、それとレイム起こしときますね。おいレイムー起きてくれ。」

《ジョシユ君僕はこれからあのメツセージ通り図書館に向かおうと思うのだがなにぶん日本語が読めなくてね、一緒に来てくれると助かるんだがよろしいかな?》

《図書館?、なるほどそういう事ですか、もちろんいいですとも。それと、さっきの事もありますし。ここにいる私の教え子たちも連れて行つてもよろしいですか? みんな色々と優秀でそこら辺の人間より遥かに役に立つてくれると思います。》

《確かにそれは心強いですな。》

《ところでどこの図書館か目星はついているんですか?》

《もちろんですとも。》

その後聖川がレイムを起こし一行は名護戸図書館に向かった。

く名護戸図書館裏口く

「休館日のようですね。どうやって入るつもりですかホームズさん。」

《「休館日のようですね。どうやって入るつもりですかホームズさん。」だそうですね。》
 《通訳ありがとうミイズル嬢。それでヒジリカワ君の質問だったね、どうやって入るか？今は状況から考えてなるべく早く解決したいと考えているんだ、ちよと手荒かもしれないけどこうさせてもらうよ。》

ガチャ、ガチャ

ホームズは鍵開けを試みた。

カ

チツ

《開いたようだね。さあ、行こう。》

く名護戸図書館く

しかし、図書館にモリアーティはおらず中は薄暗かった。

《どうしますホームズさんここではなかったようですね。》

《いや、ここのはずだ。》

《そうですね、確かに状況とあの記述から考えてここ以外だというのは考えづらいですからね。「というわけだみんな何かないか確かめるぞ」》

「なに見ているんですか聖川さん？」

「モリアーティ教授の記述だよ。」

『犯罪界のナポレオンであるモリアーティ教授はホームズの宿敵であると同時に、類まれなる才能とカリスマ性を持っており、犯罪者の師とも思われるだろう。その想像を超える起点さはまるで未来を予知してようだと言わしめられている』

まあ、特に得るものはなかったな。知っているような情報ばかりだったよ。ん？」

《あれホームズさんそんな顔をしてどうか致したんですか？》

「もしかしてこの記述が原因じゃないか。」

そう行つて聖川は手に持っていた本を指差した。

「まあ確かに《ホームズさんモリアーティのことについて教えてくれますか？》

《あの男は背が高く、顔立ちにおよそ教授らしきものを漂わせてる。だが同時に爬虫類のように奇妙に、いつでも左右に揺れて歩いていたよ。》

《ありがとうございます。》

「おいなんだよあれは、いつのまに!？」

全員が緋野村の叫びに反応してとある壁を見るといつのまにか、黄色いペンキで英語で《残念だな、ホームズ》と書かれていた。さらにその下には反転した文字が書かれており、何かの署名が置かれていた。

《これはchurchか。》

《この街で教会と言ったらカステラ教会だけです。》

《案内を頼めるかねジョシユ君。》

《ええ、もちろん。》

くカステル教会く

教会に着くと神父が困り果てていた。

「どうされたんですか？」

アバーラインがそう尋ねた。

「ああ、お嬢さん、実は今朝教会に犬の死骸が転がっていたんですよ。」

教会の中には神父の言葉通り犬の死骸が転がっていた。

《あの犬はどうやら大きな刃物で斬り殺されたようだね。》

《ん、何かありますね。》

ジョシユは手袋をして犬の死体の中を探った。

「痛っ！針が仕込まれていたのか。」 徐手 HP13↓12

そう言いながらジョシユは一枚の紙を取り出した。

紙切れには《Your story is also the end poi

nt here, I will go get your wisdom.》と書かれ

ていた。

《君の物語もここで終着点だ、君の叡智をもらいに行く、か、ん？》

パリン

全員がその後に反応して上を見るとそこには複数のミィゴが飛んでいた。

「今朝の奴らか、数が多いな。」 聖川 現在正気度68↓66

「おいおい、マジかよ。これは木刀持ってきてきて正解だったかな。」 緋野村 現在正気度69↓66

「おまえ、なにやら竹刀入れを持つてると思ったらそんなものを持つてきたのか。」

「ちよと待つてください！あれと戦うつていうんですか!？」 明野 現在正気度5

5↓52

「なんか、さっきので何か慣れたわ。」 アバーライン 現在正気度65↓63

《どうやら彼はここで僕に捕まって欲しいようだね。》 ホームズ 現在正気度79

↓77

《困りましたね。》 徐手 現在正気度72↓71

「先手必勝といくか。」 ダツ ブンツ

聖川は攻撃するために地上近くまで降りてきたミィゴに杖を振り下ろした。

ドスウ

ミィゴA HP??↓??

「ち、あまり効いていないか。」

「どいていなさい、フンツ！」

アバーラインの鋭い蹴りがミィゴに放たれた。

ドゴオ

ミィゴA HP?? ↓??

「あの一撃を耐えるなんてなかなかやるわね。」

《お嬢さんたちばかりにいい顔をさせるわけにはいかないね。》 ブンツ
 ホームズはミィゴにこぶし放ったがその攻撃は買わされてしまった。

「私に任せてくれ。」 ガシツ

ブンツ

ミィズルはミィゴにソルトをかけた。

ミィゴA HP?? ↓??

「どうやらあまり効いてないみたいだね。次は僕が」 ビュン

徐手はミィゴに鞭をふるった。

が捉えきれなかったようだ。

ブブブブ

ブンツ

スカツ

ミィゴたちの最初の攻撃は外れたがすぐ残り4体のミィゴの攻撃が放たれた。

ブンツ、ブンツ、ブンツ、ブンツ

「ちよ、全部私!？」

スカツ、スカツ、スカツ、スカツ

その攻撃も全て外れた、そ

してそのうちの一体にできた大きな隙をアバーラインは見逃さなかった。

ブンツ

ドゴオ

ミ||ゴB

HP??↓??

「うおおお！」 ビュン

聖川の攻撃が放たれた。

ドゴオ

「くそ、また効いていない。」

「ふっ！」 ビュン

ズバツ

緋野村は攻撃しても手応えのない相手に苛立つ

(何なんだこいつら？装甲でも身につけてるのか？)

そうこうしているとふと徐手の動きが止まったかと思うと鞭を捨ててミ||ゴの方に歩いて行った。

「|||」教授！「|||」

ミ||ゴ達は徐手を捉えるとそのまま飛び去って行った。

「そんな、教授、、、。」

《明野君ここらあたりで滝はないかい？なければ特に高いところを知らないかい？多分彼はそこに連れていかれたはずだ。》

《、、えつとここら辺で高いところというと電波塔です。》

その後明野が事情を説明し、一行は電波塔に向かった。

〈電波塔〉

空はすでに暗くなり太陽が沈み、あたりを月が照らしていた。そして、電波塔の最上階に彼はいた、黒い服を着た男モリアーティ教授だ、その後ろには徐手が倒れていた。

モリアーティはイギリス人であるはずなのに日本語で語り出した。

「まっていたよ、シャーロック・ホームズ」

彼の後ろには不可解な機械と銀色の円柱が置かれていた。そして口元には盗まれた笛が添えられていた。

「私の仕事はホームズ、お前の類稀なる知識を手に入れることだった。だがあの世界では難しくチャンスが巡ってこないと感じた私は、あの日！あのライヘンバツハの滝で決着をつけることに決めた！私が作った装置で魔笛が世に出るこの日にやってき、ミッゴを操ってお前の知識を手に入れよう！」

と高らかに笑い姿をおぞましいものに変貌させた。

「あ、ああ」 聖川 現在正気度 66 ↓ 65

「あ、ああ」 緋野村 現在正気度 66 ↓ 60

「ひっ、」 ミイズル 現在正気度 94 ↓ 90

「これはまずいわね。」 アバーライン 現在正気度 63 ↓ 59

「これはまずいわね。」

《反響動作か。まああんなのを見れば無理もない。》 ホームズ 現在正気度 77 ↓

さらに、笛の音によってミィゴが引き寄せられる。

「また、あの変な生き物を使おうつてのね、そうはさせないわ。」 バツ

ブンツ

アバーラインは素晴らしいジャンプしてハイキックを笛に放つ。笛はその攻撃に耐えきれずバラバラになった。

「くそ、いつまでビビっているわけにはいかないんだよ！」 ビュン ド

ゴオ

「今何かしたかな？」

（くそつ、何で丈夫なんだ殴った瞬間の感触が普通じゃない。）

《僕のバリツでなんとかなるといいんだが。》 ブンツ

スカッ

「そんなものか？こつちからもいかせてもらうぞ。」

ブンツ モリアーティはそう行ってハサミを振るつた。

ビュン

「そんな、単調な攻撃当たるものですか。」 ヒラッ

アバーラインはその攻撃を華麗に回避した。そして、お返しとばかりに強烈な蹴りを

放った。

ドゴオ

モリアーティ HP?? ↓??

「ぐっ」

「俺だつて。」 ビュン

ドゴオ

モリアーティ HP?? ↓??

「私だつて。」 ドカツ

だがその攻撃はモリアーティには通用しなかった。

「そろそろ、終わりにしたいんだがね。」

素晴らしいモリアーティはイス人の技術の産物である電気銃をかまえた。

ブオン、バチバチ

そしてホームズに向かって発射されたがその攻撃はホームズを捉えることはな

かった。

そして反撃にホームズの拳が放たれた。

ドカア、ドゴオ モリアーティ HP?? ↓??

《今のは効いたんじゃないかな?》

「やっぱり大きな奴の相手は大変ね。」 ブンッ

ドゴオ モリアーティHP?? ↓??

「もういつちよ！」

ブンツ

ドゴオ

モリアーティ??↓??

(くそ、まずいこのままでは押し負ける。)

「フンツ！」 ビュン

スカッ

「こんどこそ。」 ブンツ

ドカア

ブオン、バリバリ

「あぶねえー。」

(憲晴はまだ、反響動作を繰り返してる様ね、この戦闘への参加は望めないね。)

「いい加減に、倒れなさい！」

ブンツ

メキイ

「もういつちよ！」 ブンツ

ドゴオ

モリアーティHP??↓??

ビュン、聖川が杖を振るうが足がつつて外れてしまう。

ブンツ、ミイズルの蹴りが放たれるが蹴りを放つ距離を見誤ったのかペチンと音を
立てるのみだった。

ブンツ、ブンツ

ドカア

ドゴオン

モリアーティ HP??↓??

(まずい、まずいぞ、こいつらがこれほどとは早くなんとかしなければ。)

ブンツ

モリアーティのハサミが振るわれる。

ザクウ　そしてその一撃は聖川をとらえた。

「グッア」　ドサアツ　聖川　HP 14 ↓ 5

「光輝!!」

「こいつ!」　ブンツ　ドゴオ　ブンツ　ドゴオ

(ダメだ力が入らない。)

ビュン、ビュン　ホームズのごぶしが放たれる。

ズルッ　その一撃は相手の表面を滑ってしまった。

ブオン、バリバリ

「きやああー」　バチバチ　ドサア　ミイズル　HP 14 ↓ 5

「マリサア!!」

《おい、モリアーティなきつきから彼らばかり狙うんだい。》　その口調は穩

やかだったかホームズらしくなく激情がにじみ出ていた。

《簡単なことだ、君もすでにわかっているはずだ私はお前の知識を得ることが任務なのに不用意に傷つけるわけにはいかんだろう? 納得できていなかったのか?》

《ちよと、あんたそんな理由で私の親友を傷つけたの?》

《そうだかお嬢ちゃん。》

「殺す!」　ブンツ

ドゴオ

モリアーティ HP??↓??

それに反撃するようにハサミが振るわれる。

「キヤ、、え？」

だがその一撃を受けたのはアバーラインではなく彼女をかばうように立っているホームズだった。

《さつきは許してしまつたが君のような女性がギズついて倒れるのを放っておくわけにはいかないからね、ミイズル嬢も後で手当て押さなくては、、ね》 ガクツ

《ホームズさん!!》

「話は終わったかね、さてそろそろ死んでもらおうか」

ブンツ

モリアーティのハサミが振るわれる。

ガキイン

しかしその攻撃は間に入った

者の杖によつて防がれた。

「おい、レイム早くあいつを倒して、みんなの手当てをするぞ。」

「光輝！あんた大丈夫なの？」

「いや、正直かなり辛い。だがまだ戦えるさ、こんな風にな！」 ビュン

キイ

「ぐっ」（不味い、もう体がうまく動かせない、に、逃げられん。）

メ

「さっきのは効いたようだな。レイム！」

「分かっているわよ！」　ブンツ

ドゴオ

「ギイヤアアー……!!」

断末魔とともにモリアーティは倒れた。

「やった、な」　ドサア

「ちよと光輝しっかりして！」

レイムは倒れた聖川に駆け寄ったがどうやら、気絶しただけのようで呼吸、脈拍ともしっかりしていた。

「レイムさーん。」　ドタドタ

「明野！」　ガシツ　グイツ

アバーラインは明野の襟首を掴みねじり上げた

「あんた、どこに行ってたのよ？こっちではみんな戦ってなのよ。」

「そんなこと言われましても、僕は皆さんと違って戦えませんが足手まといにならないように離れたところにいたんです。」

「チツ、早く憲晴を正気に戻して、教授を起こしてみんなを手当てして救急車呼ぶわよ。」

「は、はい。」

・一週間後・

あのあとアバーラインはあの奇妙な機械が転送装置であることを知り、徐手やミイズルと協力してなんとか機械を確保し、ホームズが変えるための準備を完了していた。

そして、帰還の時、

《こんな奇怪な話、ワトソンは信じてはくれないだろう・・・だが楽しい時間ではあった》とホームズは楽しそうに笑っていた。

《お元気でホームズさん。》

《また、機械があればお会いしましょう。》

そしてホームズは帰還して行った。

そしてさらにその一週間後コナンドイルが描いたとされる、シャーロック・ホームズの番外編の原稿が発見された。そこには未来にやってきたホームズが何人の仲間と戦いながらモリアーティを倒すという奇想天外な内容が書かれておりそのタイトルは《過去からの訪問者より》

進展

192x年 9月 11日

とあるアーカム市内のレストラン

とある席に2人の若い男女が向かい合つて座つていた。

「あのエドガーさん、改まつてどうしたんですか？」

（も、もしかして、プ、プロポーズかしら、そういえばエドガーさん最近私と会つてい
る時顔が赤い気がするし、私の方をよくチラチラ見てるし、……）

「実はですね、社内のくじ引きで4人分の日本への旅行を当てましてね、僕はこの前
行つたばかりなんです、友人たちと親睦を深めるために行つたらどうかとアレックス
さんに言われましてね、それでもさエミリーさんさえよければいかかと思ひまして。」
「（なんだ、そういう話だったのか）へーそれは良かったですね、それで誰を誘つたん
ですか？」

「カールとこの前のことで親しくなつたあのマイルズさんです。」

「（マイルズ、）そうですか、それは良かったですね、では私はこれで失礼します。」ガ
タ 「待つてください。」

席を立とうとしたエミリーを青年が呼び止める。

「僕はあなたがいないと心が落ち着かないです。この前のことでそれがよくわかりました。」

「じゃあ、ミイルズさんはが入っているのはどういうことなんですか？」

「ああ、それはですね僕達は日本語が話せないじゃないですか？それで誰か通訳になれる人がいないかなと、思っていたら都合よく時間が空いていたみたいでお誘いしたんです。」

「そ、そうなんですか、私はてつきりエドガーさんがあの人に惚れているんじゃないかと思いましたよ。」

「まあ、そう思われても無理はないですね。ミイルズさんは顔立ちが整っていますしスタイルもかなりのものですね。それにあの人には好きな人がいるみたいですよ。」

「へー、どんなひとなんでしょうね。」

「ヒジリカワ・ミツテルという名前の探偵だそうですよ。」

「そうですか。それとエドガーさん私もやっぱりその旅行にご一緒させていただきます。」

約一ヶ月が

く横浜港く

「ようやく着きましたね。それでガイドの人はまだなんでしょうかエドガーさん？」
「ちよと待つてください、えつと予定では今から10分後に合流するそうです。」

「それでエドガー、その旅行どう行動する予定になっていんだ？」

「マイルズさんちよと待つてくださいね、えつと大まかに言うと4日間ほど東京で色々と行動した後、軽井沢へ向かうみたいです。」

「そうか。、それとカールはまだあの調子だな。」

「うっ、、オエツ」オロオロ

「ええ僕も彼が船に弱かっただなんて初めて知りましたよ。」

4日後

一行は帝都から数時間かけて軽井沢に向かっていた。

「向こうに着くまで暇ですし、何かお話ししませんか？」

「そう言う、エミリーの問いにスタンフォードが答えた。」

「そうだな、高校時代の話でもするか。」

「待つてくれ、高校時代の話と言ったら、絶対あの話を出すだろ。あれを話すのはやめてくれ。」

「あれって？」

「ああマイルズさんが知らないのも無理はありませんね。」

あーとかの話は、「お、この前の嬢さんたちじゃないか。」えっ、誰？」

「お久しぶりです次郎さん。貴方も旅行ですか？」

「まあな、知り合いが怪我して入院していたんだがその退院祝いで、羽場星温泉ついでに軽井沢から車で3時間くらいのところの秘境にあるっていう名湯に行こうと言うことになったんだよ。」

「へー、温泉ですか。凱度さん、行けそうですね？」

「別に特に問題はありませんが時間が潰れますよ？」

「問題ありません。あの3人も私が説得します。、、、3人ともお風呂やテルマエに興味ないか？」

「[[?]]」

軽井沢駅

「久しぶりだな、英一。退院おめでとう。」

「ありがとう、式波。それで後ろの人たちは？」

「紹介するよ、こちらは前日本に旅行に来た時知り合ったエドガー君とマリサ嬢とその友人のカールとエミリーさんだ。でこっちが俺の友人の円谷英一だよ。」

「(円谷英一？まさか、)初めまして円谷さん私マリサ・ミイズルと申します。」

そのような感じで一行が挨拶や話をしていると、円谷は辺りを見回し、

「おかしいな？ 15時半には宿の人が迎えに来るはずなのに……。俺、ちよつとその辺探してくるから、適当に軽井沢観光しててよあ、あと、今晚呑む酒でも買っておいでくれな。」

「行っちゃいましたね。まあとりあえず言われた通り酒を買って、何か話しましょう。」

「そうだな、じゃあ2人にあの時の話をしたのか？」

「いえ全然。」

「じゃあその時の話でもしようか、あ通訳頼む英語はまだ片言だからな。」

「それでだなその時蘭子が、「プロロロ」を迎えが来たみたいだな。さあ行こうか。」駅前では円谷が待つており、彼のそばには8人ほど乗れるバスが止まっていた。

「ありがとうございます。仕事でもないのに乗せてもらって。」

「いえ、いいんですよ。私も弟に会うために羽場星村に向かっているところでしたから。それにしても貴方は日本語が得意ですね。」

「ええまあ。母が日本人でしたからね。」

「そうなんですか。いやはや珍しい。」

「それよりも、羽場星村ってどんなところなんですか？例えば言い伝えとか。」

「羽場星村は「オロチさま」と呼ばれている龍神と「アマツミさま」という星神が祀ら

れている村です。なんでも昔、元々は暴れん坊のオロチさましかいなかったが、空から降りてきたアマツミさまが懲らしめたそうです。それからアマツミさまは空へと還り、その後は改心したオロチさまが村を守ったそうです。それと関係あるかわかりませんが大昔の大型生物の化石もよく出ているみたいです、それに最近は流れ星が多いように、」

一行がそのようにして会話を楽しんでいると突然

キツキイーーー

ガタン

バスが急停車した。

「な、なんだあれは!?!」

そう叫んだスタンフォードの視線の先には月明かりだけが照らす夜道、バスの前方から迫る大きな影があった。

「オ…オロチさまだあ!!」

民夫が叫ぶや否や、その巨大な影はバスのフロントガラスを突き破り、民夫を大きな顎で噛み砕く。

その姿は二本足で立つ羽毛の生えた大きなトカゲというものだった。怪物は、その10 mほどの巨体を揺らし、先ほどまで健在だった男を、ただの餌として貪り喰う。

「な、あ、」 ベックマン 現在正気度97↓95

「恐竜、、？」 ミイズル 現在正気度94↓92

「そんな、」 ペンドルトン 現在正気度66↓62

「マジかよ。」 スタンフォード 現在正気度89↓87

「やばいな、どうしよう。」 式波 現在正気度66↓64

「これは、まずいね。」 円谷 現在正気度80↓78

「くそっ」 バッ

「エドガー!？」

青年はすかさず懐にしまっていた45口径拳銃を取り出し怪物めがけて発砲した。

バンッ

その攻撃は怪物の頭に命中した。

「グイアアアアアア!!」 怪物 HP??↓??

「チッ、やるしかないか。」

それに次いでミイルズも拳銃を取り出し連続で発砲した。

パンッ、パンッ

2発の弾丸が怪物に命中し、怪物は悲鳴をあげてよろめく。

怪物 HP??↓??

「これでも喰らえ！」 ブンッ

式波 次郎は持ち物に入っていた鉄球投げつける。

ドコンッ

「ぐー。」

「対して聞いてないようだな。」

「がー！！」

ブオン

怪物がバスに向かって尻尾を振るう。

「飛び降りろ!!!」

全員がバスを飛び降りた直後バスを巨大な尻尾が捉える。

ドコオオン

「もう一発！」再び青年が発砲しようとするが な

カチッ

「なっ不発だと。」

が パンッ、パンッ

その2発の弾丸は確実に怪物の命を刈り取るには十分なものだった。

フラッ

スズン

「やったのか？」

その直後村の方角から赤い光が発せられ式波と恐竜を包み込んだ。

次の瞬間怪物は消え失せそこには式波だけが立ち尽くしていた。

「式波大丈夫か!？」

「次郎さん!!」

「はっ、いやだいたいじょうぶだ。」

その時村の方から1人の男性が駆け寄って来た。

「ここは危ない! こつちへ来るんだ!!」

男は一向に声をかけると村へ誘った。

〔羽場星村村長宅〕

一行は男に誘われ村長宅にやって来た。

「危なかったな。よくあの大きなトカゲに教われて無事だったもんだ……」

「あのあれは何だったんですか?」

その後ミイズルと円谷、式波は次のことを把握した。

- ・ 3日前、2つの流れ星が村に落ちた。1つは青く、もう1つは赤い。
- ・ 青い星は湖の中に、赤い星は裏の山に落ちた。
- ・ その日から、トカゲの怪物が村を占拠し、人や家畜を襲った。
- ・ あの大きなトカゲは村の入り口に多く、逃げようとしたものは皆やられてしまった。

・生き残った者も逃げ惑い、どこに行ったか、生きているかもわからない。

・彼の名前は『地元民継（ジモトタミツグ）』

・先ほどの運転手は彼の兄だった。

・村の建物も荒らされ、人が居られるのはこの家と宿くらい。

・村の中央には大きな湖。その畔には『大蛇（オロチ）神社』がある。

・湖の周りにはトカゲの怪物が特に多い。

・裏の山は手入れされておらず、人も滅多に立ち寄らない。

・そういえば、赤い流れ星が落ちた辺りに『天津己（アマツミ）神社』があつたはず。

・村の周囲を囲む森を抜けて外に出られないか探索していたところ今に至る。

その後ミイブルが3人にその内容を英語で伝えた。

「これからどうするかだがとりあえず生存者を探そうと思う。みんなそれで異論はないか、ないじゃあ準備して行動だ。」（それにしても、赤い玉と青い玉なんかどこかで聞いたような話だな。）

くとある家の前く

「じゃあまず俺が中を確かめて来るよ。」

「任せましたよ次郎さん。それじゃあ私たちはここで警戒してようか。」

「誰かいませんか、誰か」（買ひ物が食い荒らされているなこれはここにもし人がいたとしても。）

ガラ

式波は押入れを開けた。そこには一冊の本があった。

「神話の絵本？」

【神話の絵本】

むかーし、むかしの事です。大きなへびの『オロチ様』はいつも自分勝手に湖の中で暴れ回っていました。

そのせいで、湖から溢れる汚い水に村人たちは困り果てていました。

そんなとき、空から一つの赤い星が降ってきました。

星から溢れた光は『アマツミ様』の姿になって、オロチ様を懲らしめました。

オロチ様はもう悪さはしないと約束し、湖の底で静かに眠るようになりました。

アマツミ様は村人たちに、青い石をお守りとして渡すと、また空へと帰っていきました。

湖で眠るオロチ様は立派な龍となり、村には綺麗な水がたくさん湧くようになりました。

村人たちは、赤い星が降った場所と、オロチ様が眠る湖の畔に、お礼に神社を建て

ましたとき。

「赤い星ねえ、おっとそろそろ戻らないとな。」

「あ、次郎さんどうでしたか？」

「いや、1人もいなかったよ。代わりにちよと奇妙な話を見つけてね、」

「また赤い玉ですか。んー何か引っかけますね。まあ、今は生存者搜索を優先しましょう。」

その後一行は生存者を探すため宿に向かった。その途中で先ほどのものとは別の怪物に接触した。

それは、人よりも一回りほど大きなトカゲ。爬虫類のような鱗、鳥のような羽毛が所々体表を被う。その怪物は、大きな体には似合わぬ軽快な身のこなしで、一行の周りを跳ね回る。

「グルルル」

「またでましたね。」 ミイズル 現在正気度92↓92

「ここは俺に任せてくれ。」 式波 現在正気度99↓99

「1人でだいじょうぶなのか式波？」 円谷 現在正気度78↓78

「僕も戦います。」 ベックマン 現在正気度95↓95

「だそうですよ、次郎さん。」

「わかった、了解だ。」

「あわあわ、」 ペンドルトン 現在正気度62↓62

「だいじょうぶなのか？（あれ下手な神話生物よりは強いんじゃないか？まあ、もしも
の時はこれで援護するか。）」 スタンフォード 現在正気度87↓87

最初に動いたのは怪物だった。怪物は突出した式波に飛びかかり鉤爪で切り裂こうとする。

「あぶね、お返しだ！」 ブンツ 式波の鋭い蹴りが放たれた。

ドゴオン 式波はさらにラッシを浴びせる。

ドゴオン メキメキイ その一撃は怪物の命を刈り取っ

た。

「ふうう、大したことなかったな。ん、どうしたみんな固まって？」

「すごい、凄すぎですよシキナミさん！」

「（予想してたより、強かったな次郎。それと通訳って大変だな。）いやー見事なものでしたよ次郎さん。」

「凄まじい連続攻撃でしたよ。ジロウさん！僕も是非教えを請いたいですよ。」

「そ、そうか。」

く宿く

「誰も見当たりませんね。」

「しつ、どこからか音が聞こえる。、押入れか。」スツ

ミイズルが押入れの戸を開けると中には1人の女性がいた。

「ひつ、」

「だいじょうぶです。私たちは生存者を探しに来ました。お怪我はありませんか?」

「は、はいだいじょうぶです。」

「それで、他に生存者の方を知りませんか?」

「わ、私は竜骨を探しに来た王さんのお店として来たんです。途中まで一緒にいたけどどっかではぐれちゃて。」

「ありがとうございます。皆さん王さんとやらを探しましょうか。(王さんという大陸の人かな。)」

「そうだな。しかしそいつは連れて行っても大丈夫なのか? 村長宅にいてもらった方がいいんじゃないか。」

「そうですね。一旦あなたを村長宅に送りますね。」

一行は女性を村長宅に送った後大蛇神社へ向かう途中再び小型の怪物に遭遇した。

「三体ですか。ちよと厳しいですね。ですがやらなければならぬ。」　　パ

ンツ、パンツ

ミイズルは一体の怪物に向かって発砲した。1発目の弾丸は深々と突き刺さり、2発目はその体を掠めた。

「グイアアアア」　ダツダツ

その攻撃は怪物を倒すにいたらなかったが危険を感じた怪物は逃げ出した。

「喰らえ！」

バンツ

ヒユン

青年の放った弾丸は外れた。

「ツアア！」　次郎は怪物に向けて蹴りを放つ。

ブンツ

ドカン

ブンツ

メキメ

キイ

その攻撃は怪物の骨を砕き内臓を破裂させしに至らしめた。

「ふう、やるか」　スタンフォードはコルト・シングルアクション・アーミーを取り

出し怪物の頭めがけて発砲した

ドチュ

「ギイヤ。」

最後の怪物は逃げ出した。

「さあいきましようか。」

く大蛇神社く

正面に見える鳥居を越えた先に建屋が2つある。

「うーん、鍵がかかっているみたいです。」

「あの僕はもう1つの建物に鍵があるんじゃないかと思うんですけど。」

「多分そうでしょうね。」

「あのエドガーさん。」

「どうしたんですエミリーさん？」

「私たち帰れるでしょうか？」

「帰れますよ。今までだってそうだったじゃないですか。」

く社務所く

山積みになった様々な種類のお守りの在庫、本棚、机がある。

「ミイズルさん、こんなお守りを見つけたんですけど何かわかりますか？」

「ちよと見せてくださいエドガー君。うーん何かの魔法陣？（なんらかの特別な力を

感じますね。」

「ん、なんだこれ『神社の起こり』？」

【神社の起こり】

当社地には、元々蛇神の崇りを恐れた人々によつて建てられた社があつたといわれる。当社地には、元々蛇神の崇りを恐れた人々によつて建てられた社があつたといわれる。

当社地には、元々蛇神の崇りを恐れた人々によつて建てられた社があつたといわれる。それ以来、崇りは治まると同時に大地の恵みである聖水が吹き出すようになった。

そして、蛇神は大いなる恵みを齎す龍神として、この社で祭られるようになった。

「（普通に考えればかつて村に現れた優秀な技術者が土地を改良し、水害対策や温泉採掘をしたことが神話の元なのだろうが引つかかるな。）」

「あ、鍵だ。皆さーん鍵を見つけました、多分これで開くと思います。」

く本殿前く

カチリ

キイイ

そこには二本足で立つ大きなトカゲの木彫りの像がある。

進展 Second

ニオスⅡコルガイと名乗る男の言葉を聞いた一行は地響きが湖の方向からしているのに気づいた。

そして、見てしまう。湖から姿を現した巨大な龍神を。

それは、これまで見てきたどの怪物よりも遥かに大きい。

まさに天まで届くのではないかというほどの巨体。

冷静なものならば、その身の丈が50 m程はあると気づくだろう。その姿は、先ほど見た大蛇神社の本殿の像と良く似ていた

村中から集まってきた怪物たちを全て飲み込み、その巨体を力強く震わせる。

「なんだよ、あれ。」バックマン 現在正気度95↓94

「あ、ああ。」ペンドルトン 現在正気度62↓58

「これはまずいな。」スタンフォード 現在正気度87↓85

「あー怪獣だ。私の人生ここで終わったかな。まだキスもしてなかったなー。」ミイ
ズル 現在正気度92↓89

「なんなんだあの生物は!？」 円谷 現在正気度78↓76

「……」 式波 現在正気度99↓98

式波 次郎は赤い光に包まれた時のことを思い出す。

赤い光に包まれた瞬間、次郎の精神に響いてくる声があった。

「私は遠き星より来るもの。然るべき時、然るべき場所で、君に力を授けよう……」
いつの間にか次郎の懐には大きめのペンライトのようなものが入っていた。

一行に巨大な龍神が迫ってきた。誰もその場から動けなかった、だがそのとき一行の目の前に神々しい銀色の光が煌めいた。

闇夜に煌めく輝きは、やがて何か大きな姿を構築するかのよう収束していく。

その輝きを放つ銀色の肉体には、炎のごとく赤い文様が、熱い血潮のように走っている。

そして胸の中央には一際美しく力強い輝きを放つ青い宝玉が宿っている。

そう、禍々しい龍神の前にそびえ立つのは……光の巨人……

「（これまなまウルトラマンじゃない？ということはさっきの赤い光はやっぱり。頑張ってくれよ次郎さん。）」

そして、戦いが始まる。

「前に似たようなことがあったような。」 ベックマン 現在正気度94↓9

1

「くるぞ気をつけろ！」 円谷 現在正気度76↓76

「(あれに勝てるかな?でもやるしかないか)」 ミイズル

現在正気度89↓89

「(ニオス・コルガイか、どこかで聞いたような。)」 スタンフォード 現在正気度85

↓85

「何よ、あれ。」 ペンドルトン 現在正気度58↓58

「はっ、」 ダツ

「カール!!」

ブオン バケモノのこぶしがスタンフォードに向かって振るわれる。

彼はとっさに拳銃による受け流しを試みる。

「ぬお、がっ」 バキンツ

しかしその攻撃の威力は銃を破壊してもなお止まるものではなかった。

スタンフォード HP14↓9

バンツバンツ

ドス、ドス

「ぐお、なんだ?」 バケモノ HP??↓??

攻撃を受けた怪物が振り返るとそこには銃を構えた青年が立っていた。

「貴様!」「私を忘れてもらったら困るぜ。」ぐおつ」 ドサツ

バケモ

ノ HP??↓??

「これでも食らいなさい。」 パン

ペンドルトンも射撃するがその攻撃は虚しく外れた。

「うおおおお!」

「かーる?!」

スタンフォードは起き上がるとバケモノの方へ走っていきそのまま拳を振った。

「ふん、他愛ない。」 スルツ

簡単に受け流されてしまった。

「まあ、何かの縁だ最初にお前から殺すことにしよう。」

ブンツ ドゴオ

「グハアツ」 ドサツ スタンフォード HP9↓2

「カール!くそつ。」 バンツ、バンツ

ドチュ バケモノ HP??↓??

「ぐ、貴様今のは痛かったぞ。」

「よそ見してもいいのかな?」

「なに、しまった。」 バケモノHP??↓??

「今度こそ、」パン

「そうなんでも何度も食らってたまるか!」

バケモノはペンドルトンが放った弾丸を回避した。

「だが貴様にはここで死んでもらおう。」 ブンツ

ペンドルトンにバケモノの長い尾が振るわれる。

「きゃ、、、 あれ?」

だがいつまで立っても衝撃が来ることはなかった。

「エミリーを傷つかせるものか、ゴフツ」 ポタポタ

ベックマン HP15↓7

「エドガーさん!」

「うおらっ!」 ビュンそのまま青年は蹴りを放つ

ドゴオ 「ぐお、」 バケモノ HP??↓??

「よくやったエドガー」 ミイズルは青年をねぎらいバケモノに向かって発砲した。

「うおおおお!」 ヒュンヒュン

バケモノは体をひねってなんとか避ける。

「グルルルがあ」 ブンツ 龍神の巨大な赤振るわれその攻撃は巨人をとらえた。

「ウワア」 ドドオン 巨人HP146↓76

さらに龍神は倒れた巨人を踏みつける。

ドン「ウオオウ」 巨人 HP76↓9

「まずいなこのままじゃあいつらに負ける。どうする？ そうださつき見つけたこのお守りを、、）当たれえええ！」 ビュン

ミイズルは神社で見つけたお守りを投擲した。

カツン そのお守りは本来持っている力を発揮し龍神の皮膚を抜く

力を放った。

「ガア！」

その攻撃を受けたミイズルの方へ振り返った龍神は振り返った。そしてそれが命取りとなった。

龍神が目を離れた際に巨人は起き上がり、必殺とも言える攻撃を放とうとする。

「ハツ、ハアアア、デユア！」

巨人のこぶしから凄まじい火球が放たれる。

ボオオ「グイギャー！！！」

龍神は炎に包まれ崩れ落ちた。それと同時にバケモノも崩れ落ちた。

「あつ終わったのか?」

いつの間にか空は明るくなり始めていた。

生き残った人がいたとしても、村は壊滅した現状、ほどなく滅びる運命だろう。

「カール、今治してやるからな。波紋。」 青年はスタンフォードの骨を元の位置

に戻し波紋を流した。

「う、あ、此処は?」 スタンフォード HP2↓4

「カール良かった、」ドサツ

「エドガーさん! マリサさん私の荷物の中に応急キットがあるはずですからそれを取ってください。」

円谷 英一と式波次郎は共にいた。

「こんなこと話しても誰も信じてくれないだろうな…でも、俺は忘れない……」

「英一、」

そして、冒険は終わり一行はそれぞれ帰路につく。

「ポストン市内の高級レストラン」

「エドガーさん実は私あなたに話したいことがあるんです。」

「奇遇ですね。僕もですよ。」

「じゃあ一緒に言いますしうか。」

「僕（私）と結婚してください。」